

山遺跡（第6・15・16・19地点）

市内遺跡群発掘調査報告書XXXⅡ

2025

白岡市教育委員会

山遺跡（第6・15・16・19地点）

市内遺跡群発掘調査報告書XXXII

2025

白岡市教育委員会

序

このたび白岡市教育委員会では、『山遺跡（第6・15・16・19地点）』の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

白岡市は都心への通勤圏ということもあり、平成以降住宅やマンション建設が相次いできました。目覚ましい人口増加を背景に、平成24年10月には単独で市制を施行いたしましたが、目を転じますと郊外には、まだまだ緑豊かな田園風景が広がっています。

今回報告します山遺跡の調査は、これまで19次にわたる発掘調査を実施し、大きな成果をあげて参りました。特に、今から約4000年前の縄文時代中期の大集落として注目を集め、その豊富な出土資料から白岡市を代表する縄文時代の集落遺跡であることがわかってきました。今回の調査では縄文時代中期の住居跡を7軒発見するなど、今まで蓄積された実績をさらに補強する調査成果をあげることができました。

教育委員会では、地域文化の特色を生かしながら、あらゆる機会と場所での生涯学習を目指す「白岡らしさの発見と創造」を目標に掲げております。当報告書が市民の皆様や学校等関係機関の方々に広く活用され、郷土白岡の再発見と埋蔵文化財保護のご理解につながれば幸いに存じます。

最後に、今回の発掘調査及び報告書作成に当たり、地権者や事業主様、地域の方々には格別のご支援とご理解を賜りました。ここに心より厚く御礼申し上げます。

令和7年3月

白岡市教育委員会

教育長 横松 伸二

例 言

- 1 本書は、埼玉県白岡市内に所在する山遺跡（第6・15・16・19地点）の発掘調査報告書である。
- 2 調査地点所在地は、以下のとおりである。
山遺跡（第6地点）：白岡市白岡782-1の一部、783
山遺跡（第15地点）：白岡市白岡750-1の一部
山遺跡（第16地点）：白岡市白岡785-1
山遺跡（第19地点）：白岡市白岡737-14、-15、-19
- 3 発掘調査は、白岡市教育委員会と白岡市遺跡調査会が主体となって実施した。第15地点の調査費用は阿部 正弘氏が、第16地点の調査費用は井上 敏夫氏が負担した。それ以外の調査費用及び整理作業費用は白岡市教育委員会が負担した。
- 4 調査期間は、以下のとおりである。
山遺跡（第6地点）：平成12年6月12日から平成12年9月8日まで
山遺跡（第15地点）：令和3年1月13日から令和3年2月10日まで
山遺跡（第16地点）：令和3年10月19日から令和3年11月4日まで
山遺跡（第19地点）：令和5年11月14日から令和5年11月28日まで（国庫補助事業）
- 5 指示通知番号は、以下のとおりである。
山遺跡（第6地点）：平成12年6月7日付け教文第3-134号（指示）
平成12年6月7日付け教委第307号（通知）
山遺跡（第15地点）：令和3年1月7日付け教文資第5-1523号（指示）
令和3年1月7日付け教文資第2-23号（通知）
山遺跡（第16地点）：令和3年10月12日付け教文資第5-1465号（指示）
令和3年10月15日付け教文資第2-49号（通知）
山遺跡（第19地点）：令和5年10月25日付け教文資第5-1390号（指示）
令和5年11月10日付け生学第645号（通知）
- 6 発掘調査は、第6地点を松崎 慶喜と入江 正宏が、第15・16地点を杉山 和徳が、第19地点を杉山と爲國 翠子が担当した。
整理作業及び報告書作成作業は、奥野 麦生と杉山が担当した。
- 7 遺物の実測は、奥野が担当し、青木 美代子と増田 香織の補助を得た。
- 8 本書の執筆分担は以下のとおりである。
Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ：杉山
Ⅲ：奥野
Ⅳ：パリオ・サーヴェイ株式会社
- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の諸氏及び諸機関から御指導と御助言を賜った。
板垣 時夫、鬼塚 知典、金子 直行、小宮 雪晴、篠田 泰輔、鈴木 敏昭、関 絵美、田中 和之、細田 勝、守谷 健吾、油布 憲昭、渡辺 清志。

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、埼玉県教育委員会文化財・博物館課、
白岡市文化財保護審議会、東部地区文化財担当者会（50音順、敬称略）。

- 10 発掘調査及び整理作業にあたっては、下記の方々の参加協力を得た。

青木 美代子、池田 ひろ枝、石井 匠、江原 ウメ子、大久保 つね子、大野 美沙子、小野 順一、
折原 奈美子、桂 都、金子 悦子、川島 みつ、興野 明夫、黒田 雅之、坂田 玲子、佐藤 利勝、
田中 玉緒、下田 富士子、末次 雄一郎、菅原 春男、高橋 美和、高橋 安代、竹内 玖仁代、
丹下 幸男、寺岡 百合子、鳥海 恵子、中尾 亜子、長倉 知以子、中山 敏夫、藤巻 良雄、
細井 まさ子、堀田 勤一郎、横島 武二、増沢 勝実、増田 香織、水澤 和子、森本 美代子、
蓬田 富江、山田 登、渡邊 宏士朗、渡辺 トシ子、渡辺 英子（50音順、敬称略）。

- 11 調査組織は以下のとおりである。

調査組織（令和6年度）

調査主体者	白岡市教育委員会
事務局	教 育 長 横松 伸二
	教 育 部 長 長谷川 亘
	生涯学習課長 小船 伊純
	生涯学習課長補佐 小林 聡一
	文化財保護担当主査 杉山 和徳（調査担当）
	同 主 任 専 門 員 奥野 麦生（調査担当）
	同 主 事 田中 優起（調査担当）

凡 例

- 本書で用いる方位は国土座標の方位で、標高は海拔を表す。
- 使用した基準点と遺跡原点（日本測地系平面直角座標第9系）は以下のとおりである。
 $X=977.071\text{m}$ 、 $Y=-15,468.809\text{m}$ （5Aコウ107）
 $X=1,007.000\text{m}$ 、 $Y=-15,515.000\text{m}$ （遺跡原点）
 巻末抄録の経緯度は遺跡原点を世界測地系に変換したものである。
- 本書で掲載した図版の縮尺は原則として以下のとおりである。
 遺構：1/60 遺物：土器実測図・拓影図・石器実測図1/3
- 挿図と表中の略号は以下のとおりである。
 H：住居跡 SI：堅穴状遺構 SK：土坑 FP：炉穴 SD：溝跡 SX：不明遺構 P：ピット
- 遺物の観察表において残存値には（ ）を付して表記した。

目 次

序	(6) 不明遺構	66
例言	(7) 調査区出土遺物	67
凡例	3 第15地点の遺構と遺物	85
目次	(1) 土坑	85
	(2) 調査区出土遺物	86
I 調査の概要	4 第16地点の遺構と遺物	89
1 調査に至る経緯	(1) 住居跡	89
2 調査の経過	(2) 土坑	89
II 位置と環境	(3) 調査区出土遺物	89
1 遺跡の立地と地理的環境	5 第19地点の遺構と遺物	92
2 歴史的環境	(1) 土坑	92
III 調査の成果	(2) 調査区出土遺物	96
1 遺跡の概要と調査地点の様相	IV 自然科学分析	97
2 第6地点の遺構と遺物	1 山遺跡（第6地点）出土炭化材の 自然科学分析	97
(1) 住居跡	V 考察	101
(2) 竪穴状遺構	1 山遺跡（第6地点）第5号 住居跡について	101
(3) 炉穴		
(4) 土坑	写真図版	
(5) 溝跡	報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 山遺跡と周辺の遺跡分布図	6	第11図 第3号住居跡出土遺物 (1)	17
第2図 山遺跡の位置と発掘調査区	7	第12図 第3号住居跡出土遺物 (2)	18
第3図 第6地点全測図及び土層断面図	8	第13図 第4号住居跡	19
第4図 第1号住居跡	9	第14図 第4号住居跡出土遺物	20
第5図 第1号住居跡出土遺物	10	第15図 第5号住居跡	22
第6図 第2号住居跡	11	第16図 第5号住居跡遺物分布図	23
第7図 第2号住居跡出土遺物 (1)	12	第17図 第5号住居跡出土遺物 (1)	24
第8図 第2号住居跡出土遺物 (2)	13	第18図 第5号住居跡出土遺物 (2)	26
第9図 第3号住居跡	15	第19図 第5号住居跡出土遺物 (3)	28
第10図 第3号住居跡遺物分布図	16	第20図 第6号住居跡	29

第21図	第1・2号堅穴状遺構……………	31	第44図	調査区出土遺物 (3)……………	71
第22図	第1～6号炉穴……………	33	第45図	調査区出土遺物 (4)……………	72
第23図	堅穴状遺構・炉穴出土遺物……………	35	第46図	調査区出土遺物 (5)……………	73
第24図	第1～10号土坑……………	37	第47図	調査区出土遺物 (6)……………	75
第25図	第11～22号土坑……………	39	第48図	調査区出土遺物 (7)……………	76
第26図	土坑出土遺物 (1)……………	41	第49図	調査区出土遺物 (8)……………	78
第27図	第23～31号土坑……………	43	第50図	調査区出土遺物 (9)……………	79
第28図	土坑出土遺物 (2)……………	45	第51図	調査区出土遺物 (10)……………	80
第29図	第32～43号土坑……………	47	第52図	調査区出土遺物 (11)……………	82
第30図	土坑出土遺物 (3)……………	49	第53図	調査区出土遺物 (12)……………	84
第31図	第44～50号土坑……………	51	第54図	第15地点全測図……………	85
第32図	土坑出土遺物 (4)……………	53	第55図	第69・70号土坑……………	86
第33図	土坑出土遺物 (5)……………	54	第56図	土坑・調査区出土遺物……………	87
第34図	第51～61号土坑……………	57	第57図	調査区出土遺物 (13)……………	88
第35図	土坑出土遺物 (6)……………	59	第58図	第16地点全測図及び遺構図……………	90
第36図	第62～68号土坑……………	61	第59図	第16地点出土遺物……………	91
第37図	土坑出土遺物 (7)……………	62	第60図	第19地点全測図……………	92
第38図	第1号溝跡……………	64	第61図	第72～88号土坑……………	94
第39図	溝跡出土遺物……………	65	第62図	第19地点出土遺物……………	96
第40図	溝跡・不明遺構出土遺物……………	66	第63図	炭化材……………	100
第41図	第1号不明遺構……………	67	第64図	第5号住居跡の出土遺物と 柱穴の位置関係……………	102
第42図	調査区出土遺物 (1)……………	68			
第43図	調査区出土遺物 (2)……………	69			

表 目 次

第1表	周辺遺跡地名表……………	4	第8表	土坑出土石器計測表……………	63
第2表	第1号住居跡出土石器計測表……………	10	第9表	第6地点調査区出土石器計測表……………	83
第3表	第3号住居跡出土石器計測表……………	20	第10表	第69号土坑出土石器計測表……………	86
第4表	第4号住居跡出土石器計測表……………	21	第11表	第15地点調査区出土石器計測表……………	88
第5表	第5号住居跡出土石器計測表……………	29	第12表	放射性炭素年代測定及び 樹種同定結果……………	100
第6表	第2号堅穴状遺構出土石器計測表……………	32			
第7表	第4・5号炉穴出土石器計測表……………	34			

写真図版目次

図版 1	掘削作業状況 (1)		第22号土坑
	掘削作業状況 (2)		第25号土坑
	実測作業状況 (1)	図版10	第29号土坑
	実測作業状況 (2)		第30・31号土坑
図版 2	第6地点調査区北半部全景		第36号土坑
	第6地点調査区南半部全景		第38号土坑
図版 3	第1号住居跡		第40号土坑
	第2号住居跡		第45号土坑
	第3号住居跡	図版11	第51号土坑
図版 4	第3号住居跡遺物出土状況		第52・53号土坑
	第4号住居跡		第56・57号土坑
	第4号住居跡埋甕		第61・62号土坑
図版 5	第5号住居跡		第66号土坑
	第5号住居跡遺物出土状況		第68号土坑
	第5号住居跡焼土面検出状況	図版12	第1号溝跡
図版 6	第6号住居跡炉		第1号溝跡土層断面
	第1号竪穴状遺構		第1号不明遺構
	第2号竪穴状遺構	図版13	第1号住居跡出土遺物
図版 7	第1号炉穴		第2号住居跡出土遺物 (1)
	第2号炉穴		第2号住居跡出土遺物 (2)
	第3号炉穴	図版14	第3号住居跡出土遺物 (1)
	第4号炉穴		第3号住居跡出土遺物 (2)
	第5号炉穴		第4号住居跡出土遺物
	第6・7号炉穴		第5号住居跡出土遺物 (1)
図版 8	第1号土坑	図版15	第5号住居跡出土遺物 (2)
	第2号土坑	図版16	第5号住居跡出土遺物 (3)
	第3号土坑		竪穴状遺構・炉穴出土遺物
	第4号土坑		土坑出土遺物 (1)
	第5号土坑		土坑出土遺物 (2)
図版 9	第11号土坑	図版17	土坑出土遺物 (3)
	第12号土坑		土坑出土遺物 (4)
	第13号土坑		土坑出土遺物 (5)
	第14号土坑		土坑出土遺物 (6)
	第18号土坑	図版18	土坑出土遺物 (7)

	溝跡出土遺物		第15地点調査区南半部全景
	溝跡・不明遺構出土遺物	図版22	第69号土坑
図版19	調査区出土遺物 (1)		第70号土坑
	調査区出土遺物 (2)		土坑・調査区出土遺物
	調査区出土遺物 (3)		調査区出土遺物 (13)
	調査区出土遺物 (4)	図版23	第16地点調査区全景
	調査区出土遺物 (5)		第7号住居跡炉
図版20	調査区出土遺物 (6)		第71号土坑
	調査区出土遺物 (7)		第16地点出土遺物
	調査区出土遺物 (8)	図版24	第19地点調査区全景
	調査区出土遺物 (9)		第72・73・79・85号土坑
	調査区出土遺物 (10)		第75・76・80・86号土坑
図版21	調査区出土遺物 (11)		第19地点出土遺物
	調査区出土遺物 (12)		
	第15地点調査区北半部全景		

I 調査の概要

1 調査に至る経緯

白岡市は埼玉県東部に位置する総面積24.92km²の市で、東西約10km、南北約6kmと東西方向に長い。市域の中央部を南北にJR宇都宮線（東北本線）、東北新幹線、東北自動車道等が貫き、JR白岡駅・新白岡駅周辺や主要地方道（県道）さいたま栗橋線沿いに市街地が形成されている。しかし市街地外縁には水田や畑地、特産の梨の畑等が営まれ、水と緑の豊かな光景が広がる。

昭和29年に篠津村と日勝村及び大山村の一部の3村合併により誕生した白岡町は、当初純農村的な町であった。しかし、昭和33年の東北本線の電化、同40年代初頭の県道大宮・栗橋線（現さいたま栗橋線）や国道122号など主要道の開通などをきっかけに、都心から40km圏内である当市はベッドタウン化が顕著となった。平成以降は駅周辺にマンションや集合住宅の増加が目立ち、山林は分譲宅地に姿を変えつつある。中高層のマンション開発も進み、今後も市域における開発の激化が予想される。

また、平成22年度には、市域北部で首都圏中央連絡自動車道（圏央道）と東北自動車道を接続するジャンクション建設（久喜白岡ジャンクション）が完了し、交通網の発達が目ざましい。人口の増加を背景に、平成24年10月には市制を施行した。

このような情勢のなか、白岡市教育委員会では公共及び民間の開発事業と埋蔵文化財保護の調整に努めてきた。開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）に該当する場合は事前に試掘調査等を行い、遺跡の破壊が免れない場合には事前に発掘調査による記録保存を実施している。今回報告する山道跡（第6・15・16・19地点）の発掘調査は、以下の経緯で調整された。

2 調査の経過

山道跡（第6地点）は、山林抜根整地計画に伴い平成12年5月30日に実施した試掘調査の結果を受け、同年度中に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の西寄りに位置し、標高は約15mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成12年6月12日	表土除去、周辺環境整備
6月15日～9月6日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
9月8日	埋め戻し作業、調査終了

山道跡（第15地点）は、個人住宅建設計画に伴い令和2年7月16日に実施した試掘調査の結果を受け、同年度中に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の南西隅に位置し、標高は約15mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

令和3年1月13日	調査区北半部表土除去
1月14日～16日	周辺環境整備、基準杭設定
1月19日～22日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
1月26日・27日	排土反転、調査区南半部表土除去
1月28日～2月4日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業

2月10日 埋め戻し作業、調査終了

山遺跡（第16地点）は、宅地造成計画に伴い令和3年7月8日に実施した試掘調査の結果を受け、同年度中に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の西寄りに位置し、標高は約15mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

令和3年10月19日 表土除去、周辺環境整備

10月20日～26日 遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業

11月4日 埋め戻し作業、調査終了

山遺跡（第19地点）は、個人住宅建設計画に伴い令和5年9月20日に実施した試掘調査の結果を受け、同年度中に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の中央やや東寄りに位置し、標高は約15mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

令和5年11月14日・15日 表土除去、周辺環境整備

11月16日～24日 遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業

11月28日 埋め戻し作業、調査終了

II 位置と環境

1 遺跡の立地と地理的環境

山遺跡の位置する地域は、近世村名をとって白岡地区といわれ、地形的には大宮台地白岡支台上にある。白岡支台は久喜市除堀付近から、当市の篠津地区、白岡地区、小久喜地区を経て、蓮田市黒浜付近まで南北約9kmにわたって展開している。支台の東側に広がる沖積地は「日川筋」と呼ばれる利根川水系の旧河道である。西側には元荒川の沖積低地が広がっている。

白岡支台の特徴は、北部と南部で標高や低地との比高差が異なることである。北部では標高12m、低地との比高差は1m程と低平なのに対し、南部では約15～16m、比高差5～6mと明瞭な崖線を形成する。これは埼玉県加須市を中心とする関東造盆地運動に起因するといわれている。

また、支台の東縁と西縁の台地形状も対照的で、西縁は支谷が発達し切り立った崖線を形成するのにに対し、東縁は沖積低地との差が不明瞭となるという特徴をもつ。

2 歴史的環境

大宮台地白岡支台上に展開する遺跡の内、山遺跡周辺の代表的な遺跡を通時的に概観する。

旧石器時代の遺跡としては、層位的な出土ではないものの、入耕地遺跡をはじめ白岡支台西縁部の山遺跡やタタラ山遺跡、篠津地区の中妻遺跡や小久喜地区の鬼窪尾張繁政館跡などで、ナイフ形石器や角錐状石器等が出土している。

縄文時代は早期から晩期までの遺跡がみられる。縄文時代早期初頭の撚糸文期の資料は、篠津の中妻遺跡やタタラ山遺跡などで検出されるが、遺構の確認事例はない。条痕文期の事例では、野島式期から茅山上層式期まで比較的検出量も多く、多数の炉穴や住居跡の検出事例もあり、白岡支台に本格的に人々の暮らしの痕跡が残され始める時期だと見ることができる。

縄文時代前期初頭の花積下層式期では、タタラ山遺跡で70軒に及ぶ住居跡などが検出され、埼玉県下でも屈指の規模の集落であったことが判明した。同遺跡の豊富な遺構、遺物量、ことに造形豊かな石製装飾品群の出土は、今後の該期文化の研究を強力に推進するものとなろう。前期後半以降では、元荒川左岸最奥貝塚として知られる正福院貝塚を擁し、昭和62年の正福院本堂の発掘調査では、黒浜式期の住居跡2軒が検出されている。また、諸磯b式期に茶屋遺跡やタタラ山遺跡で住居跡や土坑等が検出されるものの、集落規模は縮小傾向にある。

再び集落遺跡が確認されるようになるのは、縄文時代中期後半の加曽利式期からで、山遺跡をはじめ、沖山西遺跡やタタラ山遺跡などでも一定規模の集落の展開が明らかになっている。

縄文時代後期から晩期になると、遺跡数は限定されるものの、一遺跡において膨大な量の遺物を伴うようになる。昭和26年に國學院大學考古学会が発掘調査を行ったことで著名な入耕地遺跡は、正福院貝塚との間に入る小支谷の谷頭を囲むように環状盛土遺構を形成しており、堀之内式期から安行3a～3d式期の遺物が確認される。

弥生時代から古墳時代にかけては遺跡分布が希薄になる。古墳時代前期では入耕地遺跡や茶屋遺跡で

住居跡が認められ、一定規模の集落規模の展開が窺われるほか、正福院貝塚では方形周溝墓が検出されている。一方、古墳時代中・後期は中妻遺跡や神山興善寺遺跡で住居跡が数軒検出される程度である。

奈良・平安時代では、中妻遺跡が居住域及び生産域の中心であったと考えられる。中妻遺跡では精錬作業を含む鍛冶作業を行っていた8世紀代の鍛冶工房跡が検出された。山遺跡や鬼窪尾張繁政館跡においても同時期の木炭窯跡が検出されており、鍛冶関連遺構への炭の供給が想定される。

中世では、入耕地遺跡で堀に囲まれた14～16世紀の館跡とともに舶載陶磁器類が多数出土している。また、中妻遺跡においても掘立柱建物跡群や大規模な堀が検出されている。白岡支台は中世の騎西郡に属し、武蔵七党の野与党の有力一族、鬼窪氏が本貫地としたといわれる。遺跡近辺に存在する白岡八幡宮や正福院、篠津久伊豆神社などは、草創や社殿造立に同氏との関わりが伝承されている。

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	発掘調査(年度)
1	山遺跡	白岡字山	旧石器、縄文中～後、古墳前、奈良・平安、中世、近世	昭和62・平成2・9・11・12・18・21・23・25・27・令和元・2・3・4・5
2	中妻遺跡	篠津字中妻・神山・磯・宿	縄文早～後、古墳前～後、奈良・平安、中世、近世	平成12・14・16・18・21・22・24・25・26・27・28・29・令和元・2・3・4
3	神山興善寺遺跡	篠津字神山・白岡字東	縄文前・中、古墳中～後、中世、近世	昭和51・平成5・12・17・25・26・29・令和元
4	西下谷遺跡	白岡字西下谷・東	縄文中、古墳前	
5	白岡東遺跡	白岡字東	縄文早・前・後、中世	
6	七カマド遺跡	白岡字東下谷	縄文後、中世、近世	平成22
7	正福院貝塚	白岡字茶屋	縄文早～晩、古墳前、中世、近世	昭和62・平成13
8	入耕地遺跡	白岡字茶屋・東	縄文早・前・後・晩、古墳前、中世、近世	昭和26・平成3・4・7・15・16・17・19・23・25・28・30・令和2・3
9	茶屋遺跡	白岡字茶屋	縄文早・前・後、古墳前	昭和57・平成6・8・13・14・18・令和3・6
10	新屋敷遺跡	白岡字茶屋	縄文早～後、平安、近世	平成6・令和元
11	タタラ山遺跡	白岡字山	旧石器、縄文中～後、古墳前、奈良・平安、中世、近世	昭和59・平成4・6・11・12・13・25・29・令和2・3
12	鬼窪尾張繁政館跡	小久喜字中村	旧石器、縄文中～晩、奈良・平安、中世、近世	平成7・9・18・19
13	小久喜神辺遺跡	小久喜字神辺	縄文中、近世	

Ⅲ 調査の成果

1 遺跡の概要と調査地点の様相

山遺跡は大宮台地白岡支台の中央部に位置する。一帯は小字名「山」にふさわしく、かつては山林景観が良好に保たれていて、地元では「白岡の峠井沢」などと形容する声も聞かれたものの、近年は宅地化が急速に進行し、かつての景観は見る影もない。同支台の西側は元荒川の沖積地と接して明瞭な崖線を形成する。崖線縁辺は若干の小支谷が入り込み、それを取り囲むように遺跡が連綿と形成される。山遺跡は北側を「八幡磯」と呼ばれる支谷に、南側を「天神磯」と呼ばれる支谷に挟まれた舌状台地上に発達した集落遺跡で、さらに天神磯の谷頭部を囲むように展開する。おそらく、天神磯の谷の南側、本遺跡の西側に隣接するタタラ山遺跡と接する、あるいは一部重複するように広がる可能性が高いものとみられ、これを裏付けるように、タタラ山遺跡からは少数ながら縄文時代中期の住居跡も確認されている。

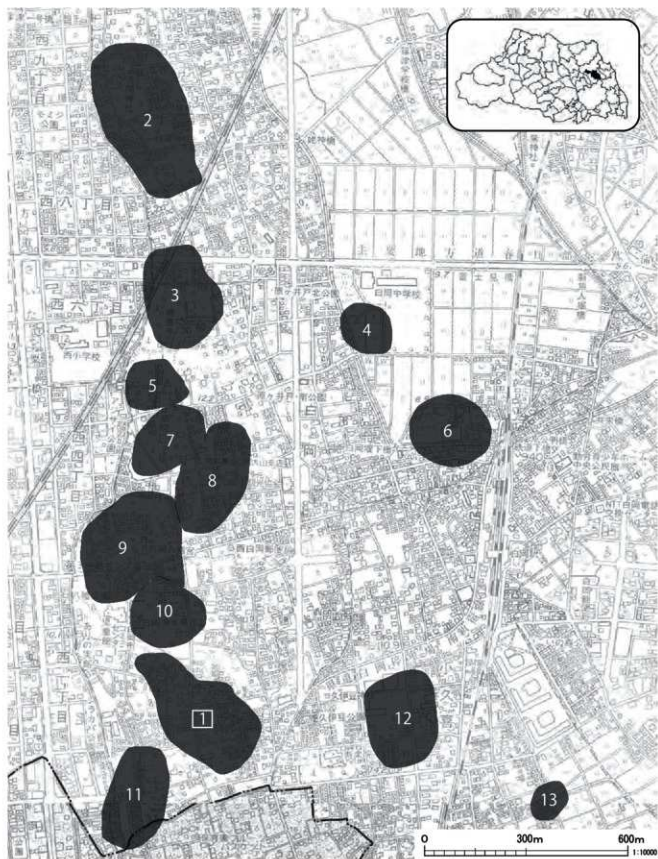
当遺跡はこれまでに本報告地点を含む計19地点で発掘調査を実施しており、縄文時代中期を中心とした大規模集落の様相が明らかになるとともに、平安時代の木炭窯跡や中世の建物跡も発見され、長期間にわたり人々の生活の舞台であることがわかっている。

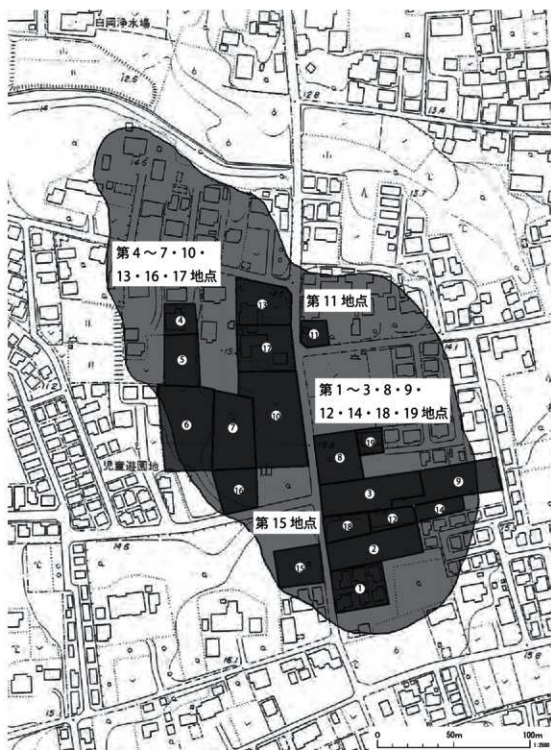
縄文時代中期後半の加曾利E式後半期の集落遺跡としては、合計20軒を上回る住居跡、土坑などが検出されている。特に第18地点の南側に位置する第1・2地点では、加曾利EⅢ式期の堅穴住居跡群が検出されており、窓枠状モチーフの連なる口縁部文様帯を伴わない、いわゆる吉井城山類型や隆帯による渦巻文を構成するいわゆる梶山類型に該当する良好な土器群を伴う事例として注目される。

第15地点の東側に位置する第3・9・12地点で木炭窯跡が1基検出されている。木炭窯跡は奈良・平安時代に帰属するもので、当地域の古代の生業を考える上で、興味深い遺構である。木炭窯は鍛冶のみならず製鉄を含む鉄生産に資するものであることが想定され、隣接するタタラ山遺跡の名前のもととなった周辺の小名である「タタラ山」から、周辺におけるタタラ製鉄に伴う製鉄炉の痕跡が残されている可能性が高いものと考えられる。燃料炭の焼成を行っていた木炭窯の確認は、地域の言い伝えの信憑性を高めるものであろう。

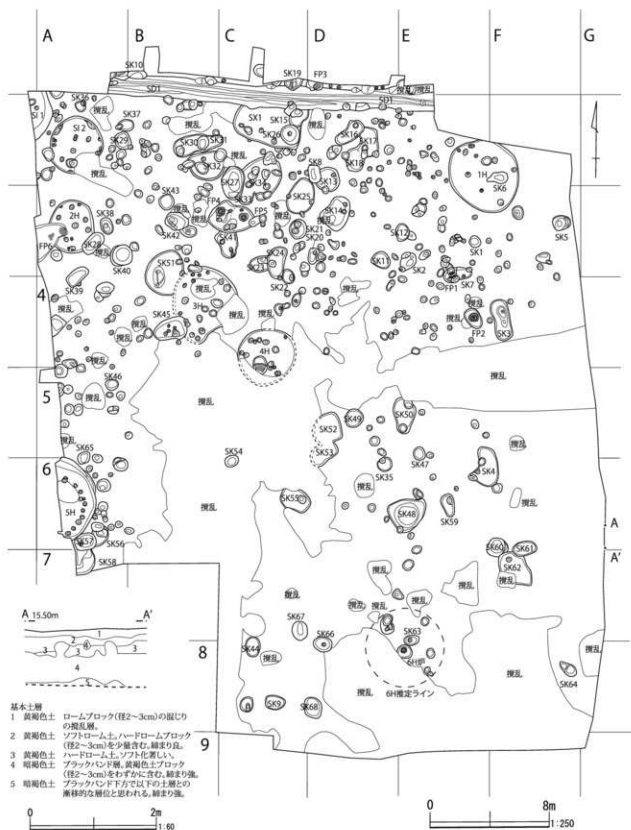
視野を広げると、篠津の中妻遺跡で精錬炉を持つ工房跡の検出や小久喜の鬼窪尾張繁政館跡、沖山西遺跡の木炭窯の検出事例などは、古代末期から中世におけるこの地域での鉄生産のあり方やその後の中世期の様相を理解する上で、極めて重要な視点を投げかけているものといえる。既述の鬼窪尾張繁政館跡や中妻遺跡のほか、山遺跡が面する八幡磯の北方に展開する人耕地遺跡においても、中世豪族の鬼窪氏の居館跡が検出されている。近世においては、第6地点の隣接する第5地点において、近代（明治初期）の瓦窯跡を1基検出しており、地域の近代化を考える上で、貴重な産業遺産に位置付けられる。また、広く関連文化財群として捉えようとしたとき、地名、縄文遺跡、古代遺跡、中世豪族、近代化遺産などを結び付けるストーリーの構成なども想定でき、地域資料を扱う上からも山遺跡の持つ意義は小さくない。

本報告の第6地点は遺跡の西寄りに位置し、標高は約15m、第15地点は遺跡の南端に位置し、標高は約16m、第16地点は遺跡の南寄りに位置し、標高は約15m、第19地点は遺跡の中央やや東寄りに位置し、標高は約15mである。

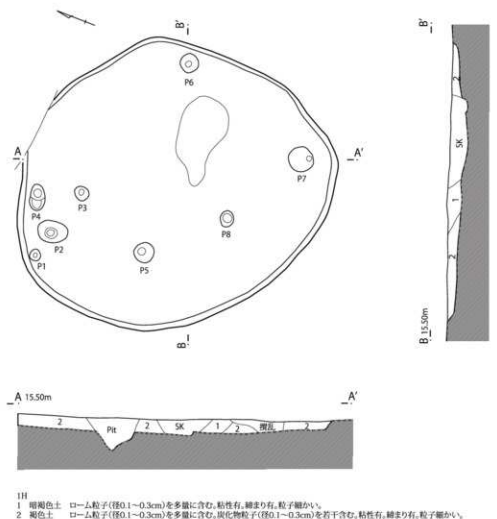




第2図 山遺跡の位置と発掘調査区



第3図 第6地点全測図及び土層断面図



第4図 第1号住居跡

2 第6地点の遺構と遺物

(1) 住居跡

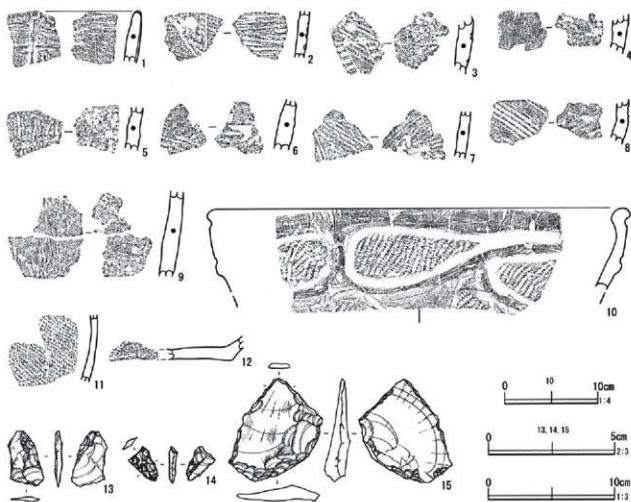
●第1号住居跡(第4図)

E2・3・F2・3グリッドに位置し、第6号土坑に切られる。平面形は長径約5.2m、短径約4.4mを測る不整形を呈し、北西-南東方向に主軸を持つ。確認面から床面までの深さは浅く約0.2mであった。住居跡に伴うピットを8基検出した。このうち北西方向の長軸端に4基が集中する。主柱穴はP3・P5・P6・P7の4本とみられ南東方向に開く台形をなす。

本址では、炉跡は確認されていないが、本址を切る6号土坑の覆土に焼土が含まれていることを評価すると、6号土坑が本址の炉跡を壊して形成されたとみる事が可能である。前述の通り、4本の主柱穴から、6号土坑の位置に炉が形成されていたとしても不思議はない。

出土遺物(第5図)

土器 第5図1~9は、縄文早期末葉の条痕文系土器群の一群で胎土に少量の繊維を含むものである。このうち1は口縁部資料である。緩波状縁を呈するものと思われ、波頂部から細隆起縁が垂下しこれに直行す



第5図 第1号住居跡出土遺跡

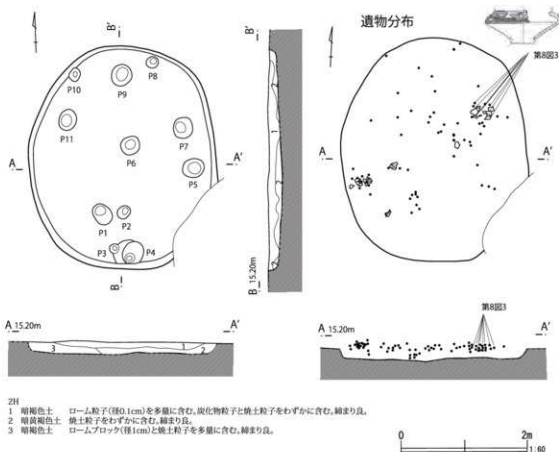
る細隆起線も看取できる。口唇部には刻み目を持つ。地文は表裏とも横位の条痕である。2は横位の条痕地文上にV字形の沈線を引き沈線間に刺突を充填するものである。3は右下がりに斜行する条痕地文上に横走沈線を引き、これを起点に右下がりに斜行する梯子状沈線2組が施されたものである。4は条痕撫消しの胴部資料である。10は、推定口径45cmを測るキャリパー型深鉢の口縁部資料で、残存高は11cmほどである。口唇部は玉縁状に作られよく撫でられる。口縁部文様帯は丈の低い隆帯を横S字状に配し楕円形から紡錘形の区画を形成し、区画内部には単節RL縄文が右下がりに充填施文される。口縁部文様帯以下には口状の沈線が看取されることから、大振幅の口状モチーフまたはH状モチーフが採用されるものと思われる、口状区画内には単節RL縄文が充填され、間隙は磨り消されるようである。11は、単節RL縄文横位施文の胴部資料である。諸磯a式に比定できよう。12は平底の底部資料である。

石器 第5図13は2次加工剥片、14は石鐵の脚部残欠と思われる。15はドリルと思われる、ホルンフェルス

の不正横長剥片を素材とし、剥片の角を用いて錐部を作り出している。周縁部には細かな調整加工が施

第2表 第1号住居跡出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
5	13	第1号住居跡	2次加工剥片	赤チャート	2.2	(1.2)	0.2	(0.8)	
5	14	第1号住居跡	石鐵残欠	赤チャート	(1.4)	(1.0)	0.3	(0.3)	
5	15	第1号住居跡 PS	ドリル	ホルンフェルス	4.1	3.3	0.8	8.4	



第6図 第2号住居跡

される。

●第2号住居跡(第6図)

A3グリッドに位置し、第6号炉穴を切り、第28号土坑に切られる。平面形は長径約3.5m、短径約3.0mの楕円形を呈する小ぶりの住居跡でほぼ南北に軸を持つ。確認面から床面までの深さは約0.2mであった。覆土は基本的には2層に区分することができるが、本址に先行して形成された第6号炉穴を切ることから、2層の西側では焼土粒子を多く含むため便宜的にこれを3層として区分した。本址に伴うビットを11基検出した。長軸南端に位置するP3・P4は小ぶりながら対をなすものと思われ、付随する皿状の窪みを含め出入口施設である可能性が高い。支柱穴はP7およびP11と思われ、これにP1・P9が何らかの役割を果たした可能性がある。また、住居中央に位置するP6や東壁際のP5も一定の規模を持つほか、北壁際のP8・P10も小ぶりながら支柱として機能した可能性がある。

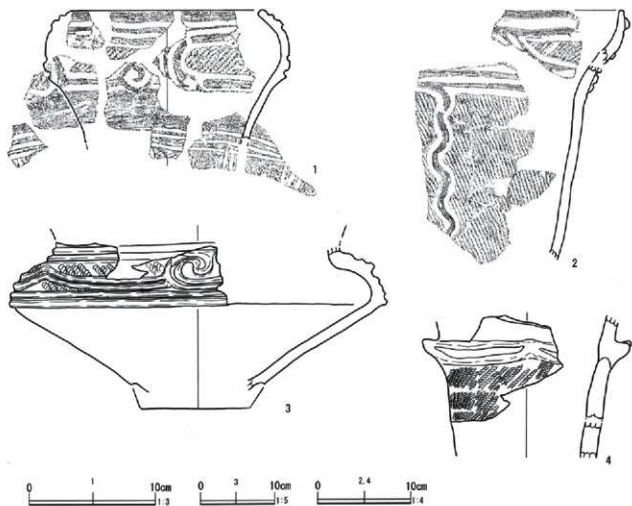
炉跡は認められなかった。小ぶりの住居跡ながら遺物出土量は多く、覆土からの出土ではあるが北東寄りの大破片が接合した。

出土遺物(第7・8図)

土器 第7図1～6は胎土に少量の繊維を含む縄文早期条痕文系土器群である。このうち1は、横走する刺



第7图 第2号住居跡出土遺物(1)

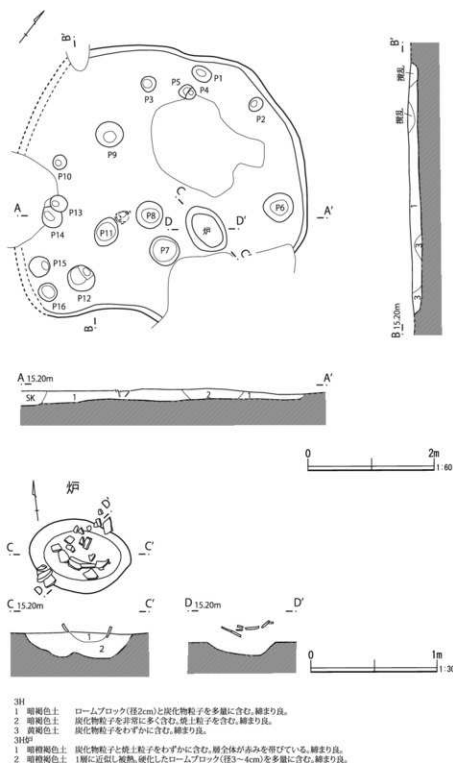


第8図 第2号住居跡出土遺物(2)

突文列上に円形竹管を押捺するもの、2は半截竹管による横走沈線が引かれる胴部破片である。7は垂下する半截竹管を起点に横位のレンズ状となるモチーフがみられるもので、レンズ状モチーフには爪形文が施される。諸磯b1式に比定できよう。8は貝殻腹縁文の施される浮島式の胴部資料である。9・10は中期加曾利E式後半期の深鉢形土器の口縁部資料である。前者は、口縁外面に1条の横走隆帯を持つもので、以下には単節RL縄文が施される。後者は、口縁部に幅の狭い無文帯を置き、下端を横走沈線で締め以下には単節RL縄文が施される。ともに平縁を呈するものと思われる。11・12は深鉢形土器の胴部上半の破片資料で、前者は横走沈線とこれを起点に垂下する3条の沈線が施される。後者は大きく外反する胴部資料で、丈の高い横走隆帯と縦位施文の単節RL縄文が施される。ともにキャリパー形深鉢の胴部資料であろう。13・17・18は深鉢形土器の口縁部に付された裝飾把手である。いずれも環状の粘土を組み合わせて立体的な把手としている。13は丈の高い隆帯で形成される口縁部文様帯から流れるように立ち上がり口唇部上に環を作るとともに上下方向に貫通する横位の橋状把手を併せ持つ。17は刺突を持つ隆帯で口唇部上に器面と並行する環を形成するとともに器面に直行する橋状把手を併せ持つ。18では、13同様口唇部上に環を作るとともに上下方向に貫通する横位の橋状把手を併せ持つ。口縁部の下に頸部無文帯がおかれ、その下端区画の沈線も観察できる。14は口縁部文様帯下端が竪盤玉状に張り出す浅鉢形土器であ

る。大きく外反しながら立ち上がる胴部は横位の丁寧な撫でを加えて無文とし、内折する頸部文様帯に沈線を重ねた渦巻文を持つものである。垂下する縦位区画の下端部を認められる。胴部最大径を測る突出部には隆帯を貼り左下がりの鋭い刻み目文を密に施す。内面整形も丁寧に横位の撫でを加えたのち磨きをかけている。おそらく無文の口縁部が外反しながら立ち上がるものと思われる。15は横走隆帯のみられる胴部資料、16は口径6.5cmのミニチュア土器である。横走沈線で画された口縁部には書きき状の刻み目文がみられる。以下に沈線模様がみられるが、モチーフは判然としない。19は、くの字に屈曲する胴部資料で、縦位の条線文が施される。20は無文の胴部、25は無文の底部資料である。22も底部資料で底面には網代痕が残される。21・23・24は縄文の施された胴部資料である。21は残存部最大径18cmほど、残高5cmほどの資料で、単節RL縄文が縦位に施文される。胴下半にあたるものと推定され、徐々にすぼまる。23は残存部最大径15cm、残高10cmを測る。単節RL縄文を重複させながら縦位に施文する。下部は底部に近いものと思われ、施文されないか、施文されても撫で消されている。24は残存部最大径16cm、残高10cmを測る。単節RL縄文を縦位に密接施文したものである。輪積痕が顕著である。

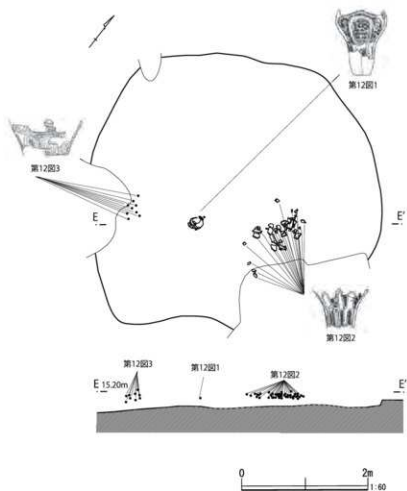
第8図1は、キャリパー形深鉢の口縁部資料である。口径15cm、口縁部最大径19.5cm、残高13cmほどを測る。口縁部には幅の狭い無文帯を持ち、1条の横走沈線を挟んで以下に断面がカマボコ状となる隆帯とこれに沿う沈線とで長楕円形の区画と渦巻文とを組み合わせた文様帯を持つ。隆帯上にも小さな渦巻を配するなどする。頸部には横位の撫でを加え無文帯とし、下端を3条の横走沈線で閉じる。これを起点として3条1組での垂下沈線が施される。地文は比較的節の大きな単節LR縄文を施すようである。内面整形は口縁部では横位の撫で、頸部以下は縦位の撫でが施される。胎土は少量の砂粒を含むものの洗練され、焼成も良好である。2は口縁部が外反気味に開く深鉢形土器である。口縁部外縁に横走隆帯を巡らせている。口縁部文様帯には丈の高い隆帯と沈線を組み合わせて右下がりに下がる区画描線が施される。区画内部には単節RL縄文が密に施される。内面は口縁部から胴部に至るまで横位の撫で整形が施される。胎土には砂粒を含むがよく練られた均質なものである。焼成も良好で全体に赤みの強い茶褐色を呈し一部に黒斑がある。3は胴部が算盤玉状に張る浅鉢型土器である。頸部の括れ部で37cm、胴部最大径50cm、推定底径は12~14cmほどと思われる。残高は20cmほどを測るが、推定高は30cm近い大型の資料であろう。底部から大きく外傾しながら立ち上がる胴下半は斜位のヘラ削りのあと粗く撫でたもので、最大径付近に貼った隆帯の下端のみ横位に撫でを加えている。無文とし、強く内湾する頸部文様帯は、上下を2本組の隆帯で閉じ、この内部に同様の隆帯を用いて渦巻を起点に横位展開する緩い波状モチーフを構成する。頸部文様帯は節の大きな単節RL縄文を地文とする。口縁部は外傾しながら立ち上がる無文の平縁となるものと思われるが失われている。内面整形は、基本的に横位の粗い撫で整形で、最大径以下では輪積みを含め凹凸を残す。胎土には多量の砂粒を含みざらざらとした質感である。焼成は良好ながら、やや白っぽく、淡褐色で、部分的に黒斑がある。4は最大径22cm、残高15cmを測る円筒形に近い深鉢形土器の胴部資料である。胴部下部では器壁が2cmに及ぶ厚手の資料である。頸部に鐮状の隆帯を巡らせる。隆帯は太い2条のもので、4単位で上向きに摘まみ上げたような尖頭部を形成し、この部分では2本の隆帯を統合する。このため、尖頭部間は隆帯間にスリットを入れたような形となる。胴部には単節RL縄文が縦位施文される。口縁部は無文となるものと思われる。内面整形は、上半部では横位の、下半部では掻き上げるような斜位の撫でを施す。胎土には砂粒を含みややざらつが焼成は良好で赤みの強い茶褐色を呈する。



第9図 第3号住居跡

●第3号住居跡(第9図)

B3・4・C3・4グリッドに位置し、第51号土坑を切り、第45号土坑に切られる。東側には攪乱を受けることから平面形は判然としないが、長径約4.7m、短径約4.3mの不整形を呈するものと思われる。確認面から床面までの深さは約0.2mで覆土は3層に区分できた。住居跡に伴うピットを16基検出した。主



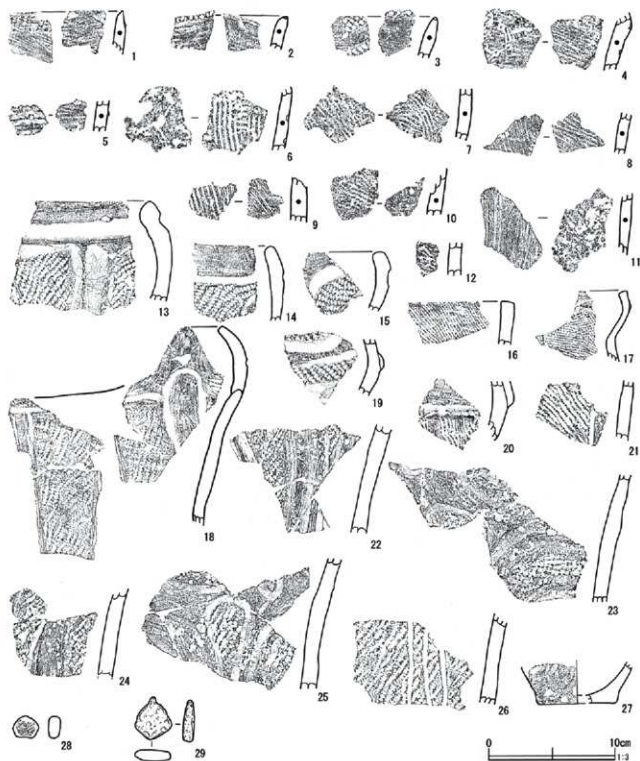
第 10 図 第 3 号住居跡遺物分布図

柱穴は判然としないがP9とP12が対をなす可能性が高く、これをP6が支える3本柱も想定できよう。P10・P13～P16が直線状に並ぶことも何らかの意味を持つかもしれない。P8とP11間から縄文土器の大破片（第12図1）が出土していることやP13、P14上面からも復元可能な大型土器（第12図3）が出土していることも考慮されるべきであろう。なお、本址を切るとされた第45号土坑からは、本址と時期的に差のない複数個体の土器が出土していることから、本址との関係性について注意深く検討する必要がある。

本址の炉跡は埋甕炉で住居跡の東寄りで検出された。長径約0.8m、短径約0.6mの楕円形の掘方もち、炉体土器（第12図2）を埋設するが、土器は完全に埋め込むのではなく上部は露出した状態であったものと思われ、炉体土器の破片が炉跡の上の住居跡覆土中から散乱する状況で確認された。炉の覆土は2層に区分され底面は東寄りが浅く窪む。第2層は掘方のローム層の被熱硬化層である。

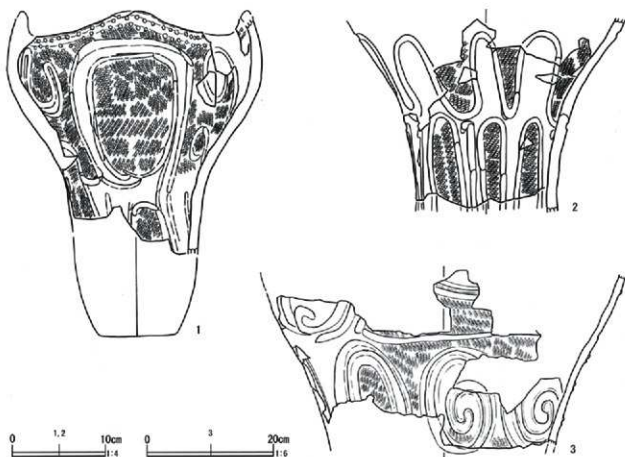
出土遺物（第11・12図）

土器 第11図1～12は、胎土に少量の繊維を含む縄文早期末葉の条痕文系土器群である。このうち1～3は口縁部資料で、いずれも口縁部に刻みを持つ。1は縦位に絡条体圧痕文が施される。2は口唇部に刻み目を持つ。3は外面に沈線による襷掛状の区画が設けられ、区画内に竹管による刺突文が充填され、この刺突が口唇部にも及ぶ。13～18は中期加曾利E式後半段階の深鉢形土器の口縁部資料である。13は口縁部外縁に巡らされた横走隆帯を起点として垂下する2本隆帯が観察される。14は口縁部に幅の狭い無文帯を設



第11図 第3号住居跡出土遺物(1)

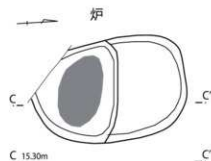
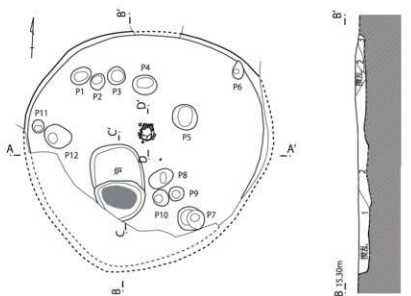
けるもので、 $\cap$ 状の磨消文帯が描かれるようである。15は $\cap$ 状の縄文帯が看取されるいわゆる吉井城山類型の一群、17は口縁部幅狭無文帯の下端を微降帯で画すものである。18は口縁部が外反する平縁の深鉢形土器で口縁部に内湾する山形突起を持つ。突起下には $\cap$ 状の磨消文帯が形成される。この土器の口縁部には1条の沈線が巡らされるが、突起下の $\cap$ 状磨消文帯はこれに優先する。突起間には垂下沈線帯が



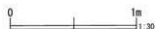
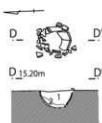
第12図 第3号住居跡出土遺物(2)

設けられ沈線間は磨り消される。地文は単節RL縄文が縦位施文される。胎土には砂粒を含むが焼成は良好である。19・20は口縁部付近の破片資料である。前者は丈の低い扁平な隆帯を用いた窓枠状の区画が設けられるようである。後者は、内湾する無文の口縁部を持つ浅鉢で、胴部には蛇行する条線文が施される。21～26は加曾利E式の胴部資料である。このうち22～25は同一個体である。低平な隆帯で胴部に大ぶりの渦巻文を形成する深鉢形土器である。隆帯による区画内には単節RL縄文が充填される。洗練された胎土で焼成良好である。26は第45号土坑の資料との接合資料である。単節縄文を縦位施文した上から3条の沈線を垂下させる胴部資料である。27は無文の底部資料である。底径6cmほどと思われる。

第12図1は、4単位の緩波状縁を呈する深鉢形土器である。最大径27cm、残高26cmを測る。口縁部に2列の円形刺突列を持ち胴上半部波頂下には、沈線による楕円形区画を持ちこれを囲むもう1条の沈線を引き磨消文帯を形成するとともにこの一方を胴下半部に垂下させ大きな蔵手を形成する。波底部には沈線による小ぶりの蔵手文が形成される部分や馬蹄形の磨消文が配される部分などが見られる。地文は単節RL縄文が充填施文される。内面整形は口縁部付近で横位、以下は縦位の撫でが施される。胎土には少量の細粒砂を含むがよく洗練されたもので焼成も良好である。色調は赤みの強い茶褐色である。本資料は第45号土坑出土資料と接合関係を持つ。2は口縁部を欠くが平縁のキャリパー形深鉢と思われる。残存部最大径29cm、残高20cmを測る。胴上半に単沈線で大振幅の波状文を持つ。胴下半には、 $\cap$ 状区画を配し内部に縄文を充填する。また $\cap$ 状区画の隙間に蔵手文を配す。図の中央右側の区画のみ蔵手文が配されない。



遺物出土状況



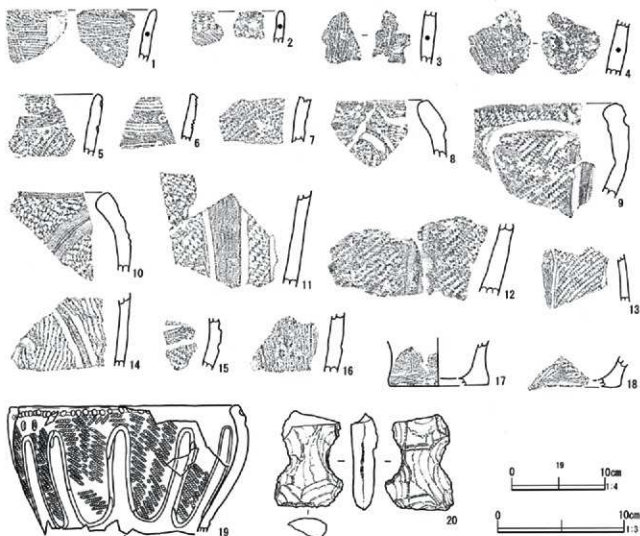
4H

- 1 暗褐色土 ロームブロック(径1cm)とローム粒子(径0.1cm)を多量に含む。炭化物粒子と焼土粒子をわずかに含む。締まり良。
- 2 暗褐色土 ロームブロック(径1cm)を多量に含む。ローム粒子(径0.1cm)と炭化物粒子及び焼土粒子をわずかに含む。締まり良。
- 3 黄褐色土 焼土粒子と炭化物粒子をわずかに含む。締まり良。
- 4 暗褐色土 焼土粒子と焼土ブロックを多量に含む。ボロボロの屑。
- 5 暗褐色土 灰ブロック屑。砂床面。

4H遺物出土状況

- 1 茶褐色土 ローム粒子(径1cm)を頂点状に含む。粘性無。締まり良。
- 2 黄褐色土 ローム粒子(径1cm)を多量に含む。粘性無。締まり非常良。

第 13 図 第 4 号住居跡



第14図 第4号住居跡出土遺物

3は残存部最大径58cm、残高28cmを測る大ぶりのキャリパー形深鉢である。胴部には低平な2本一組の隆帯による連続渦巻文が観察できる。頸部以上にも杵状区画や渦巻文などが配されるものと思われる。

土製品 第11図28は土製円盤である。無文の胴部資料を用いた小型の資料である。

石製品 第11図29は軽石製品である。扁平に整形し面取りを施し鐘形に整形している。頂部が摘状に張りだし、対峙する下部もV字状に整形される。

第3表 第3号住居跡出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
11	29	第3号住居跡	軽石製品	安山岩	3.4	2.9	0.9	0.8	

●第4号住居跡（第13図）

C4・5グリッドに位置し、南端を攪乱に切られる。平面形は長径約4.0m、短径約3.8mを測る不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mであった。住居の覆土は2層に区分できた。住居跡に伴うピットは12基検出できた。主柱穴とみられるのはP5・P7・P12の3本で、南西隅の攪乱に切られてさらに1本存在した可能性が高い。P1～P4が北壁側に並ぶことも何らかの構造的意味を持つ可能性がある。また、

P8～P10は規模の大きな炉に関連する施設である可能性もある。P4とP8間に埋設土器が認められ、検出面から約0.2mの深さまで縄文土器が埋置されていた。

炉跡は地床炉で住居跡の中央やや西寄りで検出した。平面形は長径約1.2m、短径約0.8mの楕円形を呈す大型のものである。住居床面から炉床面までの深さは約0.4mを測る。炉の北側は炉床より1段高く面をなし、覆土に含有される焼土量もわずかであることから炉本体ではなく作業面として用いられた可能性が高い。本来の意味での炉は掘り込み南側であり、この部分に直径約0.6mの焼土の広がりが見られた。

出土遺物（第14図）

土器 第14図1～4は、胎土に少量の繊維を含む条痕文系土器群である。このうち1と2は口縁部に絡条体圧痕文を持つ平縁の資料である。5と6は前期諸磯a式土器である。前者は口縁部資料で横走する並行沈線に沿って爪形文を施す。7は単節縄文の施された諸磯a式土器である。8～10は加曾利E式土器後半のキャリパー形深鉢の口縁部資料である。内湾傾向を示し、 $\cap$ 状文または大振幅の波状文を形成するものである。11～15は加曾利E式土器の胴部資料である。11・12は垂下する沈線間を磨り消す胴部資料、13は $\cap$ 状の磨消文となるもの、14は鉤手状の幅の狭い磨消文帯が看取される資料、15は緩やかに斜行する磨消文帯が形成される資料である。16は縦位の条線文の施された胴部資料、17・18は底部資料である。19は本址の埋設土器で、口径25cm、残高14cmを測るキャリパー形深鉢の胴上半部の資料である。いわゆる吉井城山類型の範疇であり、平縁をなす口縁部には円形刺突列を配し、以下に大振幅の波状文が形成される。波状文の幅にはばらつきがあり、全周で14単位となる。これは、5+5+4の3単位構造ないし(4+3)+(4+3)の2単位構造などが考えられる。地文は単節縄文を施文箇所によって変えながら充填したものである。図の左端に記録しているが補修孔と思われる焼成後穿孔の小孔1対がみられる。胎土には少量の砂粒を含む。焼成は良好で、内面は横位の撫で整形が施される。

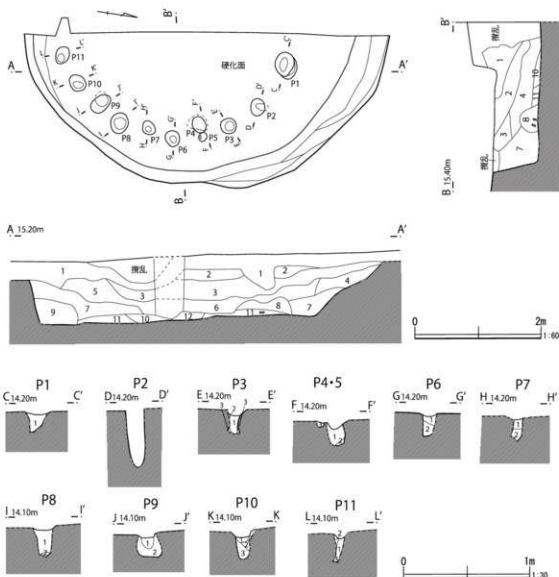
石器 第14図20はホルンフェルス製の分銅形打製石斧である。刃部は直刃となり、基端部を欠く。表裏の器体中央に横方向の主剥離が観察される。

第4表 第4号住居跡出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
14	20	第4号住居跡	分銅形打製石斧	ホルンフェルス	(7.2)	3.0	1.1	(76.2)	

●第5号住居跡（第15図）

A6グリッドに位置し、西半部は調査区外へ延びる。検出部分の長径は約5.9m、短径は約2.5mを測る。確認面から床面までの深さは約0.8mであり、本調査地点のみならず、山遺跡の近似する時期の住居跡の中でも突出して深い。壁は南側から東側では約80度の角度を持って直線的に立ち上がるが、北側では50度から40度ほどの角度を持って掘られている。覆土は12層に区分でき、中層より下部では焼土粒子の混入が顕著であるとともに炭化物粒子やブロック状または炭化材として認識できるものを含め多量の炭化物が確認でき、焼失住居または住居廃絶に伴って焼かれたなど火を受けた可能性が想定された。覆土最下層の10層から12層は橙褐色を主体とする焼土層で覆われ、特に11層は平面的には環状に堆積し、強く焼土化している。これを剥ぐと床面となるが、住居跡中央付近はわずかに窪み、そこから北側にかけては硬化面が広がる。床面の硬化は、踏み固めによる可能性が高いが、これが熱を受けたことで一層硬化



基本土層

1 暗褐色土

5H

2 暗褐色土

3 暗褐色土

4 褐色土

5 暗褐色土

6 暗褐色土

7 茶褐色土

8 黒褐色土

9 明褐色土

10 淡褐色土

11 暗褐色土

12 淡褐色土

P1

1 暗褐色土

P3

1 暗褐色土

2 暗褐色土

3 暗褐色土

P4

1 暗褐色土

2 暗褐色土

P5

3 暗褐色土

P6

1 暗褐色土

2 暗褐色土

P7

1 暗褐色土

2 暗褐色土

ロームブロック(径1cm)とローム粒子(径0.1~0.2cm)をわずかに含む。締まり良。

ロームブロック(径2~3cm)を多量に含む。焼土粒子と炭化物粒子をわずかに含む。締まり良。

ロームブロック(径1cm)を多量に含む。焼土粒子をわずかに含む。締まり良。

炭化物粒子を多量に含む。ローム粒子を散在状に含む。粘性無。締まり良。

ロームブロック(径2~3cm)と焼土粒子及び炭化物粒子を多量に含む。締まり良。

焼土粒子(径0.5cm)と炭化材をやや多く含む。締まり良。

炭化物微粒子を多量に含む。ロームブロック(径3cm)を密に含む。粘性無。締まり非常に良。

炭化物と焼土を多量に含む。ロームブロック(径3cm)を含む。炭化物は炭化材として残るものも有。

焼土粒子(径0.5cm)をわずかに含む。締まり良。

焼土粒子を非常に多く含む。炭化材片を含む。粘性無くサラサラの土質。締まり良。

焼土粒子と炭化材片を多量に含む。焼土ブロック(径1cm)をわずかに含む。サラサラの土質。締まり良。

焼土ブロック(径3cm)と焼土粒子及び灰色粒子を多量に含む。灰層と思われる。サラサラの土質。締まり良。

炭化物粒子と焼土粒子をわずかに含む。締まりやや弱。

炭化物粒子をわずかに含む。締まりやや弱。

締まりやや弱。

締まりやや弱。ブロック状の土層。

暗褐色土 焼土粒子を多量に含む。締まりやや弱。

暗褐色土 締まりやや弱。

暗褐色土 炭化物粒子をわずかに含む。締まりやや弱。

暗褐色土 炭化物粒子、焼土粒子をわずかに含む。締まりやや弱。

暗褐色土 締まりやや弱。

暗褐色土 炭化物粒子をわずかに含む。締まりやや弱。

暗褐色土 炭化物粒子をわずかに含む。締まりやや弱。

暗褐色土 炭化物粒子をわずかに含む。締まりやや弱。

暗褐色土 炭化物粒子をわずかに含む。締まりやや弱。

暗褐色土 炭化物粒子をわずかに含む。締まりやや弱。

暗褐色土 炭化物粒子をわずかに含む。締まりやや弱。

暗褐色土 炭化物粒子をわずかに含む。締まりやや弱。

暗褐色土 炭化物粒子をわずかに含む。締まり1層より固。顆粒状のローム土層。

P8

1 暗褐色土

2 暗褐色土

P9

1 暗褐色土

2 暗褐色土

P10

1 暗褐色土

2 暗褐色土

P11

1 暗褐色土

2 暗褐色土

3 暗褐色土

炭化物粒子をわずかに含む。粘性有。締まりやや弱。

ロームブロック層。粘性有。締まりやや弱。

粘性有。締まりやや弱。

粘性有。締まりやや弱。

炭化物粒子をわずかに含む。粘性有。締まり有。

粘性有。

締まりやや弱。

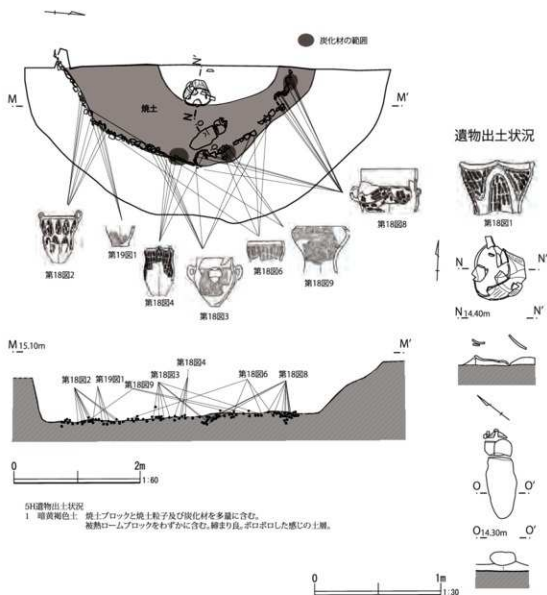
炭化物粒子をわずかに含む。粘性有。締まり有。

粘性有。締まりやや弱。

粘性有。締まりやや弱。

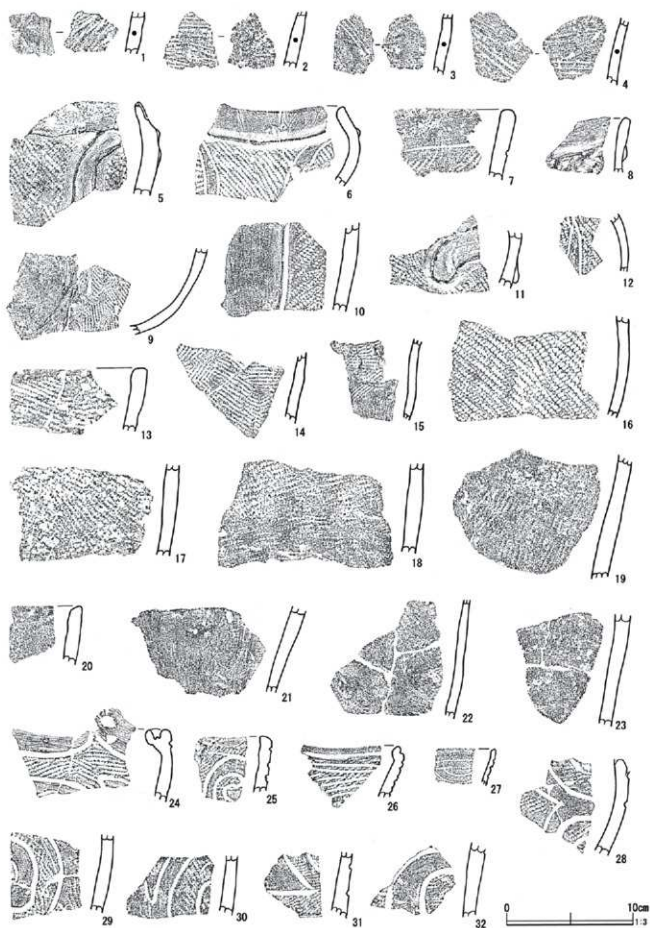
粘性有。締まりやや弱。

第15図 第5号住居跡



したものと推測できる。本址に伴うピットは11基検出した。住居跡の壁面に沿うように弧状に配されている。ほとんどのピットが20cm内外の深さの中で、P2は48cmの深さを持つ。いわゆる壁柱穴タイプの住居の中でも主柱穴の意味を持ったものと思われる。また、ほとんどのピットは炭化物をわずかに含む程度で焼土は含まれないが、P4のみ焼土粒子を多量に含む南北方向に広がる袋状を呈するものでやや趣が異なる。きれいな弧線を描く柱穴列の中でもわずかに内側に入るように見えることも注意すべきである。住居跡北側では、弧状をなす柱穴列の外側に1mほどの空間が設けられており、壁の立ち上りの緩やかさとともに住居内の空間利用という意味からも考える必要があろう。

遺物の出土状況についてであるが、柱穴をつなぐように縄文土器片が列をなして整然と並べられる。大部分の土器片はピットの内側に並べられているが、P1・4・5・9周囲の土器片は、柱穴を除けて並べられている。このことから、柱と土器片列は同時存在していたことがうかがわれる。土器片列の内側を中心にドーナツ状に焼土と炭化材が堆積している箇所も確認されている。これらの土器片は、数個体の土器に復元することができたことから、意図的に割って並べたとみられる。また、中央部から深鉢形土器上半が口縁部を東側に向けて横倒しで出土した。土器の東側からは長さ50～60cmの石棒と思われる研磨



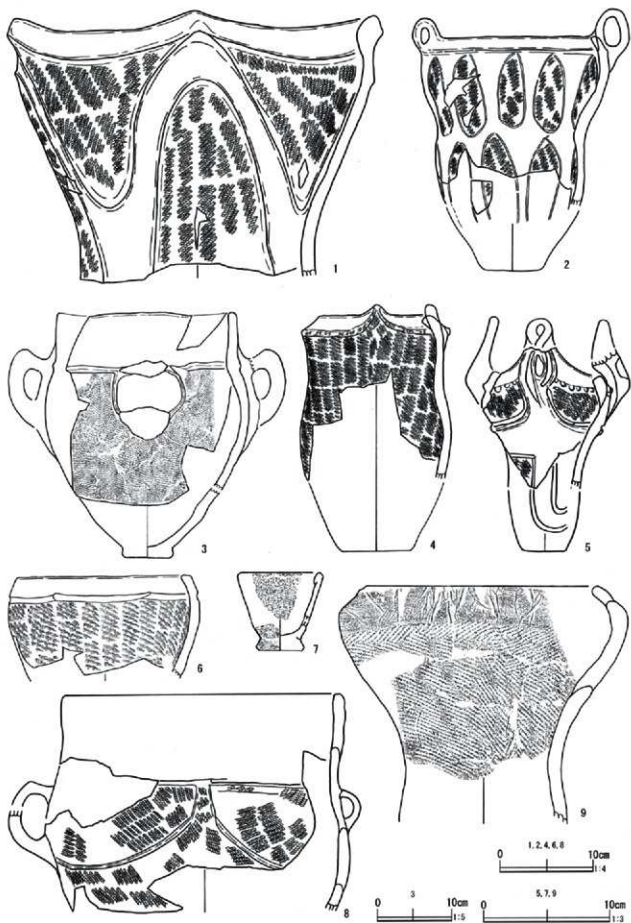
第 17 圖 第 5 号住居跡出土遺物 (1)

痕を持つ自然石が出土した。被熱で割れ、表面が剥離し先端が折れている。横転した土器の下には石棒の石片が散っていたため、ある程度火がまわって石棒が破裂してから、土器が倒れたものと考えられる。このことから、住居跡が燃上した段階では横転した土器や石棒は存在していたと推測され、本址の廃絶時期の特定につながる資料であるといえる。石棒の被熱状況から、先端を上部にして直立していたものが熱を受け、割れるとともに床面に倒れたものと考えられる。

出土遺物（第17・18図）

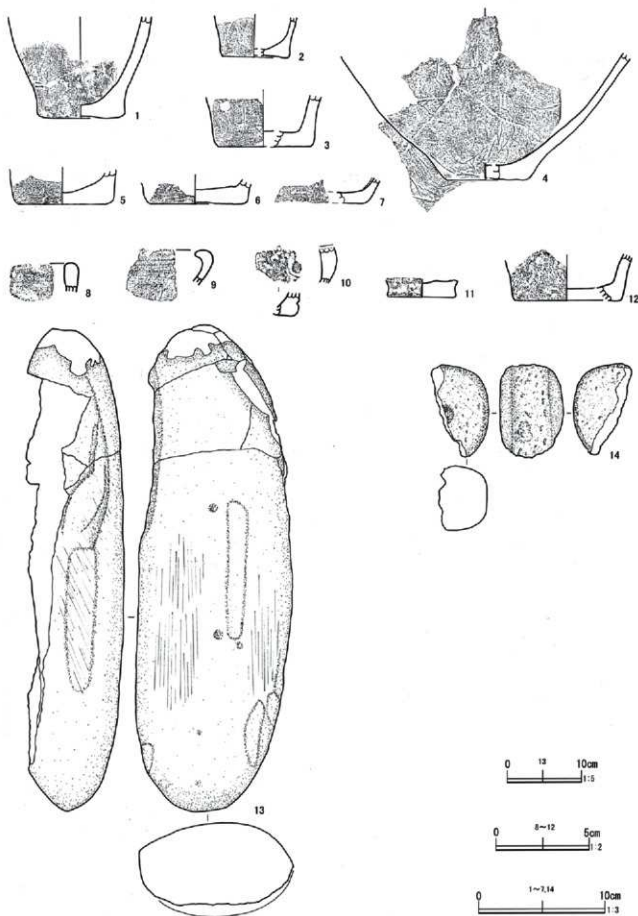
土器 第17図1～4は、胎土に繊維を含む縄文早期条痕文土器群である。5～23は中期末葉加曾利E式期の資料である。このうち5と6は口縁部が内湾するキャリパー形深鉢である。両者とも緩波状縁を呈し微隆帯で口縁部無文帯を画す。以下には口状の磨消文帯が形成されるが、前者は微隆帯で、後者は沈線で描出される。7、8は平縁で口縁部に無文帯を設けるものである。前者は無文帯下端をシャープな単沈線で区画するもの、後者は断面三角形の隆帯で区画するものである。9～12は胴部の資料で磨消文帯と縄文帯とが観察されるものであるが、9と11では区画線を隆帯で、12は沈線で表す。10は隆帯に沿わせて沈線も引かれるようである。13～19は縄文の施される資料である。13は平縁の口縁部資料で、弧状の単沈線が観察される。14・15は単節LR縄文が不規則に施される。16は単節LR縄文が縦位に施文される。17・19はRL縄文、18はLR縄文が施される。20～23は無文の一群である。24～32は後期初頭に該当する。24は称名寺式土器の口縁部資料である。緩波状縁を呈し円形刺突を持つ小突起が付される。25～27は堀之内式期の口縁部資料である。25は縄文帯と磨消文帯とで形成される渦巻文の土器、26は縄文地文上に横走する沈線帯が形成されるものである。27は薄手の資料で口縁部に形成された縄文帯と上向きに開放する弧状の縄文帯がみられる。28～32は称名寺式期の胴部資料である。縄文帯と磨消文帯とで複雑な幾何学模様を描出される。

第18図1は、口径40cm、残高27cmを測る緩波状縁の深鉢形土器で胴部上半部はほぼ完存する。本址中央付近で横転して出土した資料である。胴部で緩く括れ口唇部は内湾傾向を示す。口縁部は玉縁状となり波頂部はわずかに外反する。口縁部に3～4cm程度の無文帯を設けその下端を微隆帯で閉じる。胴上半部の文様帯には微隆帯によって波状縁と振幅を合わせた波状文が描かれ、胴下半から大きく展開する口状文とかみ合うことでY字状の磨消文帯が形成されるいわゆる岩坪類型と称される土器群に該当する。地文は単節RL縄文が充填される。内面の整形は、口縁は横位の胴部は縦位から斜位のかき上げるような撫で整形が施される。胎土には砂粒を含むが焼成は良好である。横転出土の影響が片面に火撥ねによる小さな剥落がみられる。2は胴部に緩い括れを持ち口縁部が内湾傾向を示す深鉢形土器である。P8～P10付近に配置された土器片が接合した資料である。口径20cm、推定高25cmを測る。口縁部に幅の狭い無文帯を持ち、下端を微隆帯で区画する。口縁部には大小1対の把手が付される。胴上半部には単沈線による長楕円形区画が12個配され、括れ部以下の胴下半には鋸歯状から口状の区画が9個配される。区画内には単節LR縄文が縦位施文され、区画外は丁寧な撫でられている。内面は、口縁部から胴部まで横位の丁寧な撫で整形が施される。胎土は細粒砂を少量含むがよく洗練されている。焼成良好で褐色を呈し一部に黒斑を持つ。3は両耳壺で、P2周辺からとP7周辺に配置された土器片が接合したものである。口径24cm、胴部最大径27cm、推定高32cm、底径7cmを測る。口縁部無文帯は7cmほどを測り縦位から斜位にヘラ削りしたのち横位に撫でを加えている。下端を断面三角形の隆帯で画するがこの上部はすりつけるように繰り返し撫でを加えている。橋状把手は欠損するが、これを囲むように微隆帯で囲む区画を設け内部をヘラ削

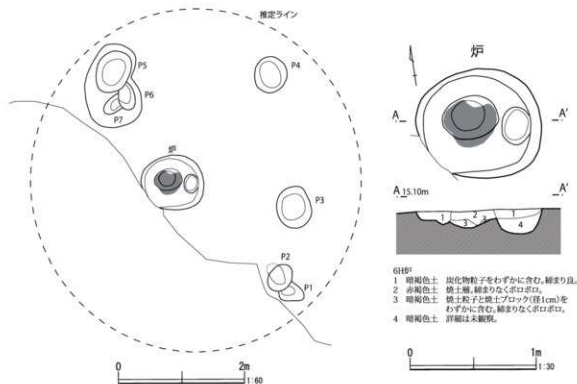


第 18 图 第 5 号住居跡出土遺物 (2)

りしたのち乱雑に撫でている。球胴をなす胴部には単節LR縄文がランダムに施文される。底部付近はよく撫でられ無文となる。内面は口縁部から胴下半まで横位の粗い撫で整形、底部周辺は縦位から斜位の撫で整形が加えられる。胎土は細粒砂を含む。焼成は良好で赤みの強い茶褐色を呈し黒斑を持つ。4は頸部に緩い括れを持つ深鉢形土器で口縁部に1対の小突起を持つものである。P6周辺に配置されていたものを復元した。口径16cm、残高18cmほどを測る。内傾する口縁部は横位の丁寧な撫でを加え無文とし、以下の縄文帯との区画は隆帯で行う。隆帯上には単節LR縄文を横位に施す。以下の縄文帯では単節LR縄文を2指幅で丹念に縦位施文しているが、突起下部にのみ原体を斜位にわずかに回転させ2~3条だけ押捺する部分がある。内面整形は、胴上半部は横位の、下半部は縦位主体の丁寧な撫でが施される。胎土は洗練されるが、内面には赤褐色の粒子が顕著に観察できる。焼成は良好である。5は、4単位波状縁となる小型の深鉢形土器である。波頂部には8の字状の捻転突起が付される。内湾する口縁部には幅の狭い無文帯が置かれ、下端を微隆帯で画す。微隆帯の下側から突き上げるように施された棒状工具による円形刺突文列が並ぶ。波頂部の捻転突起からハの字に開く隆帯が延び、これに沿って引かれた沈線とで口縁部に縄文の施される区画が形成される。急激に絞られた頸部には無文帯が置かれ、以下には単沈線で画された鈎の手状となる磨消文帯が展開するものと思われる。縄文帯には単節LR縄文が充填される。胎土には細粒砂を含むが焼成良好である。内面整形は括れ部までは丁寧な横位の撫で、以下は縦位の撫でが施される。いわゆる関沢類型の範疇でとらえられる資料である。6は平縁のキャリパー形深鉢の胴上半部の資料である。P2からP3付近に配置された土器片が接合した資料である。口径19cm、最大径20cm、残高11cmほどである。内湾する口縁部に幅2cmほどの無文帯を置き、この下端をやや幅のある単沈線で閉じる。以下は全面に無節縄文が施される。胎土は洗練されるが細粒砂を少量含む。焼成は良好であるが、2次焼成を受けており器面はやや荒れている。色調は黒褐色である。内面整形は口縁部近くまでかき上げるような縦位の撫でが施され、口唇部付近だけ横位に一撫でしている。しかし内面はあばた状の火痕が著しく一部に剥落する部分もみられる。7は、口径7cm、推定高6cmあまりのミニチュア土器である。平底で張り出すように形成された底部から直線的に立ち上がるコップ状の土器である。平縁となる口縁部は内側に折り返される。器面は粗い縦位の撫でが施されるようであるが無文でザラザラとした触感である。胎土には多量の褐色粒子が含まれる。焼成はやや甘く2次焼成を受けたことで一部に須恵器の火障のような混成が残される。8は四耳壺で、P1周辺及びP4・5周辺に配置されていた資料が接合したものである。推定口径30cm、胴部最大径32cm、残高23cmを測る。平縁となる無文の口縁部には粗い横位の撫で痕が顕著である。無文帯の下端を断面三角形の隆帯で閉じている。この隆帯に接続するように大小2対の橋状把手が付される。橋状把手間をつなぐ弧状隆帯が配される。また大型の把手を囲むように環状の隆帯が施され内部は磨り消される。把手間をつなぐ弧状隆帯の内外は単節LR縄文が充填される。胎土は洗練されるが細粒砂を含む。焼成は良好で淡橙褐色を呈する。9は、口縁部が強く内湾するキャリパー形深鉢である。P3周辺及びP9周辺に配置された土器片が接合したものである。口径18cm、最大径23cm、残高16cmほどを測る。強く内湾する口縁部は横位の丁寧な撫でを加えて無文とする。この無文帯と以下の縄文帯とを隔てる区画描線はない。口縁部無文帯に沿うように単節LR縄文を1指幅で横位施文し、これ以下を縦位から斜位施文としている。外面の一部に直径1cm前後のあばた状の火痕が観察される。内面整形は残存部においては丁寧な横位の撫で整形が施される。胎土には少量の細粒砂を含む。



第 19 図 第 5 号住居跡出土遺物 (3)



第20図 第6号住居跡

第19図1～7・10～12は本址出土の底部資料を一括したものである。1は底径7cm、2は底径5.5cm、3は底径8cm、4は底径7cm、5は底径8cm、6は底径8cmを測る。いずれも平底で無文となる資料である。10では円形竹管による刺突が看取される。11は底径3.5cmを測る。8・9は無文の口縁部資料である。前者は直立傾向の強い資料、後者は鉤の手状に内折する資料である。

石器 第19図13は、長軸65cm、短軸20cmを測るもので、正面及び左側縁はよく磨かれている。正面側には直径1cm～1.5cmほどの潰痕が数か所認められる。裏面側は被熱して激しく剥落しているものの大きく形状を損なうものではないことから、横断面の通り、楕円形の断面形状をなしたものと想定される。大きさやシンボリックな出土状態は石棒を想起させるが、形状、成形からは裏付けを得ることはできない。よく磨られていることから磨石としたが、これを移動させることは難しいと思われ、据え付けたまま磨りつける側を動かしたとすれば砥石あるいは台石としての使用法も視野に入れて検討する必要がある。14は安山岩製の磨石残欠である。石斲型に整形し、面取りを行っている。正面中央には窪みが看取される。

第5表 第5号住居跡出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
19	13	第5号住居跡	磨石	安山岩	64.0	30.1	(10.8)	(24,200.0)	被熱
19	14	第5号住居跡	磨石	安山岩	(6.8)	3.8	5.0	(183.4)	

●第6号住居跡(第20図)

E8グリッドで炉跡を確認したが、住居跡の南西側は規模の大きな擾乱を受けているほか、残る部分も竹林の抜根によるダメージを受けており、炉周辺及び数基のピットを確認し住居跡であると認定したも

のである。住居跡の規模は直径6mほどの円形を呈したものと推定される。

炉の平面形は長径約1.0m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、炉跡の西寄りで直径約0.4mの焼土の広がり認められた。火床面の東側に浅い窪みが存在する。柱穴は7本検出したが、主柱、支柱等の関係性は明らかにできない。しかし、炉の北西側に位置するP5～P7や南東側のP1・P2では重複してピットが形成されており、住居構造上有意な位置であった可能性が高いものとみられる。積極的に本址に伴うと認められる出土遺物はない。

(2) 竪穴状遺構

●第1号竪穴状遺構（第21図）

A1・2グリッドとその西方に位置し、西半部と北端は調査区外である。検出部分のみで長径約3.4m、短径約1.5mを測る。確認面から床面までの深さは約0.5mであった。本址の立ち上がりを確認できる東側では、比較的しっかりとした角度を持って立ち上がるが、南側の立ち上がりはだらだらとしたもので、明瞭な壁面を持たない。遺構に伴うピットを2基検出した。覆土は4層に区分できた。

出土遺物（第23図1～5）

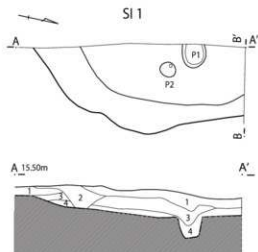
土器 第23図1は横位に付された微隆帯上に矢羽根状の刻みを持つ諸磯b式土器である。2～5は中期加曾利E式土器である。2は口縁部に微隆帯で下端を画す無文帯を持つ緩波状縁の資料、3は無文となる口縁部下端を幅のある沈線画し、以下に節状施文具による条線文とする資料である。浅鉢であろう。4は磨消文帯と縄文帯とが垂下する胴部資料で、縄文帯の中には蛇行沈線が施される。5は条線文の施された胴部資料である。

●第2号竪穴状遺構（第21図）

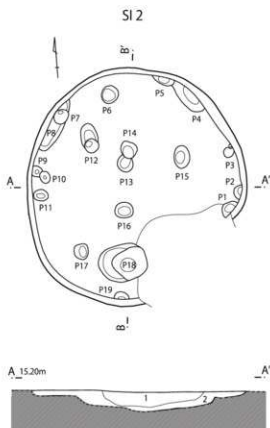
A2グリッドに位置し、南東部に攪乱を受ける。平面形は長径約3.8m、短径約3.5mで不整形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mであった。遺構に伴うピットを19基検出した。本址の底面は平坦ではなく、凹凸を持っている。また、東西方向の土層断面で分かるように、2段の掘り込みを持つ。ピットの配列は上層をかけるに足るものと考えられるが、住居としてではなく付属施設の構造物であった可能性が高い。

出土遺物（第23図6～13）

土器 第23図6は、横位に付された微隆帯状に矢羽根状の刻みを持つ諸磯b式土器である。7～11は中期後半加曾利E式土器である。7はキャリバー形深鉢の口縁部資料で、外反する山状突起が付される。口縁部文様帯は渦巻文が弛緩し内部に縄文が充填されるようである。8は胴部資料で、縄文地文上に緩い渦を巻くと思われる太めの沈線と、横帯を画すと思われる細い沈線とが看取される。9は頸部に無文帯を持つキャリバー形深鉢で、口縁部文様帯にはしっかりと巻き込んだ渦巻文が観察される。頸部無文帯下端もしっかりと閉じられており、そのほかの加曾利E式資料の中でも古相を呈する。10は口縁部に幅の広い無文帯を擁する土器で、両耳壺となる可能性が高い。低平な隆帯と沈線で巻き切らない渦巻文を描出し、これが横位に連なる杵状文を形成するものと思われる。11は口縁部に幅の狭い無文帯を持ち、帯内にさらに1条の沈線を巡らせる。内湾するキャリバー形深鉢で緩波状縁を呈するものと思われる。地文は、単節RL縄文を縦位に施す。



- SI1
- 1 暗褐色土 ロームブロック(径1cm)と炭化物粒子をわずかに含む。締まり良。
 - 2 暗褐色土 ロームブロック(径1~2cm)を多量に含む。炭化物粒子をわずかに含む。締まり良。
 - 3 黄褐色土 2層を境状に混じえる。粘性やや有。締まり良。
 - 4 黒褐色土 ロームブロック(径2cm)をわずかに含む。締まり弱。



- SI2
- 1 暗褐色土 ロームブロック(径2~3cm)を多量に含む。粘土粒子、炭化物粒子をわずかに含む。締まり良。
 - 2 黄褐色土 1層とローム土の漸移的な層。炭化物粒子をわずかに含む。締まり良。



第 21 図 第 1・2 号竪穴状遺構

石器 第23図12・13はともにチャートの2次加工剥片であるが、その形状からいわゆる石鏃ブランクと思われる。ともに横長の貝殻状剥片を素材とし裏面に主剥離をうかがうことができる。

第6表 第2号竪穴状遺構出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
23	12	第2号竪穴状遺構	2次加工剥片	チャート	2.8	1.8	0.3	2.7	石鏃ブランク
23	13	第2号竪穴状遺構	2次加工剥片	チャート	2.2	2.1	0.8	3.0	石鏃ブランク

(3) 炉穴

●第1号炉穴（第22図）

E3・4グリッドに位置し、東側を第7号土坑に切られる。平面形は長径約1.1m、短径約1.0mの不整円形を呈す。中央に直径約0.5mの焼土の広がりが見られる。確認面から底面までの深さは約0.3mを測る皿状の掘り込みである。燃焼部は中央やや北寄りによく焼けている。覆土は3層に区分できる。断削の結果4層とした地山ローム土にも被熱によって生じたクラックに焼土が入り込んでいることがわかる。出土遺物はない。

●第2号炉穴（第22図）

E4グリッドに位置する。平面形は長径約1.5m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測る。中央が浅く窪む皿状の掘り込みで、覆土は2層に区分できた。燃焼部は本址のほぼ中央に位置し、直径約0.7mを測る焼土の広がりが見られたが、燃焼部の被熱硬化は強いものではなく、焼土ごと掻き出されているものとみられる。

出土遺物（第23図）

土器 第23図14、15が本址出土資料である。前者は表裏とも縦位の条痕が施されたもので、胎土への繊維混和量は少ない。後者は小片ながら横走沈線と円形刺突のみられるものである。

●第3号炉穴（第22図）

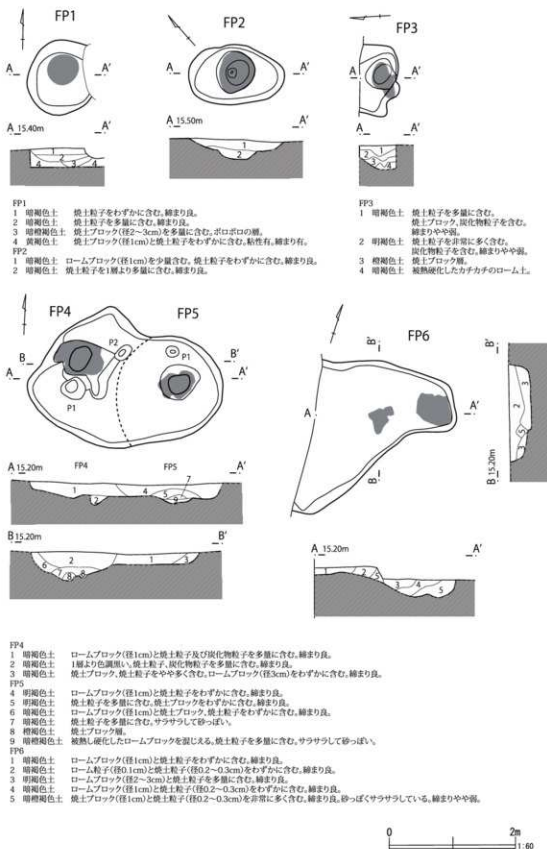
C1・D1グリッドに位置し、北半部は調査区外である。第1号溝跡に切られる。検出部分では東西に角を持つ隅丸の方形に見える。長径約1.1m、検出した短径は約0.5mである。確認面から底面までの深さは約0.4mを測り、覆土は4層に区分できた。第4層が被熱硬化面で火床である。その上面に堆積した3層が焼土ブロック層で底面南寄りに直径約0.5mの広がりとして把握できた。

出土遺物（第23図）

土器 第23図16・17が本址出土資料である。前者は表裏に横位からやや斜めの条痕の認められる資料であるが、後者は加曾利E式土器で、混入資料であろう。

●第4号炉穴（第22図）

B3・C3グリッドに位置し、第41号土坑と第5号炉穴に切られる。残存部で平面形は長径約2.2m、短径約1.5mを測る。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面中央が浅く窪む。中央やや北寄りに直径約0.8mの焼土の広がりが見られる。本址に伴うピットを2基検出した。



第 22 図 第 1 ~ 6 号炉穴

本址と後述の第5号炉穴とは、燃焼部を2か所持つ同一炉穴とみてよいものと思われるが、調査者の所見を尊重して別遺構として報告する。

●第5号炉穴（第22図）

C3グリッドに位置し、第4号炉穴を切り、第41号土坑に切られる。平面形は長径約1.7m、短径約1.6mの不整形円形を呈す。底面中央が浅く窪み中央やや東寄りに直径約0.5mの焼土の広がり認められる。確認面から底面までの深さは約0.5mを測り、遺構に伴うピットを1基検出した。

出土遺物（第23図）

第4号炉穴と第5号炉穴の出土遺物は識別されず第4・5号炉穴出土として一括されている。

土器 第23図18～22が該当する。18は条痕文地文の口縁部資料で口唇部外縁に貝殻腹縁による連続刺突文が観察される。19～21は表裏に条痕文の施された胴部資料である。いずれも胎土に少量の繊維を含む。

22は斜行する沈線間に縄文の充填される無繊維土器で、後期堀之内式土器の混入であろう。

石器 第23図23と24が該当する。前者はチャートの2次加工剥片である。やや横長の不整形剥片を素材とし、正面に横長剥片の打瘤を残す。正面左側縁に押圧剥離による丁寧な調整加工が観察される。後者は、チャート製の小型の石鏃である。整った2等辺三角形に整形されており、基部の挟入は極めて浅い。両面各辺の調整加工は規則的で丁寧なものである。

第7表 第4・5号炉穴出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
23	23	第4・5号炉穴	2次加工剥片	チャート	2.4	1.6	0.5	1.5	残欠
23	24	第4・5号炉穴	石鏃	チャート	1.5	1.4	0.3	0.4	

●第6号炉穴（第22図）

A3グリッドとその西方に位置し、西半部は調査区外へ延びる。第2号住居跡と重複する。平面形状は不正形で検出部分の長径は約2.5m、短径は約2.2mを測る。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は東寄り浅く窪む。覆土は5層に区分できた。東端に直径約0.6m、中央に直径約0.3mの焼土の広がり認められ、燃焼部を複数持つタイプの炉穴である。

出土遺物（第23図）

土器 第23図25～27が該当する。25は口唇部を外削ぎに整える平縁土器で、口唇部には棒状工具を押し付けた刻みを持つ。26・27は表裏に斜行する条痕文の観察される胴部資料である。

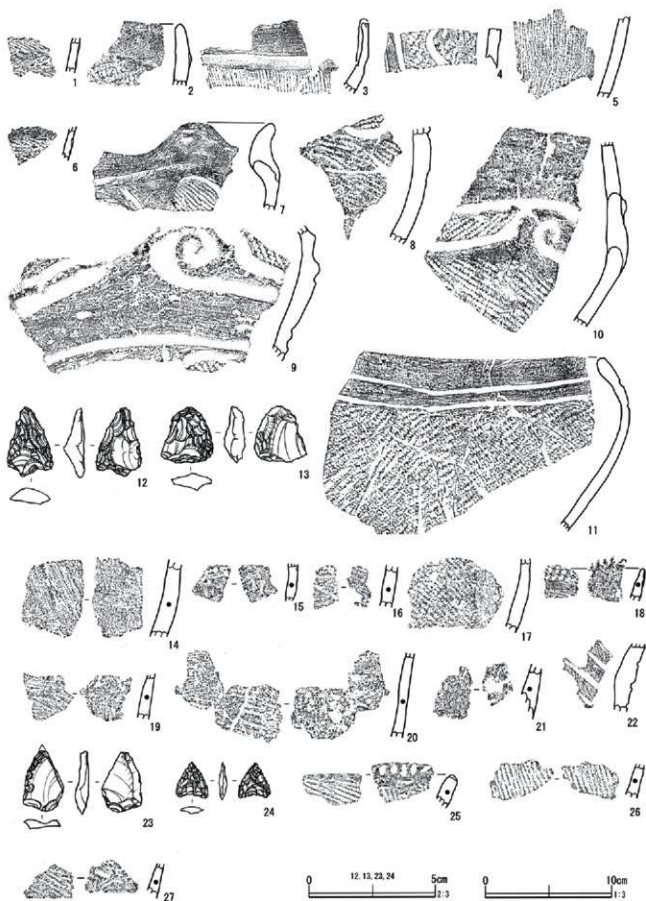
(4) 土坑

●第1号土坑（第24図）

E3グリッドに位置する。平面形は長径約0.8m、短径約0.7mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、覆土は3層に区分できた。底面は平坦である。

出土遺物（第26図）

土器 第26図2が本址出土資料である。3条1組の弧状の平行沈線を少しの間隙を開けて重畳させ平行沈線の交点に円形竹管を刺突する。縦位の円形竹管列の下には割付け線がうかがわれる。諸磯a式である。



第 23 圖 豎穴狀遺構・炉穴出土遺物

●第2号土坑（第24図）

E3グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.9mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.5mを測り、覆土は10層に区分できた。底面は南寄りが浅く窪む。

出土遺物（第26図）

土器 第26図3・4が本址出土資料である。3は破片上端に細隆起線を持つ表裏条痕の資料である。4は縦横の沈線と円形刺突のうかがわれる胴部資料である。

●第3号土坑（第24図）

F4グリッドに位置する。平面形は長径約2.8m、短径約1.2mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは0.15mほどであるが、中央北寄りに穿たれたビットでは約0.6mを測り、覆土は5層に区分できた。

出土遺物（第26図）

土器 第26図5～12が本址出土資料である。このうち5～10は胎土に繊維を含む条痕文系土器群で早期末葉に位置づけられる。このうち10は絡条体圧痕文の施された口縁部資料である。11は単節縄文の横位の結節回転がうかがわれる諸磯a式、12は無節縄文の施された加曾利E式土器である。

●第4号土坑（第24図）

E5・6・F5・6グリッドに位置する。平面形は長径約2.7m、短径約2.0mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。遺構に伴うビットを2基検出した。

●第5号土坑（第24図）

F3グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.7mを測り、東側にテラスを持つ。

●第6号土坑（第24図）

E2・F2グリッドに位置し、第1号住居跡を切る。平面形は長径約1.5m、短径約0.8mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り覆土は2層に区分できた。底面はほぼ平坦であるが東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第26図）

土器 第26図13・14が本址出土資料で、表裏に条痕文を施す縄文早期条痕文系土器群である。前者は、胴部に括れを持つ条痕文系土器で、縦横、斜位に細隆起線による区画を設け、細隆起線の要所に円形刺突を挿入する。

●第7号土坑（第24図）

E3・4グリッドに位置し、第1号炉穴を切る。平面形は長径約1.1m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り覆土は1層である。底面は西寄りが浅く窪む。

出土遺物（第26図）

土器 第26図15・16が本址出土資料である。前者は条痕文系土器群の胴部資料、後者は単節縄文の結節部



第24図 第1～10号土坑

の回転圧痕がうかがわれる諸磯a式土器である。

●第8号土坑（第24図）

D2グリッドに位置し、第13号土坑を切る。平面形は長径約1.2m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、覆土は2層に区分できた。

出土遺物（第26図）

土器 第26図17が本址出土資料である。無節縄文が観察される中期加曾利E式土器の胴下半の資料である。

●第9号土坑（第24図）

C8グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測る底面の平坦な土坑である。

●第10号土坑（第24図）

A1・B1グリッドに位置し、第1号溝跡に切られる。残存部で長径約1.3m、短径約0.6mを測る。確認面から底面までの深さは約0.5mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

●第11号土坑（第25図）

D3グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測る。底面は平坦で東寄りがわずかに窪む。

出土遺物（第26図）

土器 第26図18～20が本址出土資料で、18はわずかに右下がりとなる細隆起線の貼られた表裏条痕文の土器である。19・20は単節縄文が斜位から縦位に回転施文された加曾利E式土器の胴部資料である。

●第12号土坑（第25図）

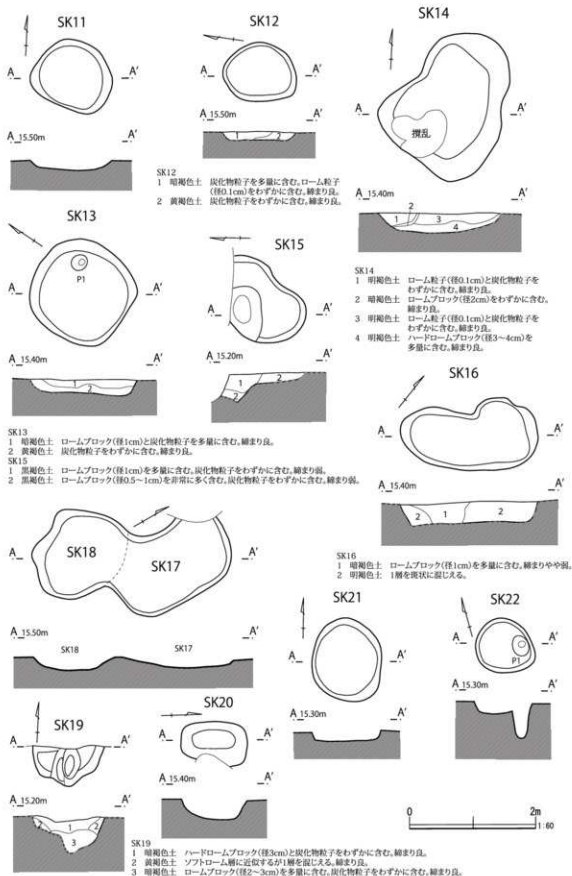
D3・E3グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.9mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、覆土は2層に区分できた。底面は平坦である。

●第13号土坑（第25図）

D2・3グリッドに位置し、第8号土坑に切られる。平面形は長径約1.8m、短径約1.7mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、覆土は2層に区分できた。底面はほぼ平坦で南寄りが浅く窪む。遺構に伴うピットを1基検出した。

出土遺物（第26図）

土器 第26図21～26が本址出土資料である。21は口唇部を角頭状に整えた平縁土器で絡条体圧痕文が施される。22～26は中期から後期にかけての一群である。22は口縁部に1条の沈線が引かれる平縁土器で、後期初頭に位置づけられよう。23・24は縄文帯と磨消文帯とがうかがわれる胴部資料で、称名寺式に該当しよう。



第 25 図 第 11 ~ 22 号土坑

●第14号土坑（第25図）

D3グリッドに位置する。平面形は長径約2.4m、短径約2.0mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、覆土は4層に区分できた。底面は中央が浅く窪む皿状で、南西部に攪乱を受ける。

出土遺物（第26図）

土器 第26図27～29が本址出土資料で、27は単節縄文の施された胴部資料、28は右下がりに下がる弧状の縄文帯が観察される胴部資料である。29は先端の尖る櫛状施文具で不規則な格子目文が施される資料である。後期の所産であろう。

●第15号土坑（第25図）

C2・D2グリッドに位置し、第1号不明遺構を切り、第26号土坑と第1号溝跡に切られる。検出部分の長径は約1.5m、短径約1.0mを測る。確認面から底面までの深さは約0.4mを測り、覆土は2層に区分できる。底面はほぼ平坦であるが、東側に小孔が穿たれる。

出土遺物（第26図）

土器 第26図30～34が本址出土資料である。30は節の細かい単節縄文の施される胴部小片、31は器面が荒れているが無文の胴部資料、32は左下がりに斜行する条線文の施されたものである。33は底径8cmを測る無文の底部資料である。34は外面に緑色の菊花のプリント模様のある小碗である。

●第16号土坑（第25図）

D2グリッドに位置し、第17号土坑を切る。平面形は長径約2.2m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、覆土は2層に区分できた。底面は平坦である。

●第17号土坑（第25図）

D2グリッドに位置し、第16・18号土坑に切られる。平面形は長径約2.0m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第18号土坑（第25図）

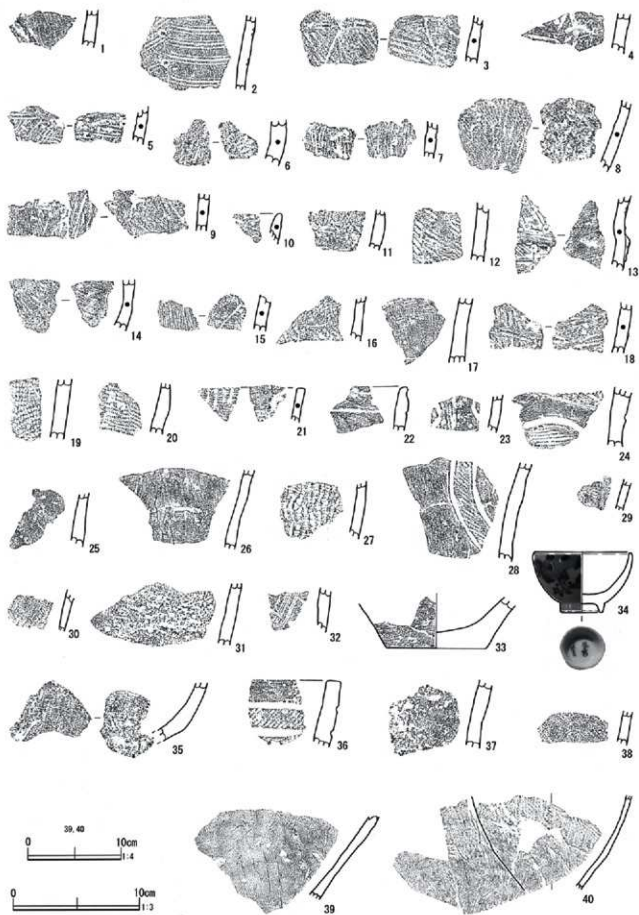
D2グリッドに位置し、第17号土坑を切る。平面形は長径約1.5m、短径約1.4mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

出土遺物（第26図）

土器 第26図35～37が本址出土資料である。35は表裏条痕撫で消しとなる底部付近の資料である。36は口唇部を角頭状に整える口縁部資料で、横位展開の縄文帯1帯が確認できる。後期称名寺式土器であろう。37は無文の胴部資料である。

●第19号土坑（第25図）

C1グリッドに位置し、北半部は調査区外である。第1号溝跡を切る。検出部分の長径は約1.2m、短径約0.6mを測る。漏斗形の形態をとり、底面中央部がビット状に窪む。確認面から底面までの深さは約0.5mを測り、覆土は3層に区分できた。



第 26 圖 土坑出土遺物 (1)

出土遺物（第28図）

土器 第28図1・2は同一個体で、単節LR縄文を前面に縦位から斜位回転させる深鉢形土器である。口縁部外縁にわずかに無文帯が形成されるが区画線は持たない。輪積痕が顕著に残される。内面整形は縦位の丁寧な撫で整形である。残存部最大径は22cmを測る。3は無文の深鉢形土器の胴部資料である。外面は縦位のヘラ削りののち粗く撫でられている。輪積痕が顕著である。内外とも被熱し荒れている。特に内面はあばた状の火擦ねが著しい。残存部推定最大径は26cm、残高16cmを測る。

●第20号土坑（第25図）

D3グリッドに位置する。平面形は長径約1.0m、短径約0.7mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は北寄りに向かって傾斜する。

●第21号土坑（第25図）

C3グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約1.1mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第22号土坑（第26図）

C3・4グリッドに位置する。平面形は長径約0.9m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は東寄りにビットを1基検出した。

●第23号土坑（第27図）

C3グリッドに位置し、第24号土坑に切られる。平面形は長径約1.7m、短径約1.0mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。底面中央北側にビット1基を検出した。

●第24号土坑（第27図）

C3・4グリッドに位置し、第23号土坑を切る。平面形は長径約2.2m、短径約1.2mの不整楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第26図）

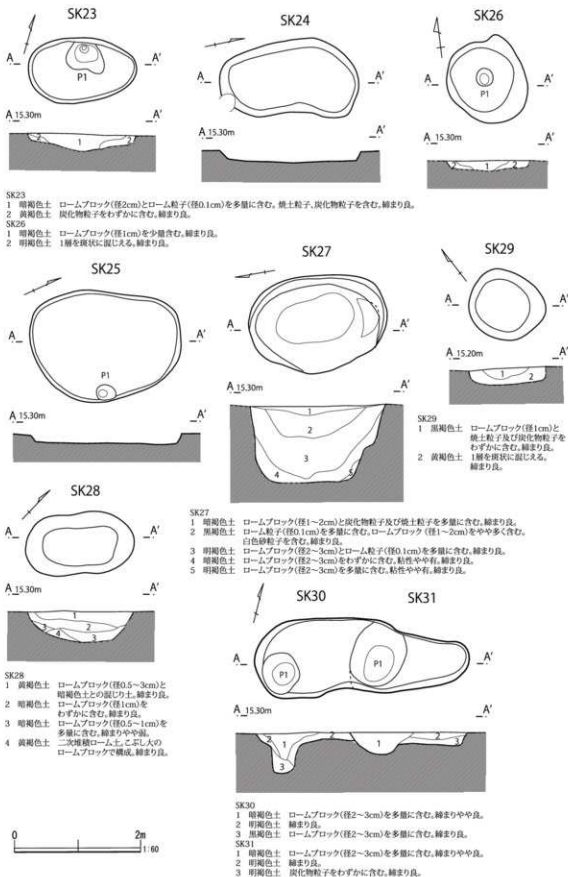
土器 第26図38は、節の細かい単節縄文のみられる胴下半部の資料である。諸機a式である。

●第25号土坑（第27図）

C2・3・D2・3グリッドに位置する。平面形は長径約2.4m、短径約1.8mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。東壁際にビットを1基検出した。

●第26号土坑（第27図）

C2グリッドに位置し、第15号土坑と第1号不明遺構を切る。平面形は長径約1.4m、短径約1.3mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。遺構に伴うビットを1基検出した。



第 27 図 第 23 ~ 31 号土坑

出土遺物（第26図）

土器 第26図39・40が本址出土資料である。前者は縦位の撫で整形痕を顕著に残す底部付近の大型破片である。後者は、単節縄文の地文上に縦位の沈線が乱雑にひかれた深鉢形土器の胴下半の資料である。残存部最大径は17cm、残高10cmを測る。

●第27号土坑（第27図）

C2・3グリッドに位置し、第33・34号土坑を切る。平面形は長径約2.2m、短径約1.6mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約1.3mを測り、南側に小さなテラスを持つ。底面は平坦である。覆土は5層に区分できた。

出土遺物（第28図）

土器 第28図4～7が本址出土資料である。4は表裏条痕の条痕文系土器群、5は櫛状施文具によるレンズ状文と縦位の円形刺突の観察される諸磯a式土器、6は横走する凹線の下に節の大きな複節縄文の施される加曾利E式土器である。

土製品 第28図7は土製円盤の残欠である。外面に節の細かい単節縄文のみられる胴部破片を素材とし、面取り整形を施し、粗く研磨している。

●第28号土坑（第27図）

A3グリッドに位置し、第2号住居跡を切る。平面形は長径約1.8m、短径約1.0mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.5mを測り、覆土は4層に区分できる。南西側では底面から壁にかけてだらだらと立ち上がるが北東側では70度ほどの角度を持って立ち上がる。

出土遺物（第28図）

土器 第28図8～12が本址出土資料である。8は表裏条痕の早期末葉の資料、9は無節縄文の施された胴部資料、10は単節縄文が充填される加曾利E式期の口縁部文様帯付近の資料、11は斜行する条線文の観察される安行式期の胴部下半の資料、12は、隆帯による環状浮文と文様帯下端を画す2条の隆帯が看取される資料である。

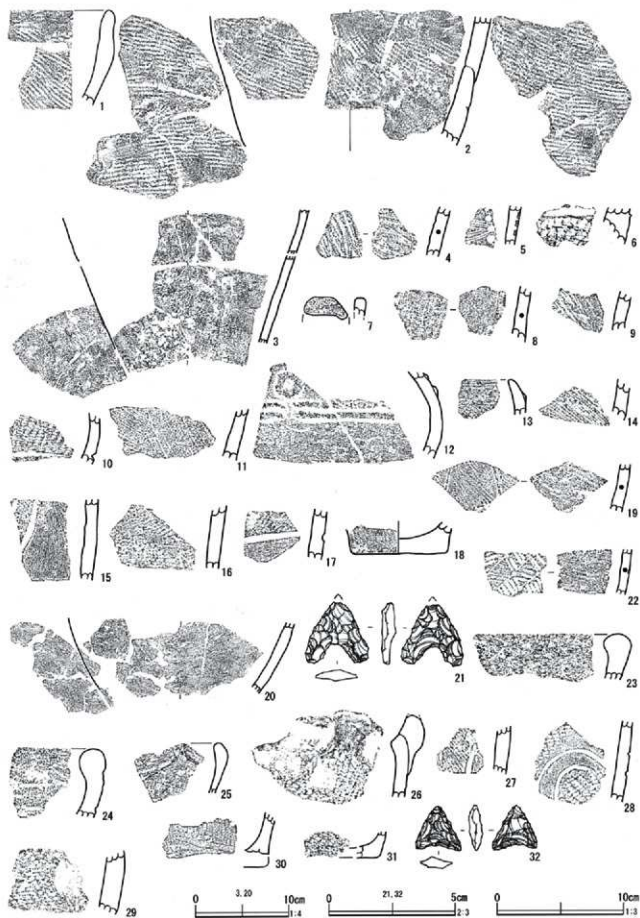
●第29号土坑（第27図）

A2・B2グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約1.1mの円形を呈する土坑である。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、覆土は2層に区分できた。底面は平坦である。

出土遺物（第28図）

土器 第28図19・20が本址出土土器である。前者はやや開き気味に垂下する細隆起線のみられる表裏条痕の資料である。後者は無文の胴下半の資料である。表裏特に内面はよく磨かれる。残存部最大径24cm、残高10cmほどを測る。

石器 第28図21は淡緑色の凝灰質の石材を用いた凹基無茎石鐮である。先端部をわずかに欠く。裏面中央先端部側に残された剥離面が主剥離とみられる。整形剥離ののち不規則ながら丁寧な調整剥離が施される。



第 28 图 土坑出土遗物 (2)

●第30号土坑（第27図）

B2グリッドに位置し、第30号土坑に切られる。残存部で長径約1.5m、短径約1.2mを測る。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、西寄り壁際でビット1基を検出した。覆土は3層に区分できた。

出土遺物（第28図）

土器 第28図17は確実に本址に伴う資料で、横位の沈線とその上部に展開する単節縄文を見て取ることのできる胴部資料である。

●第31号土坑（第27図）

B2・C2グリッドに位置し、第30号土坑を切る。平面形は長径約1.9m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、覆土は3層からなる。土坑西寄りでビット1基を検出した。

出土遺物（第28図）

土器 第28図13～16及び18は第30号土坑及び第31号土坑からの出土資料である。13は口縁部の内湾する資料で口縁部無文帯下端を断面三角形の細隆起線で閉じるものである。14は右下がりの条線文の観察される胴部資料、15は2条の沈線で画された縄文帯が垂下するもの、16は無節縄文の施されたものである。18は無文の底部資料で底径は7.5cmを測る。

●第32号土坑（第29図）

B2・C2グリッドに位置する。平面形は長径約2.5m、短径約1.9mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、覆土は2層に区分できる。底面はほぼ平坦で大小2基のビットを検出した。

出土遺物（第28図）

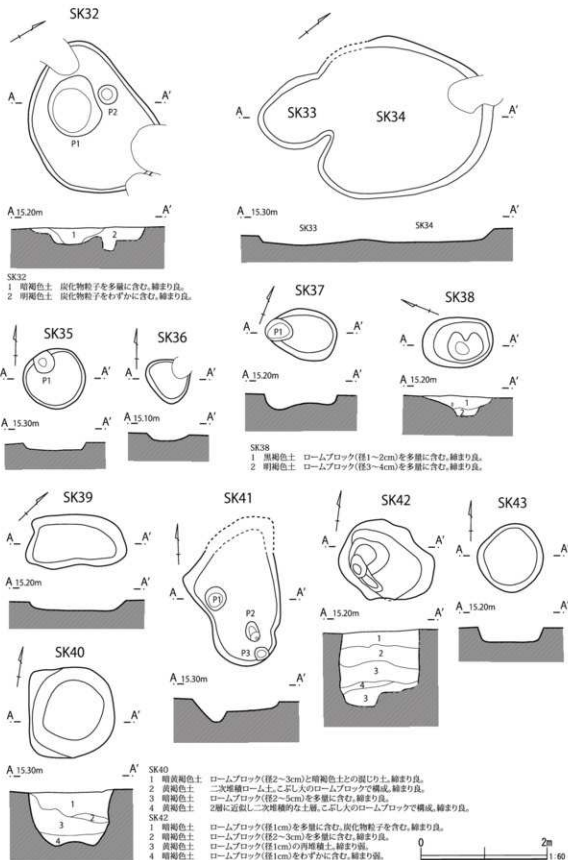
土器 第28図22～28が本址出土の資料である。22は表裏条痕の早期末の資料で、外面には斜格子となる沈線と要所に押捺された円形刺突が看取され、斜格子区画内には単沈線が充填される。23、24は玉縁状の口唇部を持つ無文の資料で、後者はやや内湾傾向を示す。25は無文の波状縁土器で、口縁部に沿うように微隆帯が貼付される。26は、加曾利E式末葉の深鉢形土器の口縁部資料である。内削ぎに整形された口縁部外面は剥落し、口縁部に付された突起が残される。橋状把手風に形成されるが、挟り込まただけで貫通していない。把手頂部に加飾が剥落した痕跡が残される。単節縄文が施される。27・28は縄文帯と磨消文帯とで飾る胴部資料である。

●第33号土坑（第29図）

C3グリッドに位置し、西側を第27号土坑に切られ、北東側で第34号土坑と重複するが、新旧関係は明確でない。平面形は長径約1.1m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第34号土坑（第29図）

C2・3グリッドに位置し、第33号土坑と重複するが、新旧関係は明確ではない。平面形は長径約3.0m、短径約2.6mの不整円形を呈する。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は北寄りに緩やかに傾斜するがほぼ平坦である。



第29図 第32～43号土坑

出土遺物（第28図）

土器 第28図29～31が本址出土土器である。29は単節縄文の胴部資料である。30・31はともに無文の底部資料である。前者は外面に縦位の撫で整形が看取される。

石器 第28図32は、ホルンフェルス製の石鏃である。貝殻状の剥片を素材とするものと思われ、裏面中央に素材剥片の主剥離が残る。両側縁及び基部の調整加工は、剥離の大きさにばらつきがあるものの丁寧で規則的である。

●第35号土坑（第29図）

D6グリッドに位置する。平面形は直径1.0mの円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面はほぼ平坦である。遺構に伴うビットを1基検出した。

●第36号土坑（第29図）

A2グリッドに位置する。平面形は長径約0.8m、短径約0.7mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面はほぼ平坦である。

●第37号土坑（第29図）

A2・B2グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約0.8mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は東寄りが高く窪む。遺構西端部にビット1基を検出した。

出土遺物（第30図）

土器 第30図1・2が本址出土資料である。1は浮線文系の諸磯b式土器の細片である。2は単節縄文の施された胴部資料で、加曾利E式であろう。

●第38号土坑（第29図）

A3グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約0.8mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、覆土は2層に区分できた。底面は中央が漏斗状に窪む。

出土遺物（第30図）

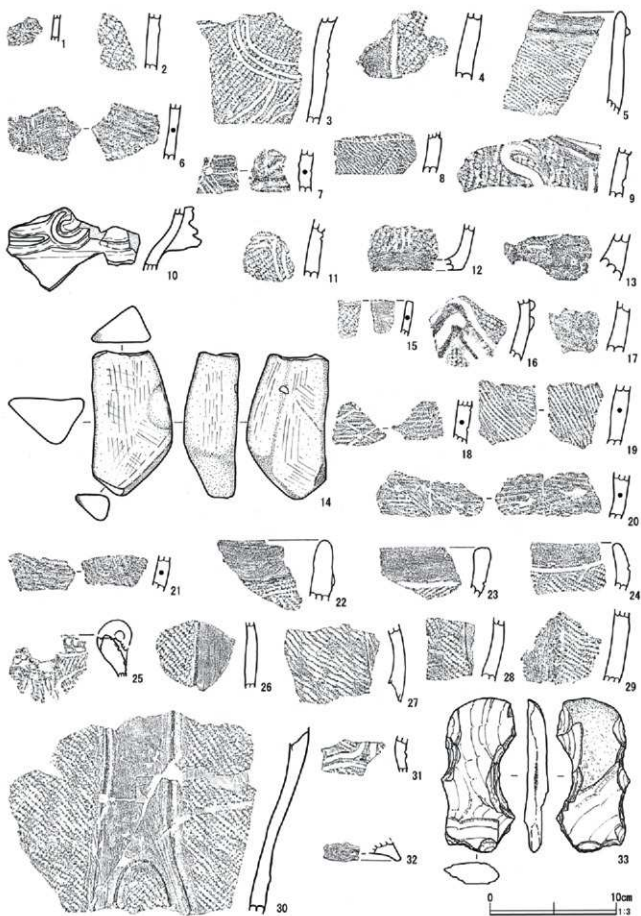
土器 第30図3・4が本址出土資料で、前者は単節縄文地文上に弧線が描かれる加曾利E式前半期の深鉢形土器の胴部資料、後者は垂下沈線によって縄文帯と磨消文帯とを区画する加曾利E式後半期の深鉢形土器の胴部資料である。

●第39号土坑（第29図）

A3・4グリッドに位置する。平面形は長径約1.6m、短径約0.8mの不整楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面はほぼ平坦である。

出土遺物（第30図）

土器 第30図5は口縁部に幅狭の無文帯を持ち下端を比較的大のある隆帯で画す資料である。緩波状縁を呈すものと思われ、地文は単節LR縄文を施す。



第30图 土坑出土遺物 (3)

●第40号土坑（第29図）

A3・B3グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.3mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.9mを測り、覆土は4層に区分できた。底面は中高で東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第30図）

土器 第30図6～13が本址出土である。6・7は表裏に条痕文の施される資料である。後者は外面に沈線による横位区画文と斜行する集合沈線とが観察され、交点には円形刺突もうかがわれる。8は横位と斜位の平行沈線と沈線内のC字状爪形文の連続刺突が観察されるもので、いわゆる轆轤形文を形成するとみられる諸磯a式土器である。9は垂下沈線間に太い蛇行沈線が施される資料である。10は隆帯によってしっかりと渦を巻く口縁部文様帯が形成されるキャリバー形深鉢である。頸部には無文帯が形成される。11は縄文地文上に平行沈線でモチーフが施された胴部資料、12と13は底部資料である。

石器 第30図14は、断面三角形となる磨石である。使用面は、表裏と側面の3面に及び非常によく磨られている。また、正面上端の欠損部小口には敲打痕が残される。被熱したものとみられ、全体に薄い橙褐色を呈する。

●第41号土坑（第29図）

B3・C3グリッドに位置し、第4・5号炉穴を切る。平面形は長径約2.3m、短径約1.5mの不整形円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面はほぼ平坦であるが西寄り壁際と南東隅にビット3基を検出した。

出土遺物（第30図）

土器 第30図15・16が本址出土資料である。前者は、外面に単節LR縄文を施す小型の深鉢形土器である。内面はよく撫でられている。花積下層式新段階の資料であろう。後者は、2条の隆帯で弧線文が描かれる資料である。

●第42号土坑（第29図）

B3グリッドに位置する。平面形は長径約1.5m、短径約1.3mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約1.2mを測り、覆土は4層に区分できた。底面西寄りには一段深い掘り込みが認められる。

出土遺物（第30図）

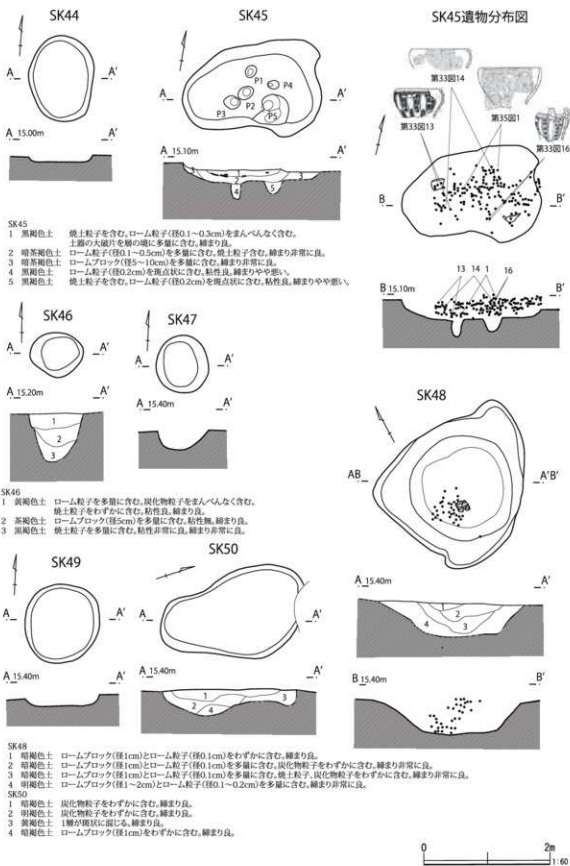
土器 第30図17は無文の底部付近の資料である。

●第43号土坑（第29図）

B3グリッドに位置する。平面形は直径1.1mの円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第44号土坑（第31図）

C7・8グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.1mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。



第31図 第44~50号土坑

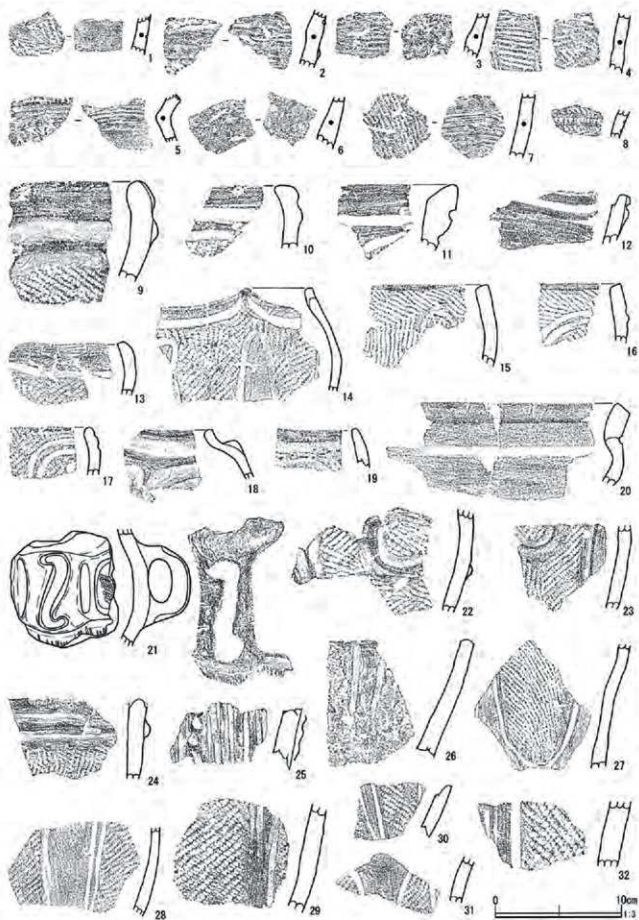
●第45号土坑（第31図）

B4グリッドに位置し、第3号住居跡と重複する。平面形は長径約2.2m、短径約1.5mの不整楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、覆土はピットを含め5層に区分できた。底面はほぼ平坦で、遺構に伴うピットを5基検出した。大破片を含む縄文土器片が土坑内から万遍なく出土している。

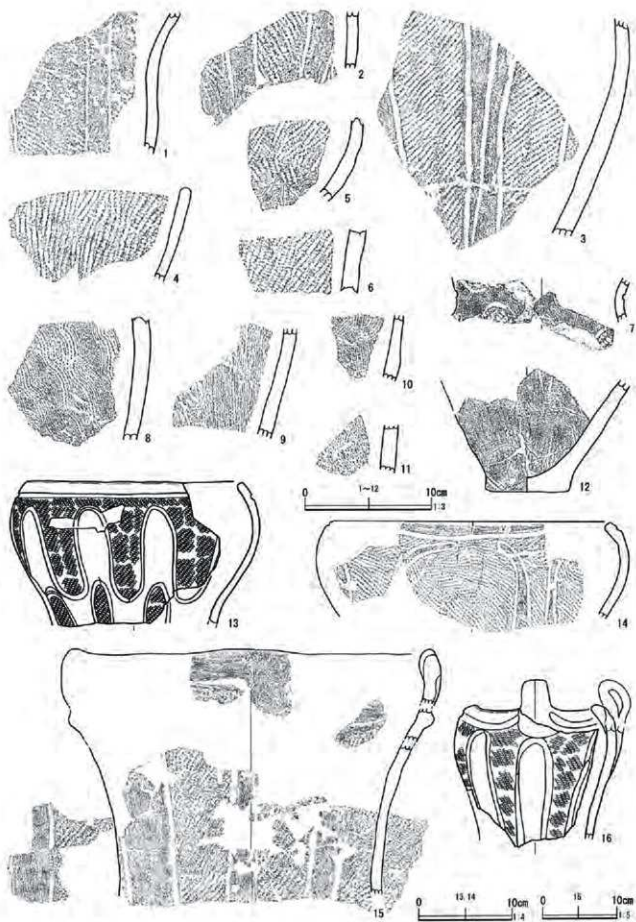
出土遺物（第32・33・35図）

土器 第32図1～7は早期条痕文系土器群である。表裏に条痕文が施される。このうち1では刺し切るような細い沈線で区画され、内部に刺突が充填される。2では横走する2本の細隆起線が観察され、円形刺突も施される。4では縦位の区画沈線内に横位の平行沈線が充填される。5は大きく括れる資料で、括れ上部には連続刺突がみられる。8は変形爪形文の観察できる浮島式である。9～20は加曽利E式土器の口縁部または口縁部文様帯周辺の資料である。9～11は大型のキャリバー形深鉢の口縁部資料で、太い隆帯で窓枠状の楕円形区画を構成するとみられるものである。12は同様の資料の口縁部文様帯下端区画の資料である。頸部には無文帯が形成される。13～18は加曽利E式後半のキャリバー形深鉢の口縁部資料である。14は緩波状縁を呈するもので、鋸歯状の磨消文帯がうかがわれる。15～17は凹状の磨消文帯が形成される一群である。18は、やや厚みがあるが匏型注口土器の口縁部資料であろう。20は無文で外削ぎの口唇部を持つ浅鉢型土器である。表裏とも極めてよく撫でられる。21は両耳壺に付された橋状把手である。把手には逆S字状の沈線が引かれる。楕円形を呈するとみられる口縁部文様帯には単節縄文が充填される。体部は条痕文である。22～24は隆帯でモチーフの描かれる胴部資料である。22は胴部に大きな渦巻文を配する深鉢形土器、23は垂下隆帯と隆帯による円文がみられるもの、24は横走隆帯がみられるものである。25は垂下する鎖状隆帯とこれに沿う集合沈線のみられる曾利式土器である。26～第33図3は垂下する縄文帯と磨消文帯とが看取される胴部資料である。このうち27は凹状磨消しとなる資料、31は鋸歯状の縄文帯がみられる資料である。

第33図4～6は単節縄文の施された胴部資料である。7は凹状の縄文帯と無文帯とが噛み合う胴部の括れ部付近の資料である。括れ部の径は13cm、残高4cmである。8～11は櫛状施文具を用い条線文が施された一群である。12は無文となる底部資料である。底径7cm、残高10cmを測る。外面には縦位の撫で整形の痕跡が顕著に残る。13はキャリバー形深鉢で、口縁部に幅の狭い無文帯を置き下端を単沈線で区画している。胴部上半には大振幅の波状文が描かれ、胴下半にはこれと噛み合う凹状の縄文帯が描出される。内面整形は、口縁部は丁寧な横位の撫で胴部は斜位の撫でがみられる。胎土には少量の砂粒を含むが総じて良く洗練され焼成も良好である。口径23cm、最大径26cm、残高15cmを測る。14は平縁のキャリバー形深鉢の口縁部資料で、口縁部に太めの沈線を引き、ごく幅の狭い無文帯を持つように構成している。胴上半の文様帯はいわゆる玉抱き文となるものと思われ、幅の狭い磨消文帯が楕円形の縄文帯を抱き込むように配される。地文は単節LR縄文で、部位によって施文方向はかなり異なるが、間隙が生じないように重複させながら施文している。内面整形は極めて丁寧な横位の撫で、内湾が強く撫での及ばない口縁内側には、撫で整形の下地として施されたヘラ削りの痕跡が残される。胎土はよく洗練された緻密なもので、焼成は良好、色調は明るい茶褐色から淡褐色である。推定口径は30cm、最大径33cm、残高11cmを測る。15は、大型のキャリバー形深鉢で、推定口径50cm、残高33cmほどを測る。よく撫でられた無文の口縁部を持ち、口縁部文様帯には窓枠状の区画が配されたものと推定される。胴部は沈線によって区画された縄文帯と磨消文帯が交互に巡るものとみられる。16は小型のキャリバー形深鉢で、口縁部に無文帯を置き、以下は口縁部から胴



第 32 图 土坑出土遺物 (4)



第 33 图 土坑出土遺物 (5)

下半まで、 $\cap$ 状の磨消文帯が細長く展開するものとみられる。失われているが、口縁部に橋状把手が付されていたものと思われ、把手基部の粘土だまりが観察される。胎土には砂粒を含みやざらつく。内面の整形は胴下位から掻き上げるような粗い撫で整形が施される。推定口径10cm、最大径13cm、残高10cmほどである。

第35図1は平縁のキャリパー形深鉢の胴上半部資料である。口縁部から胴上半全面に単節RL縄文を施文する。口縁部に沿うように横位回転させる部分があるが、その他はおおむね縦位回転である。括れ部に胴下半に展開する下向きの弧線文がうかがわれることから、胴下半には $\cap$ 状となる縄文帯と間隙に磨消文帯が形成されるものと推定される。内面整形は粗雑な横位の撫で整形である。胎土には砂粒を多く含み焼成もやや甘いため触るとザラザラとした感触が残る。また、外面にはタール状炭化物の付着がみられる。推定口径24cm、残高16cmを測る。2は、幅のある隆帯が垂下する胴下半から底部にかけての資料である。節の大きな単節RL縄文が縦位施文される。被熱しているものと思われ、背面の剥落が著しいほか、内面にもあばた状の火痕が顕著に観察される。残存部最大径31cm、残高21cmを測る。

石器 第35図3はホルンフェルス製の撥型の打製石斧の基部残欠である。正面中央は素材剥片の主剥離、裏面には大きく礫表皮を残す。両側縁に階段状剥離を加え縦長の形状を整えている。4はホルンフェルス製の短冊形の打製石斧である。左側縁が厚く、右側縁が薄くなる傾向があり、素材は左側縁に打瘤を持つ横長の剥片と思われる。両側縁の中ほどがわずかに括れる。刃部は円刃をなす。5はホルンフェルス製の打製石斧の基部残欠である。厚みのある剥片を素材とする。両側縁から階段状剥離を加え細身に仕上げられている。

●第46号土坑（第31図）

A5グリッドに位置する。平面形は長径約0.8m、短径約0.7mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.8mを測り、覆土は3層に区分できた。底面は中央が窪む。

●第47号土坑（第31図）

E5・6グリッドに位置する。平面形は長径約0.9m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第48号土坑（第31図）

D6・E6グリッドに位置する。平面形は長径約2.7m、短径約2.5mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.6mを測り覆土は4層に区分できた。上層に浅いテラスを持ち底面は中央が窪む。大破片を含む土器片が中央部から集中して出土している。

出土遺物（第30図）

土器 第30図18～32が本址出土の土器である。18～21は早期条痕文系土器群に比定され、表裏に条痕文が施される。このうち18とは20では斜行する沈線と交点に押捺される円形竹管文が看取される。22～25は口縁部に幅の狭い無文帯を置く深鉢形土器で、22では微隆帯で無文帯下端を閉じる。25では口縁部に橋状把手を持っていたものと思われ、これが欠損した痕跡が残される。26～31は縄文帯と磨消文帯が形成される胴部資料である。25は沈線で区画するもの、26～30は微隆帯で区画するものである。このうち30は磨消

文帯が下向きのY字状に形成される。32は底部資料で、脚状に外へ大きく張り出す。

石器 第30図33はホルンフェルス製の打製石斧である。扁平な楕円礫を素材とするものと思われ、正面に粗割りした主剥離が、裏面には礫表皮を大きく残す。基部は粗割りのままとし、右側縁は階段状剥離で浅く挟りを入れたのち敲打調整を行っている。左側縁は、裏面側からは基部方向に数回の打撃を加えるのみであるが、正面側から加撃して直線的な側縁を作り出している。刃部加工は不明瞭で、一度欠損したのち細かい調整を加え再生を図っているのかもしれない。

●第49号土坑（第31図）

D5グリッドに位置する。平面形は直径1.2mの円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第50号土坑（第31図）

D5・E5グリッドに位置する。平面形は長径約2.4m、短径約1.4mの不整楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.4mを測り、覆土は4層に区分できる。底面は南寄り血状に窪むほか、北部壁際にもやや深くなる部分が認められる。

●第51号土坑（第34図）

B3・4グリッドに位置し、第3号住居跡に切られる。平面形は長径約3.0m、短径約2.3mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.15mを測り、西側に楕円形のピットが形成される。覆土はピットを含め4層に区分できた。

出土遺物（第35図）

土器 第35図6～10が本址出土資料である。6～8は早期末の条痕文系土器群である。9は破片上部に竹管内皮を使った平行沈線が観察される胴部資料である。諸磯b式であろう。10は脚部片である。脚端部径10.5cmを測る。

●第52号土坑（第34図）

D5グリッドに位置し、第53号土坑と重複するが、新旧関係は明確でない。平面形は長径約2.0m、短径約1.9mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面はほぼ平坦である。

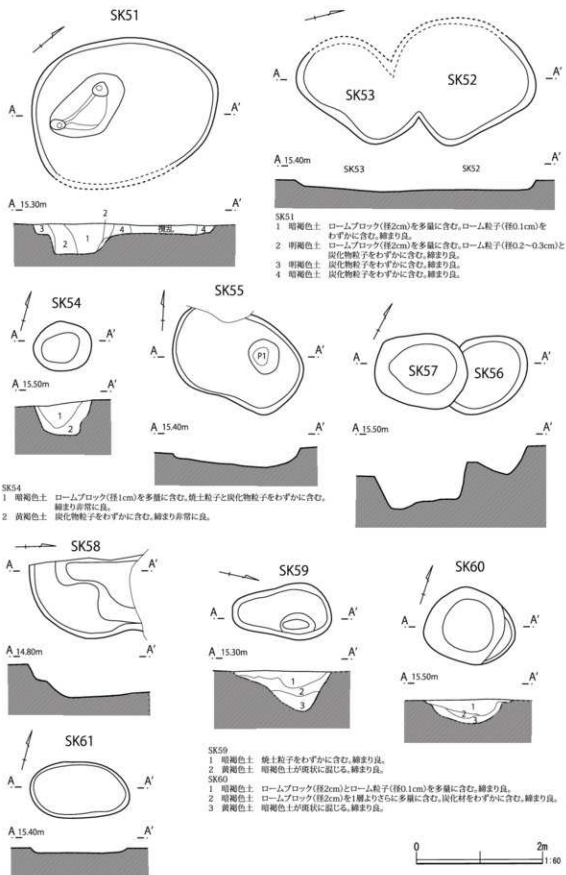
出土遺物（第35図）

土器 第35図11・12が本址出土資料である。ともに早期末条痕文系土器群に比定され、前者は斜行する細隆起線と刺突文を観察できる。

●第53号土坑（第34図）

D5・6グリッドに位置し、第52号土坑と重複するが、新旧関係は明確でない。平面形は長径約2.0m、短径約1.2mの不整楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面はほぼ平坦である。

図示すべき出土遺物はない。



第34図 第51～61号土坑

●第54号土坑（第34図）

C5・6グリッドに位置する。第1号住居跡に切られる。平面形は長径約0.9m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.5mを測り、覆土は2層に区分できた。底面は東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第35図）

土器 第35図13～17が本址出土土器である。13・14は表裏に条痕文が施される一群である。15は口縁部が内湾する沈線文系の諸磯b式土器である。16・17は同一個体で無文の胴部資料と思われる。加曾利E式土器であるが、被熱し火撥ねによる潰痕が著しい。

石器 第35図18は多孔質の安山岩を用いた石皿残欠である。裏面に凹みが観察される。

●第55号土坑（第34図）

C6・D6グリッドに位置する。平面形は長径約2.2m、短径約1.3mの不整楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は東に向かって傾斜する。ビット1基を検出した。

出土遺物（第35図）

土器 第35図19は平縁をなす口縁部に2条の平行沈線を引き、散漫なC字状爪形文を付すものである。要所に円形刺突が観察されるほか、口唇部に貼瘤がみられる。諸磯a式土器である。

●第56号土坑（第34図）

A6グリッドに位置し、第57号土坑に切られる。平面形は長径約1.5m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.4mを測り、底部は東寄りが深く面をなさない。

●第57号土坑（第34図）

A6グリッドに位置し、第56・58号土坑を切る。平面形は長径約1.5m、短径約1.2mの不整楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.6mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

出土遺物（第35図）

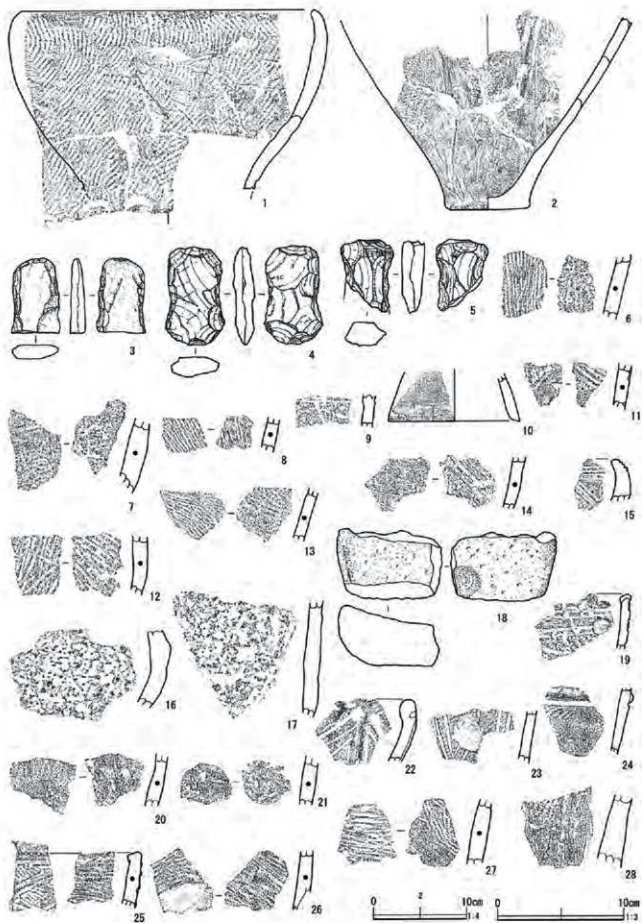
土器 第35図20～24が本址出土資料である。20・21は早期末条痕文系土器群に該当する。後者は表裏ともに条痕撫で消しの資料である。22～24は後期堀之内式期の資料である。22は円形刺突の付される波頂部から隆帯を垂下させる波状縁深鉢形土器、23は縦長三角形のパネル状の区画が形成される胴部資料である。24は横走隆帯とこれに沿う沈線が観察される胴部資料である。

●第58号土坑（第34図）

A6・7グリッドに位置し、西半部は調査区外である。第57号土坑に切られる。検出部分の長径は約1.8m、短径約1.3mを測る。確認面から底面までの深さは約0.5mを測り、底面は平坦であるが、南側から東側にテラスを持つ。

●第59号土坑（第34図）

E6グリッドに位置する。平面形は長径約1.6m、短径約0.9mの不整楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.6mを測り、覆土は3層に区分できた。底面は北寄りが浅く窪むもののほぼ平坦である。北東



第 35 图 土坑出土遺物 (6)

壁際でビット1基を検出した。

出土遺物 (第35図)

土器 第35図25・26が本址出土資料で、ともに早期末条痕文系土器群である。このうち前者は、やや内側に張り出す口唇部を内削ぎに整える平縁土器で、外面には細隆起線と沈線による斜格子文が描出される。格子目の要所には刺突が付される。

●第60号土坑 (第34図)

E6・F6・F6・7グリッドに位置し、第62号土坑を切る。平面形は長径約1.5m、短径約1.2mの不整形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、覆土は3層に区分できた。東側に浅いテラスを持ち、底面は丸く窪む。

出土遺物 (第35図)

土器 第35図27は表裏に条痕文の施された胴部資料である。

●第61号土坑 (第34図)

F6・7グリッドに位置し、第62号土坑を切る。平面形は長径約1.6m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第35図)

土器 第35図28は単節縄文がうかがわれる胴下半の資料である。

●第62号土坑 (第36図)

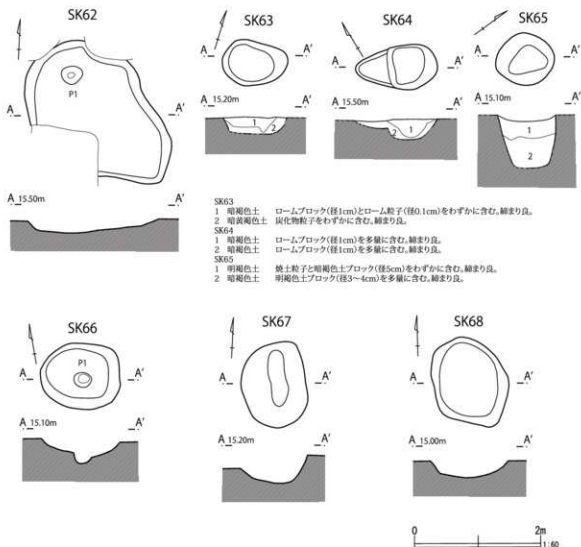
F7グリッドに位置し、第60・61号土坑に切られる。平面形は長径約2.7m、短径約2.0mの不整形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りに向かう傾斜を持つ。遺構北部でビットを1基検出した。

出土遺物 (第37図)

土器 第37図1～9が本址出土資料である。1～3は早期末条痕文系土器群である。1では、口縁部に沿う1条の沈線を起点とし左右に展開する斜行沈線が観察され、沈線間には短弧線が扇形に施文される。口唇部には細かく刻みがみられるほか、要所に円形刺突が押捺される。2は条痕地文上に先の尖った施文具でシャープな斜格子が描かれ、交点に円形竹管文が付されるものである。4～7は加曾利E式土器の胴部資料で、4・5では垂下沈線によって縄文帯と磨消文帯とが区画される。6・7は単節縄文の施される資料で、後者は、口縁部付近の資料とみられ、橋状把手も残される。8・9は無文の底部資料で、ともに底面円盤がやや突出するものである。前者は底径6.5cmほど、後者は底径5cmほどを測る。

●第63号土坑 (第36図)

E7・8グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約0.7mの不整形楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、覆土は2層に区分できた。底面は平坦である。



第36図 第62～68号土坑

●第64号土坑（第36図）

F8グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約0.7mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

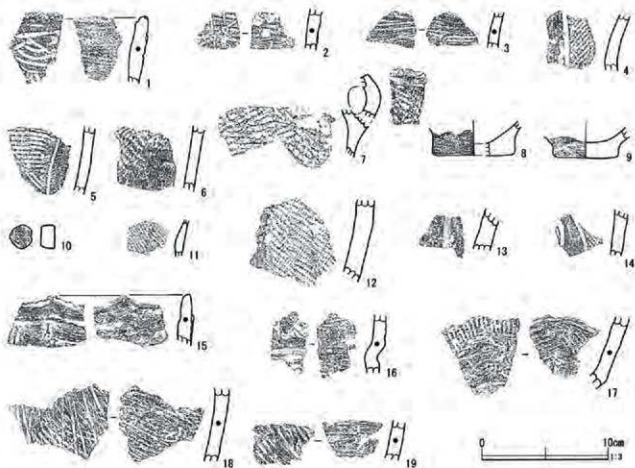
図示すべき遺物の出土はない。

●第65号土坑（第36図）

A5・6グリッドに位置する。平面形は長径約0.9m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.8mを測り、覆土は2層に区分できた。底面は隅丸三角形を呈しほぼ平坦である。

出土遺物（第37図）

土製品 第37図10は土製円盤である。表裏無文の胴部破片を素材とし、直径1.8cmほどの円形に仕上げられている。周囲を打ちかいて成形した後、粗く研磨している。



第 37 図 土坑出土遺物 (7)

●第 66 号土坑 (第36図)

D7・8グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。遺構中央でビット1基を検出した。

出土遺物 (第37図)

土器 第37図11・12が本址出土資料である。前者は、単節LR縄文を縦位施文するごく薄手で小型の土器である。括れを持つ器形であることがわかる。後者は、単節LR縄文を縦位施文する胴部資料で、縄文帯と磨消文帯との区画線を持たず指頭による撫でによって形成された微隆帯を区画とする。

●第 67 号土坑 (第36図)

C7グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約1.0mの不整楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

出土遺物 (第37図)

土器 第37図13・14が本址出土資料で、前者は垂下沈線が看取されるもの、後者は湾曲する沈線で縄文帯と磨消文帯とが区分されるものである。

●第 68 号土坑 (第36図)

C8・D8グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.2mの不整楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は中央が皿状に窪む。

出土遺物 (第37図)

土器 第37図15～19が本址出土資料である。いずれも早期末条痕文系土器群に該当する。15は緩波状縁を呈するもので、刻みを持つ口縁に沿うように細隆起線を巡らせ、これを起点に同様の細隆起線や沈線で文様帯を区画するようである。垂下降帯と沈線との交点には円形刺突が看取される。16は強い屈曲を持つ胴部資料で、屈曲上部にはシャープな沈線による区画がうかがわれ、区画内には刺突が充填されるようである。17～19は条痕のみの施される資料である。17は底部付近であろうか。外面の縦位の条痕が底面に至る直上で横位に撫でられることがわかる。

第 8 表 土坑出土土器計測表

図版	番号	遺 構	器 種	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
28	21	第29号土坑	石甕	凝灰岩	(2.5)	2.5	0.5	(2.3)	
28	32	第34号土坑	石甕	ホルンフェルス	1.8	1.8	0.5	1.2	
30	14	第40号土坑	磨石兼用敲石	砂岩	11.4	6.0	3.6	310.0	被熱
30	33	第48号土坑	打製石斧	ホルンフェルス	12.2	4.4	1.7	140.3	
35	3	第45号土坑	打製石斧残欠	ホルンフェルス	(5.9)	3.7	1.1	(40.0)	
35	4	第45号土坑	打製石斧	ホルンフェルス	7.8	3.8	1.4	67.3	
35	5	第45号土坑	打製石斧残欠	ホルンフェルス	(5.7)	3.2	1.8	(49.1)	
35	18	第54号土坑	石皿兼用凹石	安山岩	(5.2)	(8.1)	3.7	(181.2)	残欠

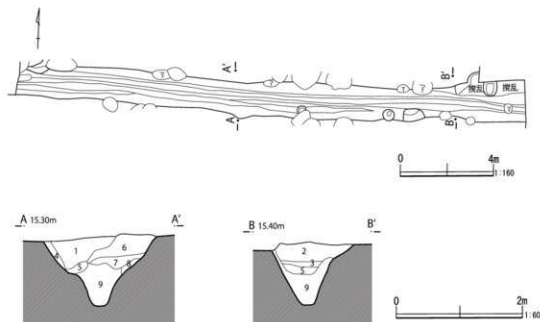
(5) 溝跡

●第 1 号溝跡 (第38図)

A1・2・B1・2・C1・2・D1・2・E1・2グリッドに位置し、第10・15号土坑と第3号炉穴、第1号不明遺構を切り、第19号土坑に切られる。調査区内を東西方向に長さ約21.5m延伸する。第5地点で検出した第2・3・5・6号溝と並行しており、一連の構造の一部と考えられる。平面形は直線的で、最大幅は約1.8m、確認面からの最大深は約1.1mを測る。断面形は底部に幅狭い面を持つ箱葉研で南側では部分的に段を持つ。土層断面から見ても数次にわたる掘り直しが行われたことがわかる。覆土は9層に区分でき、少なくとも1～5層と6・7層の2回の掘り直しが考えられる。

出土遺物 (第39図)

土器 第39図1・3～6は、胎土に少量の繊維を含む縄文早期末条痕文系土器群である。このうち1は、口唇部を内割ぎに整える平縁深鉢形土器で、数単位の小突起を持つものである。口唇部外縁には棒状工具による刺突が施される。表裏に横位の条痕が施され、外面には単沈線で縦位の区画が形成され、パネル上の区画内を斜方向に切る沈線も観察される。区画内には刺突が充填される。2は口唇部外面をやや肥厚させ刺し切るような刻みを付す。以下には波状貝殻文の観察される浮島式土器である。7は口唇部内面を肥厚させ断面三角形に整形する中期前半、勝坂式期の深鉢形土器の口縁部資料である。隆帯で描かれるモチーフは判然としないが、これに沿うように施された半截竹管外皮を用いたキャタピラ文が観察される。8～23は縄文中期後半の加曾利E式土器に相当する一群である。このうち8と9はいわゆる連弧文系の深鉢形土器の口縁部資料である。10は口縁部に無文帯を持つ平縁深鉢形土器、11はやはり口縁部に無文帯を持つ深鉢形



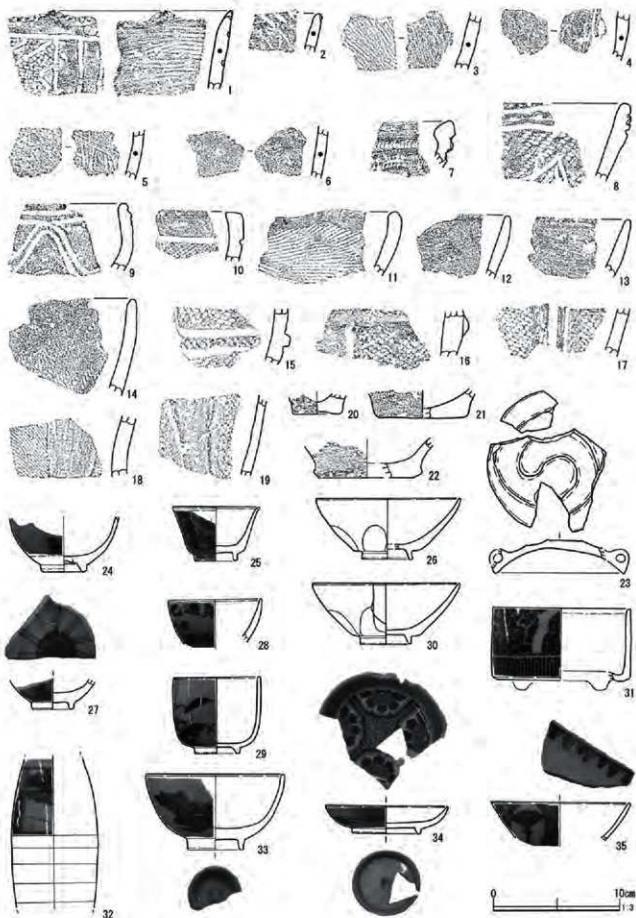
SD1

- 1 暗褐色土 ローム粒子(径0.2~0.3cm)をわずかに含む。サラサの土層で炭化材を含む。締まり非常に弱。
- 2 暗褐色土 1層に比しロームブロック(径1~5cm)を多量に含む。締まり非常に弱。
- 3 暗褐色土 2層が土圧により締まりが強くなったもの。
- 4 黄褐色土 1層を掘じえる。ローム流入土層。締まり弱。
- 5 暗褐色土 締まり非常に弱。
- 6 暗褐色土 ロームブロック(径1cm)とローム粒子(径0.2~0.3cm)を多量に含む。締まり弱。
- 7 暗褐色土 ロームブロック(径1cm)とローム粒子(径0.2~0.3cm)を多量に含む。炭化物粒子を含む。締まり良。
- 8 暗褐色土 7層を掘じえる。ローム流入土。締まり良。
- 9 暗褐色土 ロームブロック(径1~2cm)を多量に含む。ボソボソの顆粒状土層で締まり非常に弱。

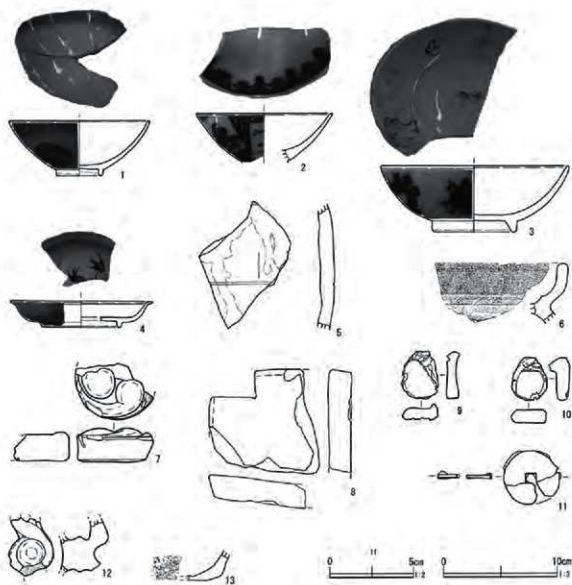
第38図 第1号溝跡

土器であるが、文様帯区画線は持たない。12・13は無文の口縁部資料、14は斜行する単節縄文がごく弱く施文された口縁部資料であり、後期に下る可能性もある。15~19は胴部資料で、15・16は口縁部文様帯下端を区画する降帯が観察される資料、17~19は縦位に垂下する沈線や微降帯で縄文帯と磨消文帯とが描出されるものである。20~22は当該期の無文の底部資料である。23は、微降帯による渦巻文の描出される蓋である。いわゆる瓢形の注口土器に付属するものと思われ、小型の橋状把手が付される。口径10.5cm、高さ2.5cmほどを測る。24~第26図4は近世末期から近代にかけての磁器である。このうち26と30は胴下半部に口状の削ぎ落しのみられる飯茶碗で濃い緑色の釉が掛けられる。27は近世期の資料で、呉須による網目の染付茶碗である。28は、コバルトによる染付で「□□製造元 東京□ 合名会社」の文字がうかがわれる。31は印判染付の香炉、32はプリントの祥瑞文の徳利である。33は菊花文の施されたいわゆるくらわんか茶碗である。34は呉須染付の小皿である。見込みは十字に分割され牡丹の花が四方に描かれ、口縁部には花菱が描かれる。外面は唐草文がめぐる。高台周囲には3条の圈線が引かれる。

第40図1は、口縁部に青いグラデーションのかかる飯茶碗、2は印判染付の飯茶碗で、外面は麻の実の地文に六歌仙のモチーフである。3はやや大ぶりの鉢で、内面には千鳥、梅花などが、外面は印判染付で桐などの図柄がうかがわれる。4は口折れの小皿で、口縁部は呉須の染付、見込みには燕が描かれる。5は瀬



第 39 图 满迹出土遗物



第40図 溝跡・不明遺構出土遺物

戸美濃産の自然釉の瓶子胴部破片である。破片上端に圈線の一部がうかがわれる。体部は回転ヘラ削りの痕跡が残る。6は近代の火鉢、7・8は近代の瓦で前者は巴文の残る瓦当面の破片である。9・10はいわゆるトチンで、瓦を含め、第5地点で検出された瓦窯からの流入資料であろう。11は鉄銭である。

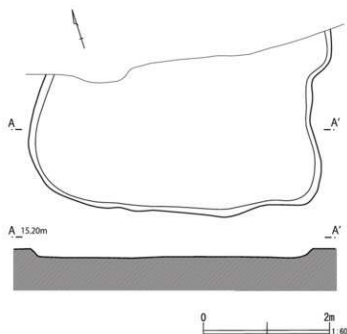
(6) 不明遺構

●第1号不明遺構(第41図)

C2グリッドに位置し、第15・26号土坑と第1号溝跡に切られる。残存部で平面形は長径約4.5m、短径約2.5mを測る。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物(第40図)

土器 第40図12・13が本址出土遺物である。12は算盤玉状の稜を持つ粘土柱の上下に8の字に捻転させた隆帯を施す大型の把手部の資料と思われる。土器本体はよく撫でられ薄手に仕上げられている。粘土柱の頂部はヘラ削りを施したのちよく撫でて漏斗状に窪ませている。把手全体に整形は丁寧でよく撫でられている。胎土も洗練され焼成良好である。13は薄手に仕上げられた底部資料である。器壁より底面のほうが



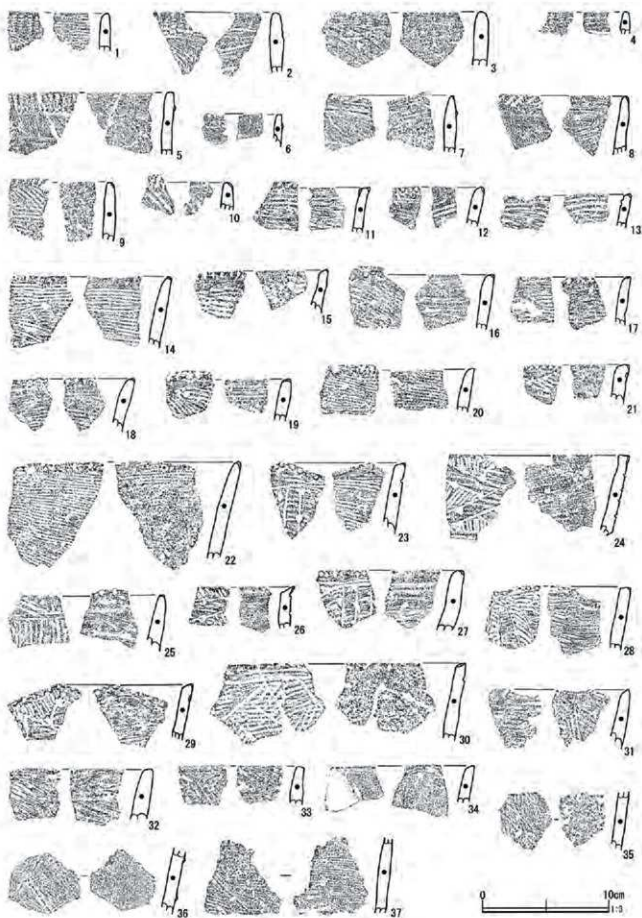
第 41 図 第 1 号不明遺構

薄く仕上げられている。外面は縦位の撫で、内面は横位の丁寧な撫でが施される。胎土はわずかに砂粒を含むもののよく洗練されており焼成も良好である。

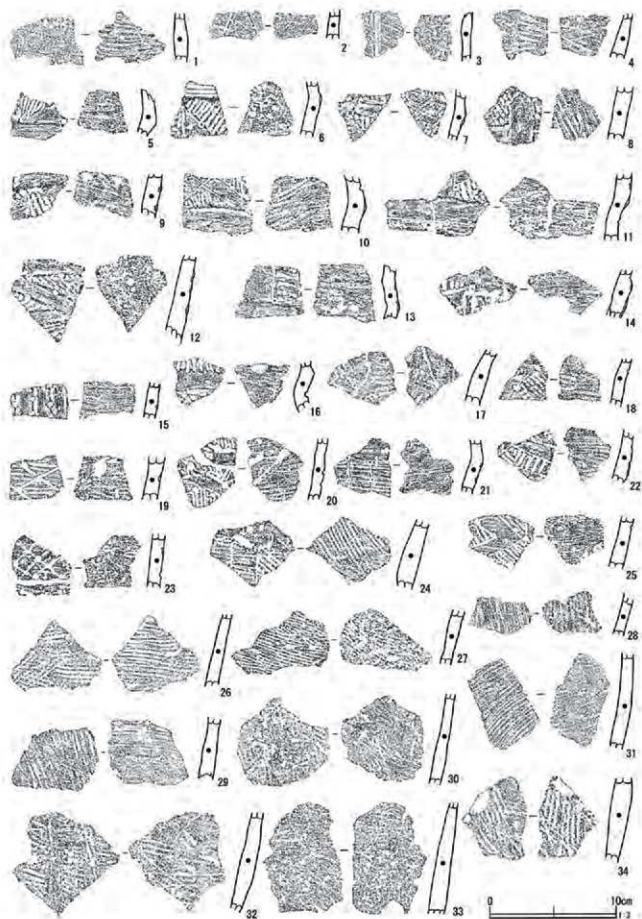
(7) 調査区出土遺物 (第42～53図)

土器 第42図1～第44図36は、いずれも縄文早期の条痕文系土器群で、おおむね鶴ヶ島台式に比定できよう。このうち第42図1～7は口縁部外縁に絡条体圧痕文を施す一群である。3では、1段の縄を巻いた単軸絡条体、その他は0段の縄を用いた単軸絡条体である。また、7では口唇部に斜めに押捺されている。また、5～7では口縁部に沿うように細隆起線が貼られ、5と6では絡条体圧痕文はこの上まで及んでいる。この一群は地文の条痕は顕著ではなく擦痕風の条痕が施されるものが多い。8～10は口唇部に掛かるように貝殻腹縁の刺突文が施された資料である。11～20・22は、口唇部に刺突列を認める一群である。刺突は丸棒状施文具の腹を押し当てるようにして付したものが多い。14では口唇部内面の一部にヘラ削りを付していることがわかる。21・23～30は条痕文の地文上に沈線による縦横または斜位の区画線を引き、区画内部に単沈線や平行沈線を充填する口縁部資料である。沈線区画の交点や要所に刺突文が配される。このうち23は緩波状線を呈するもので、口縁部を水平にめぐる沈線を起点として数本の縦位沈線を垂下させている。要所に円形竹管が配される。21・24・26・29・30などは、斜位の沈線によって形成される区画内に短沈線が充填されるものである。29では波状線と相まって三角形区画が形成される。27では縦位区画線を起点とする斜線が形成されることがわかる。また、28では弧状に湾曲する縦位区画線が形成されている。31～34は条痕文の施された口縁部資料である。34では条痕は撫で消されるようである。35～第43図1～4は、縦横斜めに細隆起線が貼付された胴部資料である。36や2のように擦痕風の地文となるものと、3・4のような太さのある明瞭な条痕文を地文とするものがある。

第43図5～25は細隆起線と沈線とで縦横や斜行する区画を設け、区画内に短沈線や刺突を充填し、要所



第 42 図 調査区出土遺物 (1)



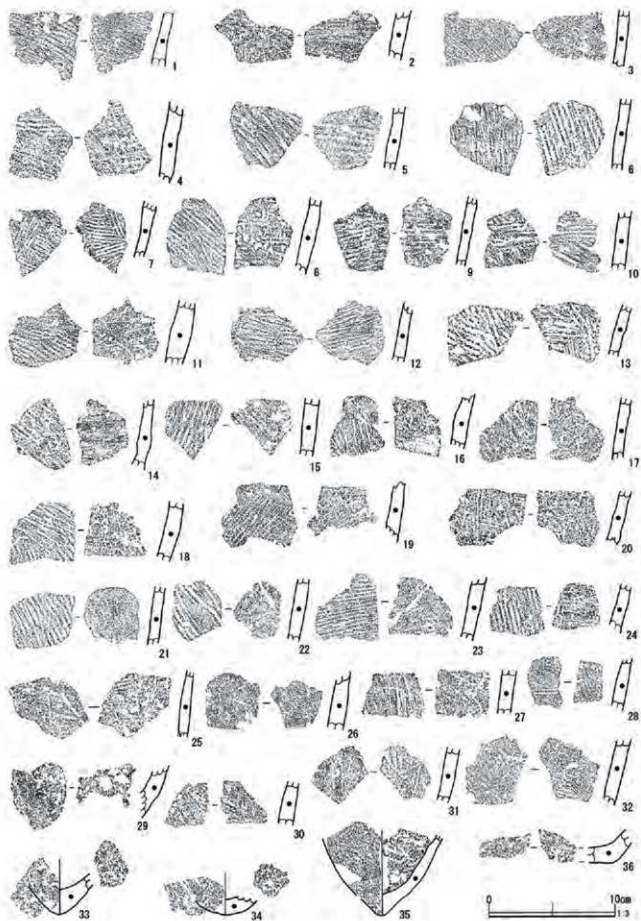
第 43 図 調査区出土遺物 (2)

に円形竹管の刺突を付すなどする一群の胴部資料である。5・7・10・11・13・14・16・21では器壁に段を持ち屈曲させたり、段部と細隆起線とを合わせて段を強調したりする資料である。また、11～15などは地文の条痕が細く擦痕風となる。18～25は、細隆起線を伴わず沈線だけで区画を行う資料である。26～34・第44図1～36は表裏に条痕文の施された胴部から底部にかけての一群である。30は径が小さくなる底部への移行部、33は器面の荒れも目立つが擦痕風の条痕が施されるものである。

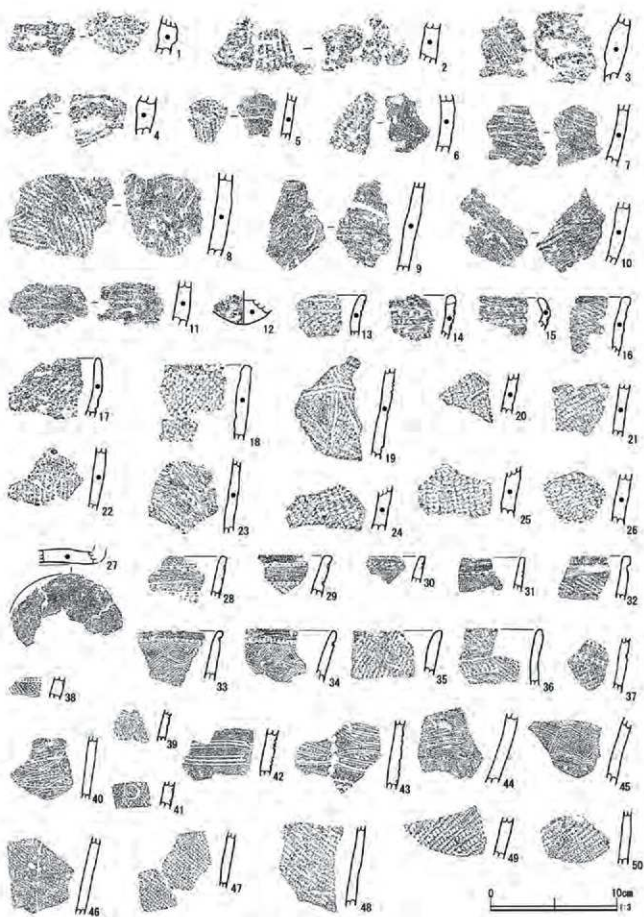
第44図1～28・30～32は表裏に条痕文を施した胴部資料である。このうち、1の内面や、3の表裏、17・20の表裏、21～24の内面などは擦痕風の条痕が施される。また、25～28・30～32などは条痕撫で消しの資料である。29・33～36は条痕文系土器群の底部を一括した。33・35は尖底となるもの、34は丸底、36は平底となるものである。

第45図1～12は前期初頭花積下層式土器である。胎土に極めて多量の繊維を含む脆弱な一群である。このうち1・2は表裏に条痕文の施された胴部資料、3は外面には貝殻の殻側部を用いた圧痕を施す胴部資料、4は貝殻背圧痕の施された胴部資料である。5は外面に附加条1種縄文のみられる胴部資料で、内面はよく撫でられている。6～11は条痕文のみが観察される胴部資料である。このうち7・9～11は条痕撫で消しとするものである。胎土に砂粒を含むが白色針状物質は含まれない。12は尖底となる底部資料である。13～27は前期中葉黒浜式土器である。13・14は黒浜3式から諸磯a式への移行期の所産で、口縁部にヘラ状工具による平行沈線が引かれ、後者ではC字状爪形文が付される。15は黒浜2式土器で内湾する口縁部に沿って2条の平行沈線とC字状爪形文が施される。16～18は縄文の施された口縁部資料で、16は無節の羽状縄文が、17・18は単節縄文が施される。19～21は単節縄文の地文上に半截竹管による平行沈線が引かれるもので、19では鋸歯状の沈線の上から横走沈線を引いている。20では×状の短沈線、21は破片右上に斜行する沈線がうかがわれるものである。22は単節縄文の施された胴部資料、23は無節縄文の施された胴部資料である。24～26は黒浜3式期の単節縄文施文の胴部資料である。27は黒浜式土器の底部資料で、やや上げ底となる底面円盤のみが残されるもので、推定底径は9～10cmを測る。28～50及び第46図1～14は諸磯a式土器である。28・29は、口縁部にC字状爪形文を伴う平行沈線を引き、この間を磨り消す平緑土器である。30・31は先端を斜めに切り落とした竹管を用いて刺突列を引く口縁部資料である。前者は平緑、後者は緩波状縁を呈する可能性がある。32は角頭状に整えた口縁部外面に竹管外皮を押し当てた幅の広い沈線を引く平緑土器である。33・34・45は同一個体で、口縁部に押し引き刺突列を持ち以下に幅の細い竹管2本を合わせ持って波状となる条線文を描くものである。35・36は単節縄文の施された口縁部資料である。37・38はC字状爪形文を伴う平行沈線を引く口縁部文様帯付近の資料である。39は幅2～3mmの半截竹管で平行沈線を引き同一工具による散漫な刺突を持つ土器である。沈線は単節縄文の地文上に右下がりに斜行する。40は口縁部文様帯に扁平な三角形をなす平行沈線を横位に連ねるもの、42・43は口縁部文様帯にレンズ状の平行沈線を描出するものである。41は、縄文地文上に円形竹管による刺突文が付されるものである。44は横位の条線文の観察されるものである。46～50は縄文の施される胴部資料である。このうち46は燃系文、49は附加条縄文が施される。

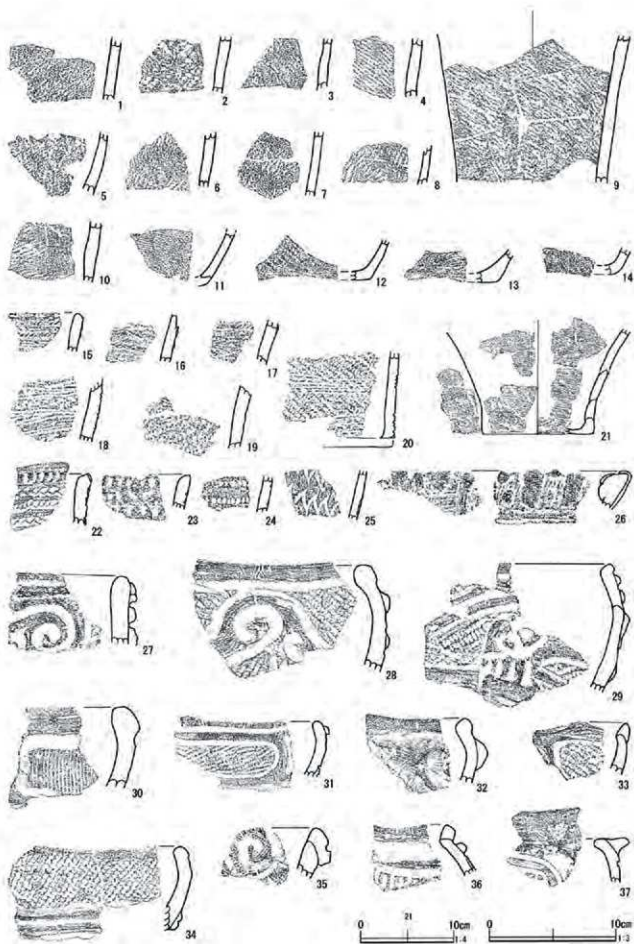
第46図1～14は縄文の施される胴部から底部の資料である。このうち1・6～8は同一個体で燃系文が施される。2～4は単節縄文の施されるもの、5・10は無節縄文が施される胴部資料である。9は前面に右下がりに斜行する燃系文の観察される胴部資料で、残存部最大径16cm、残高11cmを測る深鉢形土器である。内面は黒褐色で粗い縦位の撫でを受けているが器面の荒れが進んでいる。11～14は底部資料を一括した。底径



第44図 調査区出土遺物(3)



第 45 図 調査区出土遺物 (4)



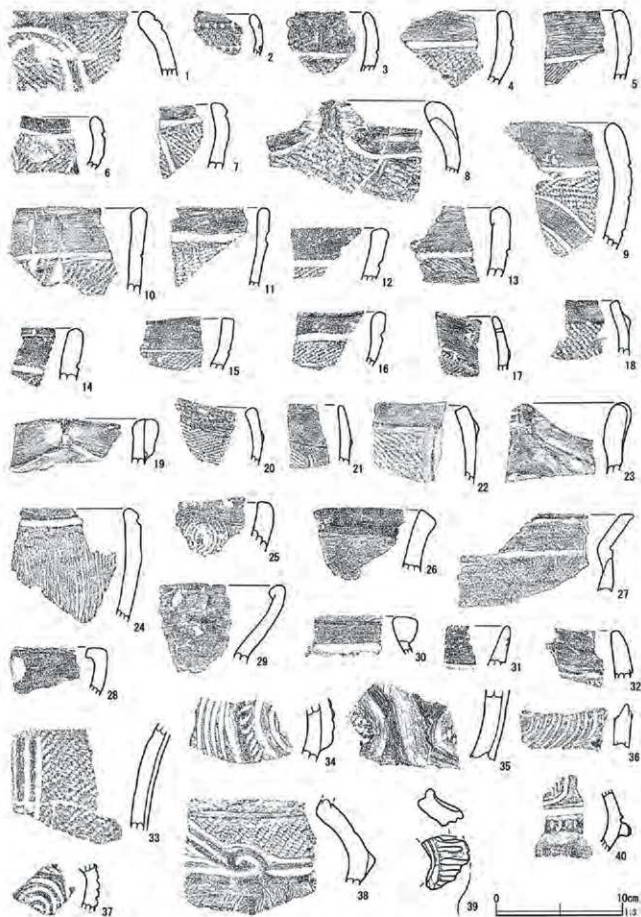
第 46 図 調査区出土遺物 (5)

を復元しうるものはない。15～20は諸磯b式土器である。15～17は横位の浮線文を持ちこの上を刺し切るように刻むものである。18～20は単節縄文の地文上に横位の平行沈線を引きくものである。このうち20は底部直上と、5cmほど上がった胴下半部に沈線帯を形成するもので、諸磯b3式に比定できよう。21と26は諸磯c式の資料である。21は胴下半から底部にかけての資料で、粗い撫で整形を加えた器面に横位から斜位の条線文が引かれるものである。輪痕が顕著に残される。推定底径は12cm、残存部最大径は20cmを測る。底部から大きく外反する器形はいわゆる金魚鉢と呼ばれるタイプとなるものと推定される。26は、大きく外反する口縁部資料である。厚みがあり、大型の土器となるものと推定される。口縁部は内側に折り込み複合口縁とし、外面には垂下する棒状浮文と円形浮文が配される。地文は条線文で、口縁部では横位に施されるが、棒状浮文の間隙では縦位の施文も観察される。22～25は、東関東系浮島式土器である。22は、口唇部外面には刻み目文、口縁部文様帯には変形爪形文の観察される口縁部資料である。23・24も幅の広い変形爪形文の施されるものである。25は放射肋のない貝殻による波状貝殻文の施された胴部資料である。27～37、第47図、48図は中期加曾利式土器である。27～37は加曾利式古相を示す口縁部資料を一括した。27・28は口縁部に隆帯と沈線による巻き切った渦巻文が配されるもの、29は横位展開するS字状の隆帯と文様帯下端区画を3本の丈の高い隆帯で連結するもの、35のような口唇部上に渦巻状の突起が配されるものである。30は口縁部文様帯内に縦位の条線文が充填されるもの、31～33やや新しくなって、隆帯による渦巻が巻き切らなくなったり、円形の区画になったりする段階である。三者とも口縁部に小突起を持つようである。34は、口縁部文様帯上端を面す隆帯や沈線を欠くものである。36、37は口縁部外面に大きく張り出す隆帯や鈎状の隆帯を持つ資料で、口縁部文様帯には集合沈線が施されると思われるものである。これらの一群の口縁部以下、頸部付近に至る一群が第47図33～40、第48図1～7などである。

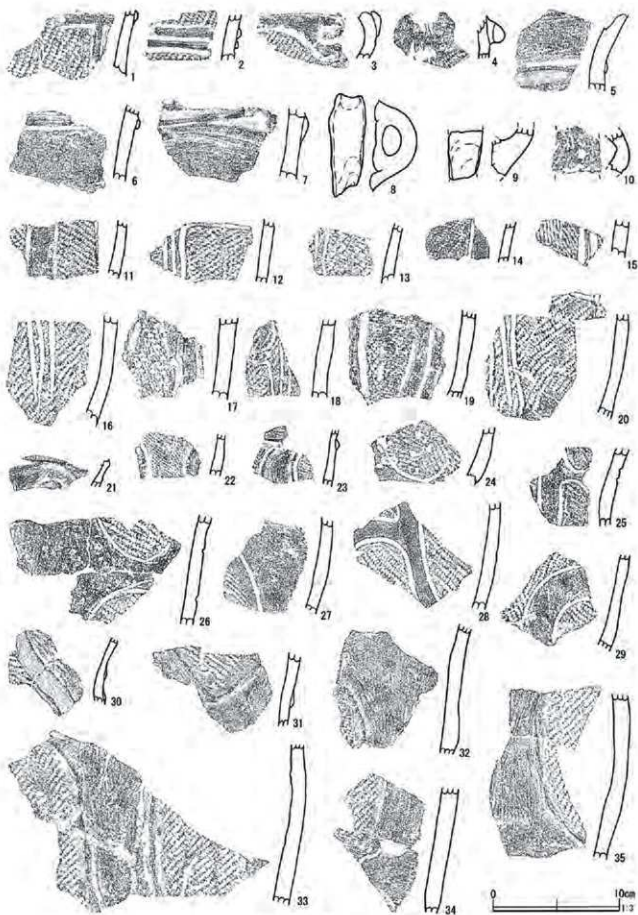
第47図33は太く丈の高い隆帯が数本一単位となって垂下する胴部資料である。34は弧状に展開し刻みを持つ丈の高い隆帯とこれに沿う沈線が看取されるものである。35は隆帯と沈線による楕円区画を連ねる口縁部文様帯の一部とみられる資料、36・37は沈線によって弧線や渦巻の描出される資料である。38は胴部が算盤玉状に張る浅鉢型土器、39は口縁部に付された裝飾突起の一部である。40は前図36・37と呼応する資料であろう。

第48図1はT字状の隆帯が観察されるもの、2は2本1組の隆帯が横走するもの、3は隆帯に陥入する横向きの渦巻文が看取されるもの、4は横位の小型の橋状把手が付されるものである。5～7は隆帯によって頸部無文帯が区画される資料である。

第47図1～23は、加曾利式後半期の一群である。すでに窓枠状の口縁部文様帯は失われ、口縁部に幅の狭い無文帯を置いたり、振幅の大きな波状文や〇状の磨消文帯が形成されたりするものである。このうち1は、内湾する口縁部に2条の沈線で画した〇状のモチーフあるいは大振幅の波状文が描かれるものである。3～16は幅の狭い口縁部無文帯下端を単沈線で面すものである。6や7では鋸歯状の磨消文帯が形成されることがわかる。9では2条の沈線で面された磨消文帯による振幅の大きな波状文が描かれる。8では、口縁部に突起が付され、口縁部無文帯区画線が突起に沿って口唇部に巻き込まれるものである。後期段階に下る可能性がある。17～23は、口縁部無文帯下端を微隆帯によって区画するものである。17・19・20・23は緩波状線をなす。22は平線と思われるが、小突起が付された可能性もある。24は口縁部に1条の沈線を引き以下に条線文を施す資料、25は櫛状施文具で描かれた円文がうかがわれる資料である。32は無文の口縁



第 47 図 調査区出土遺物 (6)



第 48 図 調査区出土遺物 (7)

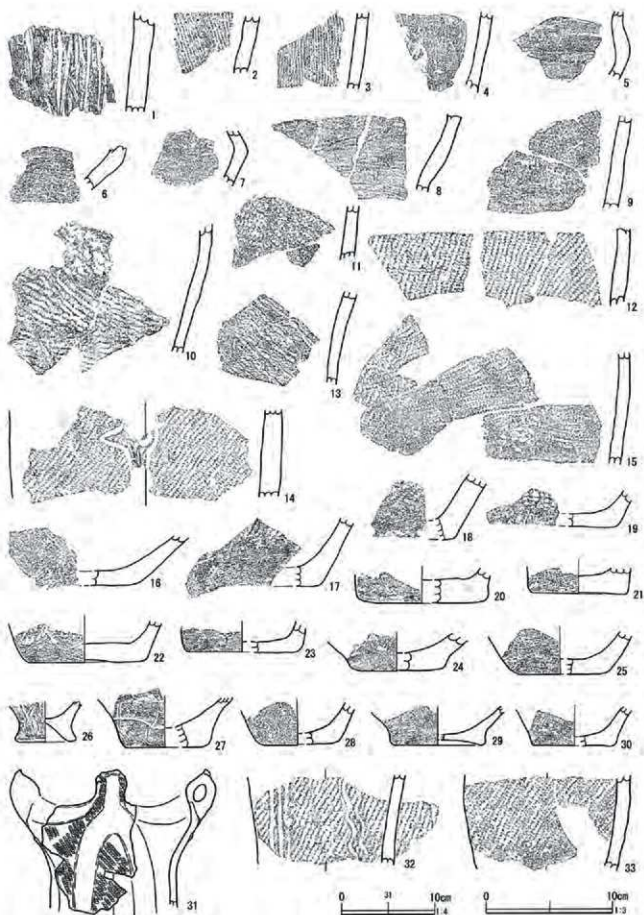
部資料である。当該期に伴う浅鉢の口縁部と思われる。27は、くの字に外反するもの、28・29は口唇部が内折するもの、30は算盤玉状に張り出す胴部を持つものであろう。31・32は複合口縁となる資料である。

第48図8～10は橋状把手であるが、8・9については加曾利E式古相に付属するもの、10は加曾利E式後半期の所産とみられる。

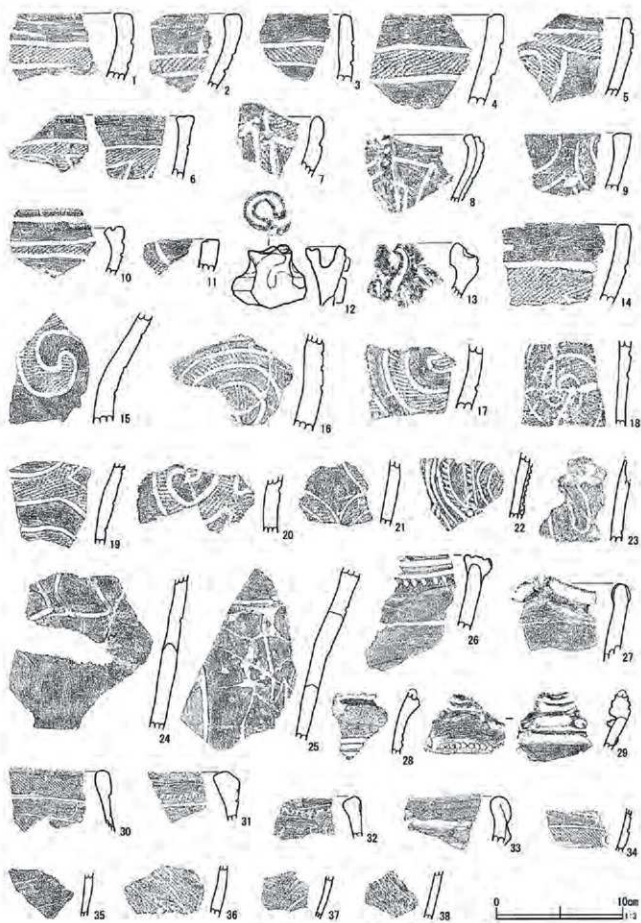
第48図11～35・第49図15は加曾利E式土器の胴部資料である。11・14・15・17・19は垂下する磨消文帯と縄文帯とがみられるもの、12・13・16・18・20は縄文地文上に垂下する沈線が引かれたものである。このうち18は横に張り出す沈線が観察されるやや古相を示すものと思われる。21は瓢型の注口土器の胴部資料、22・23は微隆帯で曲線をなす磨消文帯を縁取るものである。24～29は弧状となったり口状、H状となったりする磨消文帯を沈線で区画するものである。30～35は玉抱きやY字状となる磨消文帯を微隆帯で区画する一群である。

第49図1は縦位に隆帯が垂下しこれに沿うように集合沈線が垂下するものである。中部曾利式の系譜上に位置づけられるものであろう。2～4は縦位の条線文の施されるもの、5～9は無文で丁寧な横位の撫で整形が施されたものである。10～15は縄文の施された資料である。10は無節縄文、13は燃糸文である。14は単節縄文の地文上に円文や横位に張り出す沈線文が観察される資料である。推定胴径22cmを測る。16～30は底部を一括した。このうち16～19・22では底部付近まで縄文が施されることがわかる。また、22・29は上げ底風となり、26は脚に近い。31は口縁部無文帯下端を浅い沈線で閉じる波状縁深鉢形土器である。波頂部に橋状となる突起を持ちここから磨消文が垂下し、口縁部で二股に分かれ内部に口状の縄文帯が形成される。地文は単節LR縄文を縦位施文する。いわゆる岩坪類型に近似する。後期段階まで下る可能性がある。推定口径18cm、波頂部最大径22cm、残高15cmを測る。32は単節縄文の地文上に3条の沈線を垂下させ、この間隙に2条1組の蛇行沈線を垂下させる。残存部最大径13cm、残高7cmを測る。33は、単節縄文の施された胴部資料である。残存部最大径13cm、残高7cmを測る。

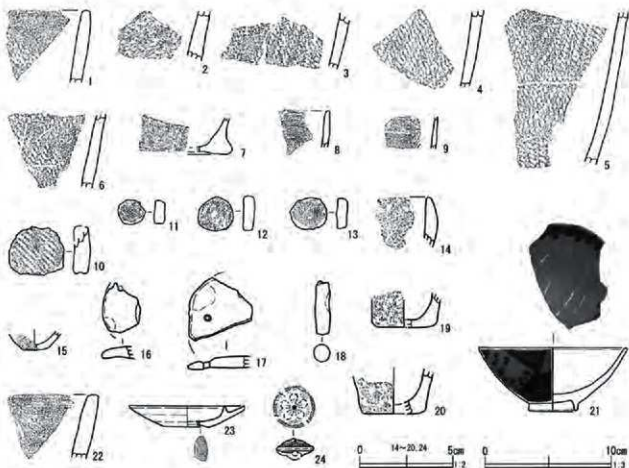
第50図1～14は、口縁部に磨消しの無文帯を置き垂下隆帯を施したり波頂部に突起を付したりする一群で、後期称名寺式段階の所産である。1・2・4・9・11などのように口唇部を角頭状に整えたり、6や9のように口唇部内面にわずかな返しを付けたりするものが目立つ。9では縄文帯とともに中に円形竹管による刺突文帯が観察される。5・7・8のような波状縁の一群も一定程度存在する。このうち7では縄文の施された隆帯が、8では刺突の施された隆帯が垂下する。12は頂部にC字状沈線の施される臼状突起を付すもの、13は8の字状の捻転突起を付すものである。15～25は称名寺式土器の胴部資料を一括した。このうち15～20ではいわゆるJ字文に連なる渦巻状の縄文帯がみられるものである。21では弧線を合わせた菱形の縄文帯が、22では垂下する鎖状隆帯と弧線を描く鎖状隆帯が観察される。2～25はよく撫でられた器面に沈線によるモチーフが描出されるもので縄文は施されない。28は外削ぎとなる口唇部に1条の沈線を引き、頸部を磨消しの無文とするもので堀之内式期に該当しよう。26は緩波状となる口縁部に隆帯を張った幅の狭い文様帯を持ち、長楕円区画とその下端を刺突文列で画すものである。以下は磨消しの無文としている。27は、緩波状となる口縁部に粘土紐を貼り太い凹線を引くものである。26とともに後期中葉高井東式に比定できよう。29は大きく外傾する口縁部資料で、隆帯を重畳させた三角形の突起を持つ。隆帯間を撫でることで沈線化し隆帯を顕在化させている。三角形の裾部内外面には円形刺突を持つ。外面には細い鎖状隆帯がめぐる。加曾利B式土器の浅鉢型土器である。30～38は後期後葉から晩期の安行式期に位置づけられ



第 49 図 調査区出土遺物 (8)



第50図 調査区出土遺物(9)



第51図 調査区出土遺物 (10)

る一群である。30は内傾する砲弾型の器形をとる帯縄文の平縁土器、31～33は砲弾型器形をとる粗製土器である。33は折り返し口縁で粗い撫で整形となる無文土器で晩期に下る可能性が高い。34～38は当該期の胴部資料で、34は帯縄文の観察できるもの、35は無文、36～38は条線文の資料である。

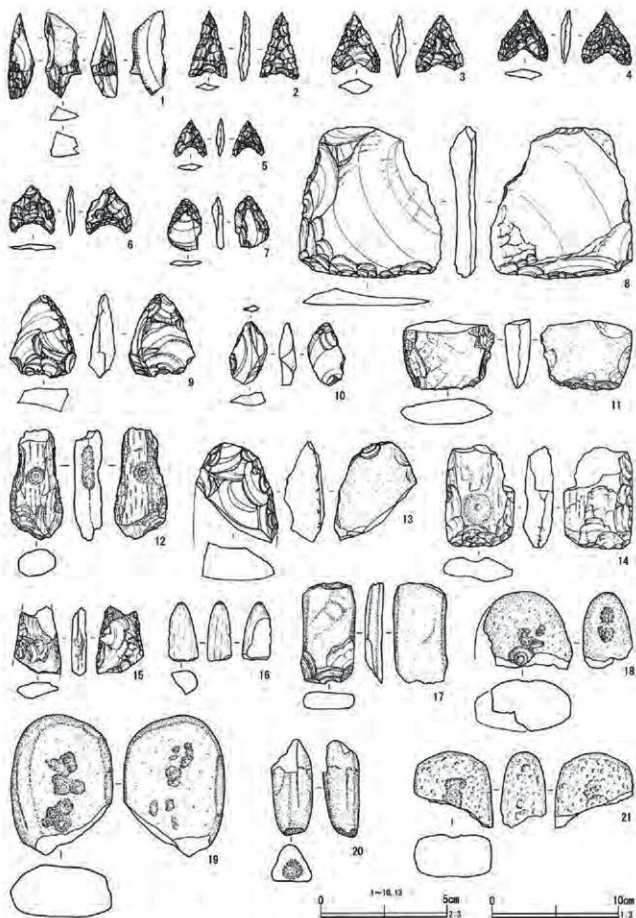
第51図1～6は縄文の施された一群である。1・3～6は同一個体で、単節LR縄文を斜位施文する深鉢形土器である。内面には粗い撫で整形が施される。2は単節RL縄文が施されるもので、内面はよく磨かれている。いずれも後期中葉の粗製土器と思われる。7は底面円盤が大きく外側へ張り出す土器で、比較的小ぶりのものと思われる。わずかに上げ底となる。8・9は渦での無文土器である。前者は口縁部資料で口唇部はわずかに内削ぎとなる。外面は横位を主とするヘラ削り後軽く撫でられているものとみられる。後者は、さらに薄い胴部資料である。外面は斜位から縦位の撫で整形、内面は粗い撫でが施される。

土製品 第51図10～13は土製円盤である。このうち10は、単節LR縄文を施す胴部資料を素材としており、周囲を粗く打ち欠いて成形したものである。11は小型で直径1.5cmほど、無文の資料である。12は胎土に砂粒の目立つ胴部資料を素材とし、周囲を打ち欠いたのち簡単な研磨を施すようである。13は細い条線文の施された胴部資料を素材とする。長径2.7cm、短径2.4cmを測る。14～17・19・20はミニチュア土器である。14は口縁部資料である。胎土には細粒砂が含まれややざらつく感触がある。15・19・20は底部である。15は推定底径1.5cmほどで、底部外面は縦位のヘラ削り後撫でが加えられる。焼成良好である。19は推定底径3.5cmほどを測る資料で、筒形を呈するものとみられる。手づくねで、外面は指頭による押さえ、底面はヘラ削りが加えられる。内面は底面から掻き上げるように丁寧に撫でられる。焼成良好である。20は推定底径3.5cmほどを測る資料で、やや開き気味に立ち上がる。手づくねで、外面は指頭による押さえの

のち一部ヘラ削りが増えられる。底面は撫である。内面は底面から掻き上げるように丁寧にヘラ撫でされる。焼成良好である。16・17は蓋である。前者は、焼成前穿孔の小孔が観察され、推定口径は5～6cm程度とみられる。胎土は洗練され微粒砂をわずかに含む。外面は丁寧に撫で、内面は横位のヘラ撫でである。焼成良好。後者は、内面からの焼成後穿孔による小孔が残される。不正円形で推定口径は7～8cm程度であろうか。外面には指頭による押さえと軽い撫でが観察される。内面には指頭による撫でと一部にヘラ撫での痕跡が残される。18は円筒形の土製品である。両端に欠いており、旧状をうかがい知ることはできない。最大径8mm、最小径6mmほどでよく撫でられている。縄文時代の土製品の一部であろう。

陶磁器 第51図21は、六歌仙のプリント柄の飯碗である。22は常滑産播鉢の口縁部資料である。内面には自然釉がかかり、外面は茶褐色、両面に水挽痕を残す。23は磁器製の燈明皿で推定口径9cm、器高2cmほどと思われる。外面には水挽痕を残し、内面にはやや緑色がかった透明な釉が施される。24は磁器製の学生ボタンである。直径1.9cmを測り、外区にわずかな無文部を置き、内区地文は放射状の条線、この上に5弁の桜があしらわれる。花弁1枚につき3本の蕊が施される。深緑色の釉が施される。裏面中央に沈線を刻みこれを跨ぐように抽が付されるが、欠損する。戦時に作られた学生ボタンである。山遺跡では別地点でも複数個出土しており、関連があるものとみられる。

石器 第52図1は黒曜石製の2次加工剥片である。横長剥片を素材とし裏面に素材剥片の主剥離を残す。正面中央には、風化した古い剥離面を見る。左側縁は裏面からの不規則な剥離が増えられる。右側縁の剥離は大きな剥離が1面施され、気泡または不純物を起点とした不規則な割れが生じている。あたかも切り出し形ナイフ形石器のように見えるがそうではない。2～6は石鏃である。6は黒曜石、他はチャート製である。2は細身で、基部の挟りのごく浅いものである。両面両側縁の調整加工は規則的で丁寧である。3は先端部と左脚端をわずかに欠く。厚みのある不整形剥片を素材としたもので、裏面中央に素材剥片の主剥離が残される。側縁部加工は裏面左側縁の加工は比較的丁寧であるが他は粗く不規則である。4は均整の取れた凹基無茎石鏃である。素材については不明である。側縁及び基部の加工は裏面側では比較的規則的で丁寧であるが、正面側では不規則である。5は小型の凹基無茎石鏃である。基部の挟り込みも深く均整の取れたものである。素材については不明である。両面ともに細部の加工は不規則である。6は黒曜石製の石鏃である。裏面左側縁側に残る大きな剥離が素材剥片の主剥離と思われる。両側縁は中ほどから角度を持って屈曲し先端部へ至る。晩期のいわゆる飛行機鏃とも異なるやや不自然な屈折であり、あるいは先端部欠損後に再生を試みたものである可能性もある。基部の挟り込みの丁寧な押圧剥離に比べ側縁の加工の粗く不規則であることもその傍証となるかもしれない。7・9は2次加工剥片である。前者は先端部をとがらせようとする調整加工が施されている。9はチャートの縦長剥片で、かなりの厚みを残すが正面右側縁には細かな押圧剥離がみられる。8はホルンフェルス製のスクレーパーである。横長の大きめの貝殻状剥片を素材とし、表裏中央に素材剥片の主剥離を残す。また裏面右上に礫表皮を残す。素材剥片の縁辺をL字型に成形したのち不規則な押圧剥離を加えている。10は石鏃である。チャートの不整形剥片を素材とし先端に細かな押圧剥離を加え錐部を作り出している。11～15・17は打製石斧である。このうち11はホルンフェルス製の打製石斧残欠である。横長の扁平礫を素材とし、正面に素材剥片の主剥離を、裏面に礫表皮を大きく残す。刃部は直刃で、正面からの不規則な加撃によって形成されている。器体中央から基部は欠損する。12は緑泥片岩製の石皿転用の打製石斧である。表裏中央部には凹部がみられる。13はホルンフェルス製打製石斧の基部残欠である。厚みのある大型剥片を素材としたものと思われ、裏面には礫表皮を残



第 52 図 調査区出土遺物 (11)

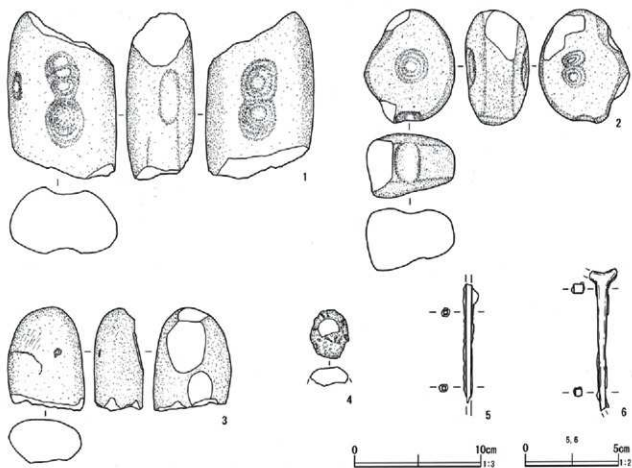
す。正面左側縁には切断を加え、右側縁は裏面からの不規則剥離で整形している。14は石皿転用の打製石斧である。刃部は直刃である。正面刃部側に凹部が観察され基部を欠く。15はホルンフェルス製の打製石斧で、撥型を呈したものである。基部、刃部ともに欠損する。横長の大型剥片を素材としており、裏面中央に素材剥片の主剥離を、正面には礫表皮を大きく残す。両側縁は丁寧だが不規則な剥離で整形される。また着柄によると思われる摩耗が顕著である。被熱している。17はホルンフェルス製の短冊形の打製石斧である。扁平矩形の礫を素材とし、裏面からの粗く不規則な加撃によって刃部を整形している。基部の加工は欠損を整えたものであろうか。16は磨製石斧の基部残欠である。縦位方向の研磨痕が顕著である。18・19・21は磨石である。いずれも安山岩の扁平礫を素材とし、18と20では凹石兼用、19では敲石兼用である。3者とも面取りを行い石鉢状に成形される。20は砂岩製の敲石である。断面三角形の細長い自然礫で小口面を使用している。

第53図1～3は磨石である。1・2は安山岩を用い3は硬砂岩を用いる。また、1・2では凹石兼用となる。3者とも面取り整形は行われず、素材礫の形状に合わせて使用されたものとみられる。3は被熱による赤変、剥落がみられる。4は軽石製品の残欠である。

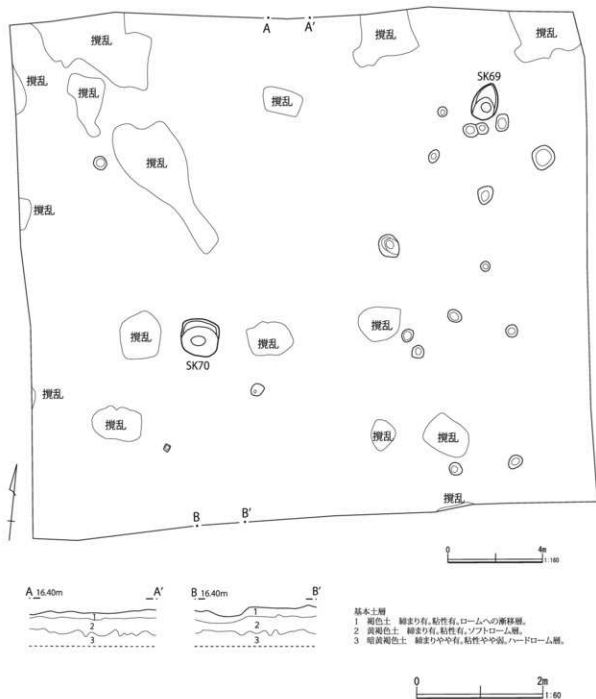
金属器 第53図5・6は鉄製品である。5は棒状鉄製品で両端を欠損する。残存長6.4cm、最大幅0.3cm、最大厚0.2cm、重量3.3gを測る。6も棒状鉄製品であるが、頂部が双頭を呈し、何らかの留め具と思われる。端部を欠損する。残存長7.5cm、最大幅1.4cm、最大厚0.5cm、重量7.2gを測る。

第9表 第6地点調査区出土石器計測表

図版	番号	遺 構	器 種	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
52	1	A2	2次加工剥片	黒曜石	3.4	1.5	1.1	3.8	ナイフではない
52	2	E3	石鏃	チャート	2.7	1.6	0.4	1.0	
52	3	A4	石鏃	チャート	2.5	1.9	0.6	1.6	
52	4	A2	石鏃	チャート	2.1	1.9	0.4	1.2	
52	5	A3	石鏃	チャート	1.5	1.5	0.3	0.3	
52	6	B2	石鏃	黒曜石	2.0	1.9	0.3	0.8	
52	7	C8	2次加工剥片	チャート	2.0	1.3	0.4	1.0	
52	8	C6	スクレーパー	ホルンフェルス	6.0	5.7	1.1	31.8	
52	9	C2	2次加工剥片	チャート	3.3	2.7	0.9	6.7	石鏃ブランク?
52	10	B3	石鏃	チャート	2.5	1.4	0.7	1.9	
52	11	調査区	打製石斧残欠	ホルンフェルス	(5.6)	7.2	2.1	(97.8)	
52	12	C8	石皿転用打製石斧	緑泥片岩	8.8	2.9	2.0	98.0	
52	13	D2 攪乱	打製石斧残欠	ホルンフェルス	(4.0)	(3.0)	1.6	(16.5)	刃部欠損
52	14	B3	石皿転用打製石斧	緑泥片岩	(8.0)	6.4	2.2	(123.7)	被熱
52	15	A2 攪乱5	撥型打製石斧	ホルンフェルス	(5.3)	3.8	1.2	(28.2)	被熱
52	16	調査区	磨製石斧残欠	緑色岩	(4.7)	(2.3)	1.8	(26.5)	被熱か?
52	17	D2 P2	打製石斧	ホルンフェルス	8.0	4.0	1.3	75.4	
52	18	攪乱2	磨石兼凹石	安山岩	(5.9)	(6.7)	4.0	(158.0)	被熱
52	19	攪乱	磨石兼敲石	安山岩	(11.2)	8.0	4.0	(544.0)	
52	20	A2	磨石兼凹石	砂岩	7.5	3.1	2.8	78.6	
52	21	調査区	磨石兼用凹石	安山岩	(4.2)	6.1	3.4	(99.5)	
53	1	C6	磨石兼用凹石	安山岩	10.8	8.5	5.3	850.0	被熱
53	2	調査区	磨石兼用凹石	安山岩	8.8	(7.1)	4.9	(383.0)	
53	3	調査区	磨石	硬砂岩	(7.8)	6.0	3.5	(257.0)	被熱剥落
53	4	A2 攪乱3	軽石製品残欠	安山岩	(3.9)	(3.1)	(1.4)	(6.5)	



第 53 図 調査区出土遺物 (12)



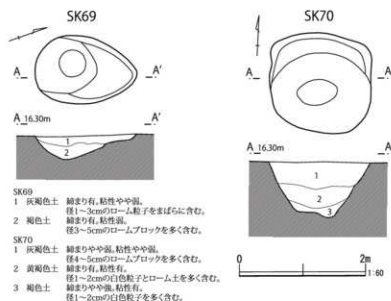
第54図 第15地点全測図

3 第15地点の遺構と遺物

(1) 土坑

●第69号土坑 (第55図)

調査区北東隅に位置する。平面形は長径約1.6m、短径約1.1mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.4mを測り、底面は南側へ向かって傾斜しており、最深部は中央南側に存在する。覆土は2層に区分することができた。



第55図 第69・70号土坑

出土遺物 (第56図)

土器 第56図1は同安窯系の青磁碗の口縁部破片である。中央に縦位の鎬筋を持つ連弁が前後に重複するように連なる。

石器 第56図2はチャート製の平基無茎石鏃である。両側縁の調整は不規則なものである。

第10表 第69号土坑出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
56	2	第69号土坑	石鏃	チャート	2.0	1.6	0.4	1.1	

●第70号土坑 (第55図)

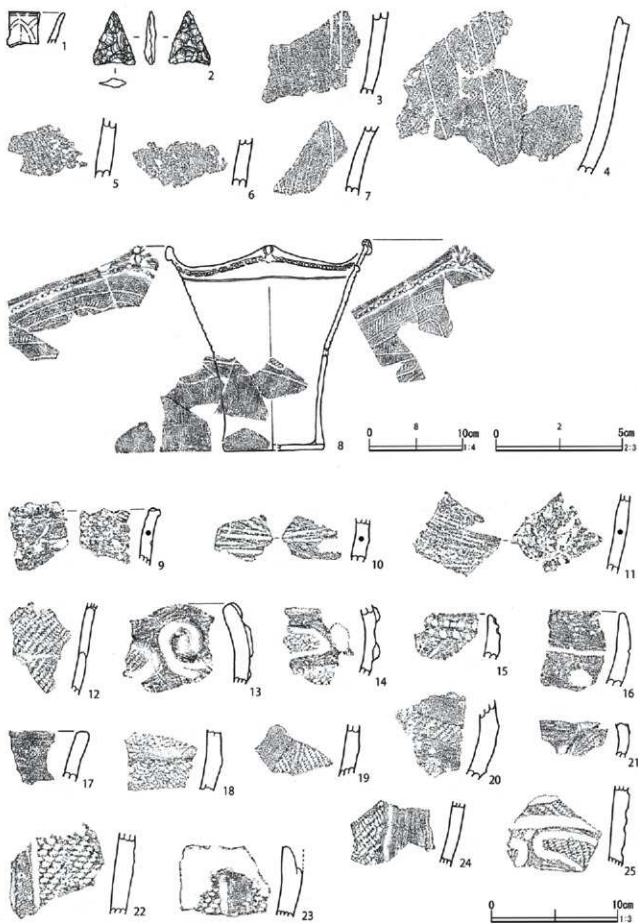
調査区南西寄りに位置する。平面形は長径約1.7m、短径約1.6mの不整形円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.9mを測り挿鉢状に深くなる。底面は長径0.6m、半径0.4mほどの楕円形で東寄り浅浅く窪む。

出土遺物 (第56図)

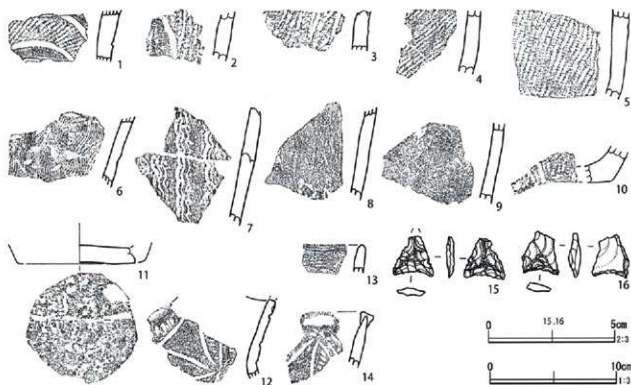
土器 第56図3~8は本址出土遺物である。3~7は同一個体と思われるもので、単節LR縄文を横位回転し、その上から縦位の垂下沈線を数本単位で垂下させるとみられる胴部資料である。8は、推定口径22cm、推定高22cm、底径10.5cmほどとみられる小型の波状縁深鉢形土器である。波頂部2つと胴下半から底部が残される。波頂部には8の字状に刺突を施した瘤状の突起を持ち、この貼り瘤と口縁部に沿って巡らされた細い鎖状隆帯が連結される。鎖状隆帯の下には水平にめぐり1帯の縄文帯がめぐり、胴部文様帯の上端区画となっている。この文様帯の構造は不明であるが、残存部から縦位区画、斜方向の区画線などが確認でき、縄文帯と磨消文帯とで三角形等の幾何学文様が形成されたものと思われる。なお、この文様帯の下端は縄文帯ではなく1条の沈線によって画されるようである。器壁の薄い土器で焼成良好である。

(2) 調査区出土遺物

土器 第56図9~11は胎土に繊維を含む表裏条痕文の資料である。このうち9は口縁部資料で、口唇部には



第 56 図 土坑・調査区出土遺物



第 57 図 調査区出土遺物 (13)

丸棒状施文具を押し付けたような連続刺突が施され、その結果口唇部は外側へ波打ちながら張り出す。また、外面にはへら状施文具による横位の刺突列が観察される。縄文時代早期末葉の資料であろう。12は単節LR縄文を横位回転させた胴部資料である。輪積痕が顕著である。諸磯a式期の資料であろう。13～25は、中期後葉加曾利E式土器である。このうち13はしっかり巻き切った渦巻文の観察される口縁部資料、14も口唇部を欠くが、同種のものである。15は口縁部に2列の刺突列を配する内湾傾向の強い土器である。16は口縁部に1条の沈線が配される口縁部資料、17は外反する磨消し無文の口縁部資料である。18は口縁部文様帯下端の区画線を思われるもので凹線の下位を肥厚させている。19～21は磨消文帯の端を微隆帯風に盛り上げるものである。22～24は縄文帯と磨消文帯とが交互に垂下する胴部資料、25は胴部に形成される渦巻文を縁取るように縄文帯を配すものである。

第57図1～3は弧線に縁取られた縄文帯が観察される胴部資料、4・5は単節縄文の施された胴部資料、6・7は蛇行する条線の施された胴部資料、8・9は無文の胴部資料である。10・11は底部資料で、前者は2条の垂下沈線が観察されるもの、後者は、輪積で接合の外れた底面円盤である。13は外反傾向を持つ無文の口縁部、12・14は同一個体で波頂部に鉢巻状の隆帯を巻く姥山2式系譜の深鉢形土器である。波頂部から垂下する刺突の付されたレンズ状文とは底部に連なる背合わせ弧線区画を見て取ることができる。

石器 第57図15は基部の挟りの浅い凹基無茎石鏃である。先端部を欠く。裏面からの調整加工は丁寧なものであるが、正面側からの剝離は乱雑で規則性を欠く。16は2次加工剥片である。貝殻状の不整形剥片を素材とする。石鏃ブランクと思われ、挟りの浅い基部加工を行っているように見える。

第11表 第15地点調査区出土石器計測表

図版	番号	遺 構	器 種	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
57	15	B3	石鏃	チャート	(1.4)	1.6	0.3	(0.6)	
57	16	表探	2次加工剥片	チャート	1.5	1.4	0.5	1.0	石鏃ブランク

4 第16地点の遺構と遺物

(1) 住居跡

●第7号住居跡（第58図）

調査区北端で土器埋設を伴う焼土を確認したが、周辺は削平を受け大きく損傷しており、住居の覆土はおろか掘り込みも確認することはできなかったが、土器埋設を伴う焼土の在り方から住居跡の炉跡と認定し、炉跡を中心に住居跡が展開したものと推定線を引いた。住居は南側半分ほどが調査区内に展開したものと推定され、さらに北側は調査区外に延びるものとみられる。

炉の平面形は長径約0.9m、短径約0.5mの不整楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、覆土は3層に区分できた。底面は平坦部を持たず中央が浅く窪む。炉跡の東寄りで直径約0.1mの焼土の広がりが見られた。

出土遺物（第59図）

土器 第59図1は本址炉跡出土の炉体土器である。単節RL縄文を縦位回転させた縄文帯と磨消文帯とが交互に垂下する胴部資料である。口縁部に窓枠状の楕円区画を持つキャリパー形深鉢の口縁部と胴下半を打ち欠き炉枠として用いたものであろう。推定径は括れ部で30cm、残存部最大径は37cmを測る。残高16cmを測る。2も炉内出土の口縁部資料で、内湾する口縁部上の小突起から派生する隆帯が左下がり斜行するものである。

(2) 土坑

●第71号土坑（第58図）

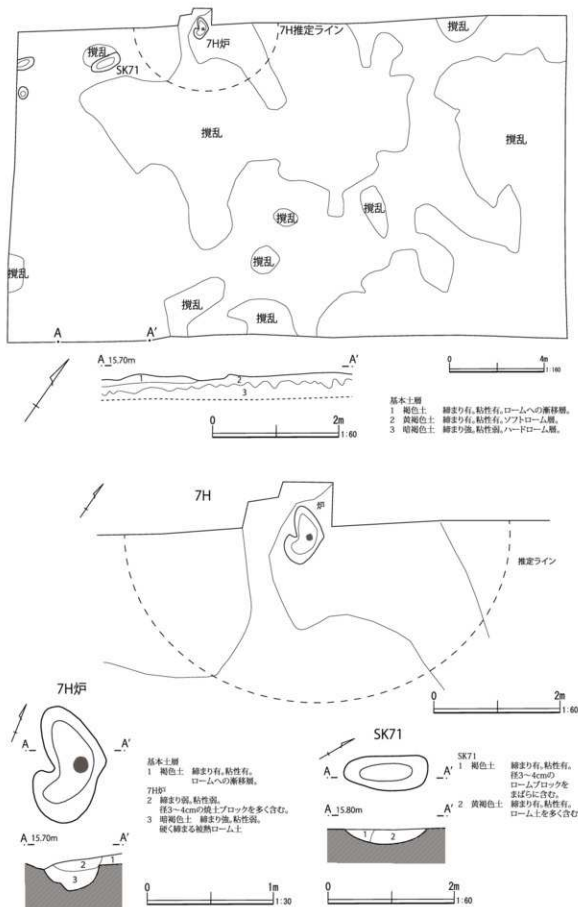
調査区北西隅、第7号住居跡の推定範囲の西側に位置する。平面形は長径約1.3m、短径約0.6mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、覆土は2層に区分できた。底面は中央が窪む船底形となる。

出土遺物（第59図）

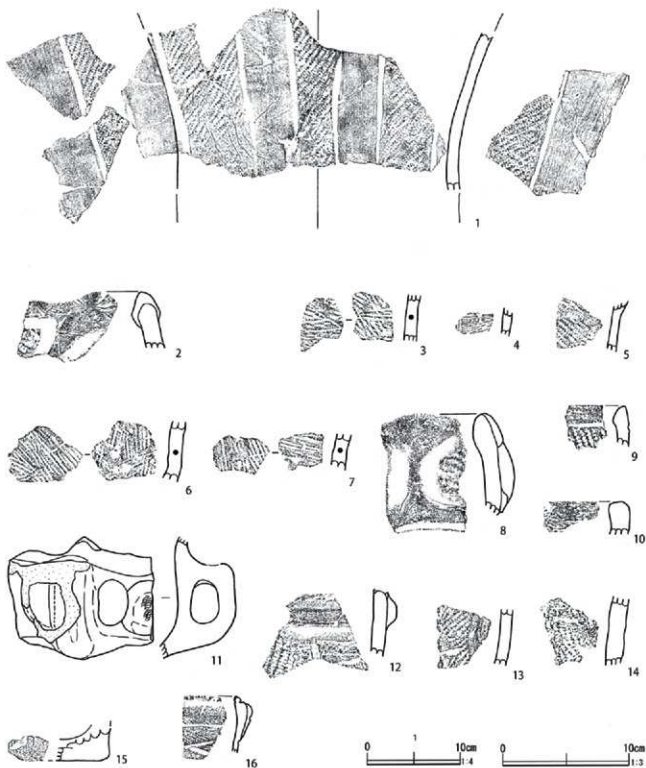
土器 第59図3～5が本址出土遺物である。3は表裏に横位から斜位の条痕が顕著な胴部資料である。胎土に少量の繊維を含む早期末葉の条痕文系土器群である。4は櫛状施文具による条線文を横位から斜位に施す薄手の胴部資料である。焼成は極めて良好である。5は単節RL縄文を横位に施文する胴部破片である。口縁部が開き気味に立ち上がる深鉢形土器で諸磯a式期の所産であろう。

(3) 調査区出土遺物（第59図）

第59図6・7は表裏に斜位から縦位の条痕文を観察することのできる胴部資料である。胎土に少量の繊維を含む早期条痕文系土器である。このうち6は胴下半部の資料と思われ、破片下部が徐々にすぼまる様子がうかがわれる。8～14は中期加曾利E式土器である。8は口縁部に隆帯と沈線で円形や楕円形の窓枠状区画を持つ口縁部資料である。9はキャリパー形深鉢の口縁部資料で内湾する口縁部に幅の狭い無文帯を持ちその下端を単沈線で画す。以下は縄文が施される。10は無文の口縁部資料である。11は両耳壺の橋状把手である。把手は頸部に楕円区画を連ねて構成された文様帯を跨ぐように置かれる。12は断面台形の幅広い隆帯を起点として縄文帯と磨消文帯とが垂下する胴部資料である。13も縄文帯と磨消文帯とが垂下する

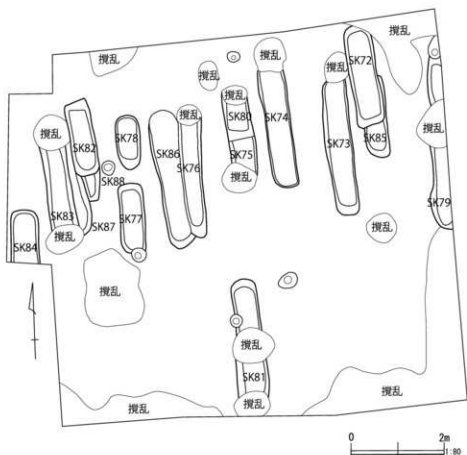


第 58 図 第 16 地点全測図及び遺構図



第59図 第16地点出土遺物

胸部資料、14は単節縄文が施された胸部資料である。15は無文の底部資料である。16は口縁外縁に粘土紐を貼って肥厚させる平縁土器である。口唇部に1条の沈線を巡らせ、体部には単沈線による横位展開の鋸歯文が描かれるようである。地文は節の細かい単節縄文である。後期堀之内Ⅱ式の範疇で捉えられよう。



第 60 図 第 19 地点全測図

5 第19地点の遺構と遺物

(1) 土坑

●第 72 号土坑 (第61図)

調査区北東寄りに位置し、第85号土坑を切る。平面形は長径約2.2m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、覆土は2層に区分できた。底面は平坦である。

出土遺物 (第62図)

土器 第62図1～5が本址出土遺物である。1は外面が内湾傾向を示す無文の口縁部資料である。2は刻みを持つ丈の高い横走隆帯の観察される胴部資料、3は棕櫚状文風の變形爪形文を施す浮島式、4は無節縄文の施される胴部資料である。5は輪積の残される追加整形接合部の資料で単節縄文を施した胴下半部の上に輪積を重ね後から重ねた胴上半部には櫛状施文具による条線文を施すものである。

●第 73 号土坑 (第61図)

調査区北東寄りに位置する。平面形は長径約2.9m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、覆土は2層に区分できた。底面は平坦である。

出土遺物 (第62図)

土器 第62図6～8が本址出土資料である。6は無文の口縁部資料、7は斜行する条線の観察される胴部資料、

8は平底となる底面円盤資料である。

●第74号土坑（第61図）

調査区北東寄りに位置する。平面形は長径約2.5m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、覆土は3層に区分できた。底面は平坦である。

出土遺物（第62図）

土器 第62図9・10が本址出土資料である。9は無節縄文、10は単節縄文の施された胴部資料である。

●第75号土坑（第61図）

調査区北寄りに位置し、第80号土坑に切られる。残存部で長径約0.7m、短径約0.6mを測る。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、覆土は2層に区分できた。底面は東寄りが浅く窪む。

●第76号土坑（第61図）

調査区北寄りに位置し、第86号土坑を切る。平面形は長径約2.4m、短径約0.5mの長方形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、覆土は2層に区分できた。底面は平坦である。

出土遺物（第62図）

土器 第62図11・12が本址出土資料である。前者は縦位及び斜位にまばらな燃糸文の施された資料で、東関東系の諸磯a式期の所産と思われる。後者は櫛状施文具による条線文の確認できる胴部資料である。

●第77号土坑（第61図）

調査区西寄りに位置する。平面形は長径約1.5m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、覆土は2層に区分できた。底面は平坦である。

●第78号土坑（第61図）

調査区西寄りに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約0.5mの長方形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、覆土は2層に区分できた。底面は西寄りが浅く窪む。

●第79号土坑（第61図）

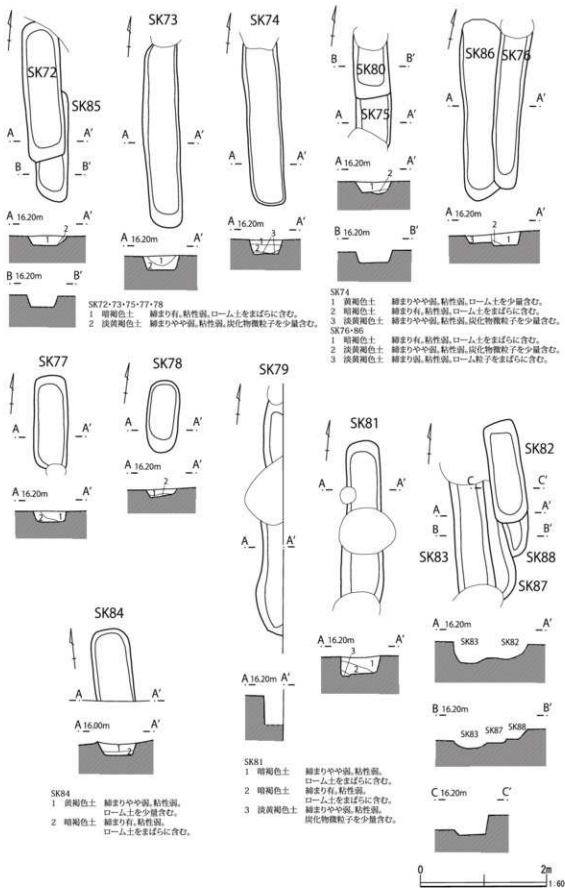
調査区東端に位置し、東半部は調査区外である。検出部のみで長径約3.6m、短径約0.4mを測る。確認面から底面までの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第62図）

土器 第62図13・14が本址出土資料である。前者は縦位の条線文の施された胴部資料、後者は無文の胴部資料である。

●第80号土坑（第61図）

調査区中央に位置し、第75号土坑を切る。平面形は長径約1.0m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。



第 61 図 第 72 ～ 88 号土坑

●第 81 号土坑 (第61図)

調査区南寄りに位置する。平面形は長径約2.4m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、覆土は3層に区分できた。底面は西寄りが浅く窪む。

出土遺物 (第62図)

土器 第62図15～17が本址出土資料である。15は内湾傾向を示す平縁の深鉢形土器の口縁部資料で、口縁外面に凹線1条が引かれる。以下は単節縄文が施される。16は肥厚口縁に縦位の差し切るような刺突が施された平縁土器である。後期後葉から晩期にかけての安行式に伴う粗製土器である。17は単節縄文の施された胴部資料である。

●第 82 号土坑 (第61図)

調査区北西寄りに位置し、第87・88号土坑を切る。平面形は長径約1.6m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第62図)

土器 第62図18～21が該当するが、重複する第83・87・88号土坑の一括資料である。18は内湾する無文の口縁部、19・21は無節縄文の施された胴部、20は2条の垂下沈線がみられる縄文地文の胴部資料である。

●第 83 号土坑 (第61図)

調査区北西寄りに位置し、第87号土坑を切る。平面形は長径約1.7m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第 84 号土坑 (第61図)

調査区南西端に位置し、南半部は調査区外である。検出部のみで長径約1.1m、短径約0.6mを測る。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、覆土は2層に区分できた。底面は平坦である。

出土遺物 (第62図)

土器 第62図22は無文の底部資料である。ほぼ平底と思われ、輪積から欠損している。

●第 85 号土坑 (第61図)

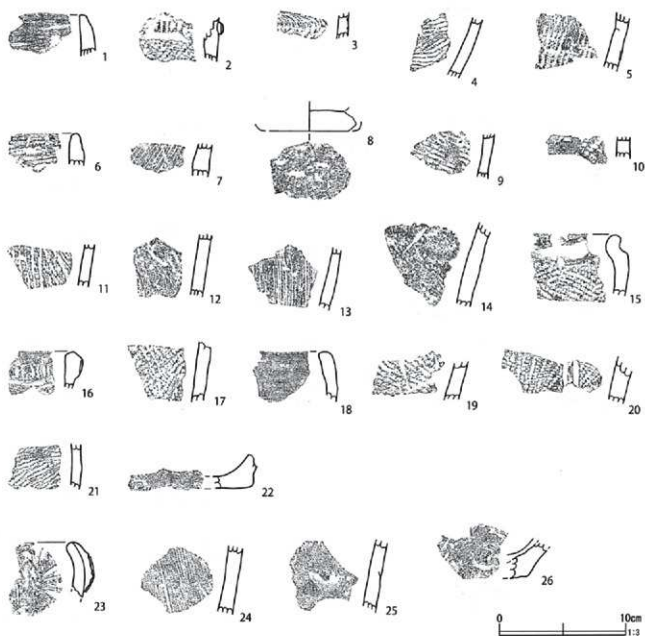
調査区北東寄りに位置し、第72号土坑に切られる。残存部で長径約1.7m、短径約0.5mを測る。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第 86 号土坑 (第61図)

調査区北寄りに位置し、第76号土坑に切られる。平面形は長径約2.9m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、覆土は分層できなかった。底面は平坦である。

●第 87 号土坑 (第61図)

調査区北西寄りに位置し、第88号土坑を切り、第82・83号土坑に切られる。残存部で長径約1.9m、短径約0.3mを測る。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。



第 62 図 第 19 地点出土遺物

第 88 号土坑 (第 61 図)

調査区北西寄りに位置し、第 82・87 号土坑に切られる。残存部で長径約 0.5m、短径約 0.4m を測る。確認面から底面までの深さは約 0.2m を測り、底面は平坦である。

(2) 調査区出土遺物 (第 62 図)

第 62 図 23～26 が該当する。23 は縦位の条線文を地文とし内湾する口縁部に縦位の貼り瘤を持つ資料である。前期後葉諸磯 c 式に比定できよう。24 は斜位の条線文を密に施す胴部資料である。25 は無文の胴部資料である。26 は無文の底部資料である。

IV 自然科学分析

1 山遺跡（第6地点）出土炭化材の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

山遺跡は白岡市白岡字山に所在し、縄文時代中期後半～後期初頭の住居跡、縄文時代早期の炉跡などが検出されている。住居跡のほとんどは縄文時代中期後半の加曾利E式土器を伴うものであり、後期初頭の称名寺式土器を伴うものは少ないとされている。今回の調査では、これらの住居跡の中で、縄文時代後期初頭の称名寺式土器を伴う住居の床面直上から採取した炭化材の放射性炭素年代測定を実施し、山遺跡における住居跡の年代に関する資料を得る。また、炭化材の樹種同定を行い、用材選択についても検討する。

2. 試料

試料は、第6地点の第5号住居跡の床面直上から採取した炭化材3点（No. 1・2・5）である。この中から、No. 1・5について放射性炭素年代測定を実施し、樹種同定に関しては全点行う。

3. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

1) 前処理

乾燥、粉碎したものを水に入れて、浮上してきたものを除去する。次に塩酸を加え、煮沸する。煮沸後、塩酸を水で充分洗い流し、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にする。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼させて二酸化炭素とし、アンモニア水に捕集する。これに塩化カルシウムを反応させ、純粋な炭酸カルシウムを回収する。

2) 測定試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成する。最終的に得られた合成ベンゼン5ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して5mlとした）にシンチレーターを0.075g加えたものを測定試料とする。

3) 測定

測定は、1回の測定時間50分間を繰り返し行う。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料を一緒に測定する。

4) 計算

放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用する。

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(1) 放射性炭素年代測定

第12表に放射性炭素年代結果を示した。出土炭化材の年代値はNo. 1が約4100年前、No. 5が約4000年前で、比較的近接している。

炭化材は、全て落葉広葉樹のクリに同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は1~4列、孔圈外で急激~やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。導管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1~15細胞高。

(1) 住居跡の年代について

出土炭化材の年代値は、約4100年～4000年前を示す。これは、キリー・武藤（1982）らによれば、縄文時代中期末または後期初頭に相当する値であり、発掘調査所見と調和的である。年代測定試料は、いずれも床面直上から採取した炭化材であり、住居解体後に焼却されたことが推定されていることから、住居構築材など住居とは関連性の高い試料と考えられる。従って、木が切り倒された年代である放射性炭素年代測定値は、住居が構築された頃の年代を示唆する可能性が高い。また、キリー・武藤（1982）の報告では、称名寺式土器に伴って出土した貝化石の年代値が約4100年前を示す。よって今回測定した年代値は、これまでの称名寺式土器に関わる年代データと一点ではあるがほぼ一致し、土器型式から示される年代観を放射性炭素年代測定で検証することができた。さらに上記のキリー・武藤（1982）では加曾利E式土器に伴って検出された炭化材および貝の年代値は約4100～4600年前を示すものが多い。今後は、遺跡の主体となっている縄文時代中期後半の加曾利E式土器を伴う住居跡の年代についても検証すること、山遺跡の住居跡の解析に有効な情報が得られると思われる。

第5号住居跡は、住居解体後に焼却されたことが推定されており、炭化材は焼却された住居構築材の一部と考えられる。樹種は、調査した3点全てがクリであった。クリ材は、強度や耐朽性に優れた材質を有し、住居構築材としては適材といえる。埼玉県内でも和光市丸山台遺跡群などで縄文時代の住居構築材にクリが確認されており（バリノ・サーヴェイ株式会社1992）、今回の結果とも調和的である。

ところで、関東地方では、これまで行われた調査結果から、縄文時代にクリの利用が多いことが指摘されている(千野1983、高橋・植木1994)。クリは、関東地方では台地上等の落葉広葉樹林に普通に見られる種類であるが、普通はクヌギ・コナラが優占し、クリが優占することはない。このような現在の生態と

クリの果実が重要な植物食糧となることから、縄文時代に収量を安定させるために管理栽培が行なわれ、収量の落ちた老木を用材として利用していた可能性が指摘されている（千野1983）。以上のことから、本遺跡周辺でも同様の方法でクリの利用が行なわれていた可能性がある。このことについては今後周辺でさらに資料を蓄積し検討したいと考える。

引用文献

- 千野裕道 1983 縄文時代のクリと集落周辺植生—南関東地方を中心に—, 東京都埋蔵文化センター研究論集, II, p. 25-42
- 石河寛昭 1977 『最新液体シンチレーション測定法』 南山堂, 189p.
- キーリ C. T.・武藤康弘 1982 縄文時代の年代, 「縄文文化の研究」縄文人とその環境, p. 246-275. 雄山閣
- 日本化学会編 1976 同位体, 年代測定『新実験化学講座10 宇宙地球科学』丸善, p337-353.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 1992 竪穴住居址の自然科学分析, 和光市埋蔵文化財調査報告書第5集「埼玉県和光市丸山台遺跡群Ⅰ—丸山台土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書—[本文編]」, p. 121-126, 和光市遺跡調査会・和光市教育委員会
- 高橋敦・植木真吾 1994 樹種同定からみた住居構築材の用材選択. PALYNO, 2, p. 5-18, バリノ・サーヴェイ株式会社
- 富樫茂子・松本英二 1983 ペンゼン—液体シンチレーションによる14C年代測定法. 地質調査所月報, 34, p. 513-527

第12表 放射性炭素年代測定及び樹種同定結果

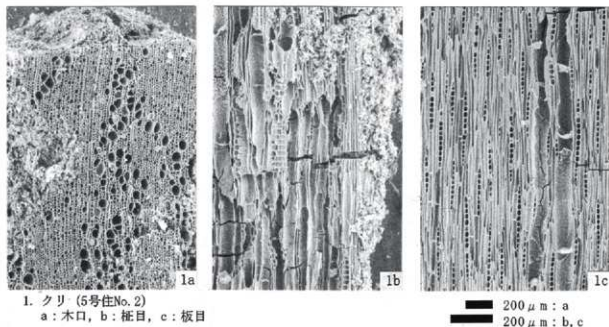
試料番号	試料の質	樹 種	年代値	誤 差		Lab-No.
			BP	+ σ	- σ	
第6地点 5号住 No. 1	炭化材	クリ	4100	90	90	PAL-827
第6地点 5号住 No. 2	炭化材	クリ	-	-	-	-
第6地点 5号住 No. 3	炭化材	クリ	3970	100	100	PAL-812

注

(1) 年代値：1,950年を基点とした値。

(2) 誤差：測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した。

(3) PAL：パリノ・サーヴェイ株式会社で測定。



第63図 炭化材

V 考察

1 山遺跡（第6地点）第5号住居跡について

1. 土器列による区画

第6地点で検出した第5号住居跡は、住居跡の外縁を弧状に巡るように11基の柱穴が配されており、その柱穴間を直線で結ぶように、縄文土器片が列をなして整然と並べられる。大部分の土器片は柱穴の内側に並んでいるが、P1・4・5・9周囲の土器片は、柱穴を除いて並べられていることから、柱と土器列は同時存在していたものと考えられる。住居内の空間は、土器列の内外で明確に区画されていたものと推定される。

調査時の所見によると、住居跡の壁際は遺物出土や焼土、炭化材の広がりが少ない。このことから、土器列の外側について意図的にテラス状に盛土を行い、住居跡壁際における土止めとして機能していた可能性が考えられる。ただし、こうした事例は、市内では初見であり、一般的な構造であったのかは定かではない。類例として、上尾市の山下遺跡第1次調査の第4号住居跡があげられる（山崎編1988）。称名寺式土器が出土した住居跡の張り出し部から壁に沿って4m程、土器片が並べられたように集中出土している。土器列は住居跡の北半部のみに認められ、南半部では確認されていない。土器列が住居跡の外縁を巡る柱穴の内側に認められる点も、山遺跡例と共通する点である。山下遺跡例は住居内の北部から東部を中心に、壁面にローム土のテラス状の高まりが認められている。土器列とテラスの範囲は必ずしも重ならない部分もあるものの、土器列を土止めとしての機能と結び付けて考える上では示唆的な事例である。同様なテラス状の高まりは、さいたま市の丸ヶ崎遺跡第1号住居跡でも認められているが、土器列は伴っていない（宮内・下村編1976）。

日高市の宿東遺跡A区第55号住居跡は北壁から東壁にかけて壁20～40cmで弧状に、顕著な礫の集積が認められ、礫に混在する形で縄文時代中期末葉から後期初頭の土器片が出土している（細田・渡辺編1998）。土器列自体が弧状に巡る訳ではないものの、壁際は礫や土器片によって区画する事例として参考になる。環礫方形配石遺構（鈴木1976）を意識して、礫を配すべきところを土器で代用したものとも考えられようか。環礫方形配石遺構の意義については、定見を得ているとは言えない部分もあるが、火入れを伴う事例が多く、住居の廃絶儀礼と結び付けて解釈されることもある（山本1985）。土器列と住居の焼失とを結び付けて考えるには根拠に乏しいが、山遺跡例も住居内に焼土が広がり、被熱を受けた遺物が出土している点は興味深い。

2. 土器と石棒の配置

第6点で検出した第5号住居跡中央部から、深鉢形土器上半が東側に横倒しで出土した。土器の東側には長さ50～60cmの石棒が出土した。被熱で割れ、表面が剥離し、先端が折れている。横転した土器の下には石棒の石片が散っていたため、ある程度火がまわって石棒が破裂してから、土器が倒れたものと考えられる。このことから、土器や石棒の設置後に住居跡が燃えたものと推定される。石棒の被熱状況から、先端を上部にして直立していたものが被熱を受け、割れるとともに床面に倒れたものと考えられる。

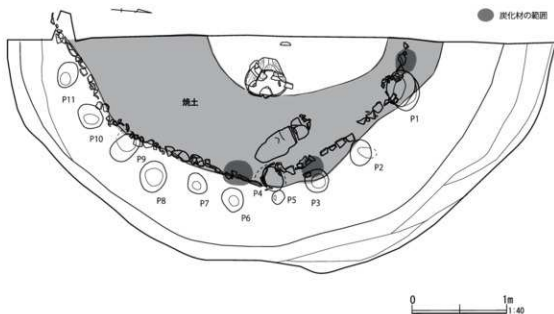
発掘調査時の所見では、第5号住居跡は柱の抜き取りを行った痕跡が認められることから、住居解体後

に焼却されたことが推定されている。住居跡の床面直上で採取された炭化材は住居構築材であった可能性が高い。なお、炭化材の年代については、第IV章の自然科学分析の報告のとおり、放射性炭素年代測定値は、4100年～4000年前を示している。年代は縄文時代中期末または後期初頭に相当する値であり、出土土器等による年代観とも調和的である。住居の廃絶に伴う焼却を行っていた場合、遺物の出土状況から住居跡中央部には土器と石棒を立てた状態で火をかけたことが窺える。

倒置状態で遺存する深鉢形土器、破壊・被熱した石棒等は、住居の廃絶にかかる「廃屋儀礼」と解釈されることもあり（山本2019）、先述の土器列が環状方形配石遺構に連なるものであるとした場合と同様に、住居廃絶時に行った何らかの祭祀行為を示すものと考えられようか。

引用文献

- 鈴木保彦 1976『環状方形配石遺構の研究』『考古学雑誌』第62巻第1号 日本考古学会
- 細田勝・渡辺清志編 1998『宿東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第197集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮内正勝・下村克彦編 1976『丸ヶ崎遺跡発掘調査報告 氷川参道並木調査報告』大宮市文化財調査報告第10集 大宮市教育委員会
- 山崎広幸編 1988『石神遺跡 山下遺跡―第1・2次調査―』上尾市文化財調査報告第31集 上尾市教育委員会
- 山本暉久 1985『いわゆる「環状方形配石遺構」の性格をめぐって』『神奈川考古』第20号 神奈川考古同人会
- 山本暉久 2019『住居の廃絶と儀礼行為』六一書房



第 64 図 第 5 号住居跡の出土遺物と柱穴の位置関係

写真図版



掘削作業状況 (1)



掘削作業状況 (2)



実測作業状況 (1)



実測作業状況 (2)

図版 2



第 6 地点調査区北半部全景



第 6 地点調査区南半部全景

第 1 号住居跡



第 2 号住居跡



第 3 号住居跡



图版 4



第 3 号住居跡遺物出土状況



第 4 号住居跡



第 4 号住居跡埋壘



第 5 号住居跡



第 5 号住居跡遺物出土状況



第 5 号住居跡焼土面検出状況

图版 6



第 6 号住居跡炉



第 1 号竖穴状遺構



第 2 号竖穴状遺構



第 1 号炉穴



第 2 号炉穴



第 3 号炉穴



第 4 号炉穴



第 5 号炉穴



第 6·7 号炉穴

图版 8



第 1 号土坑



第 2 号土坑



第 3 号土坑



第 4 号土坑



第 5 号土坑



第 11 号土坑



第 12 号土坑



第 13 号土坑



第 14 号土坑



第 18 号土坑



第 22 号土坑



第 25 号土坑

图版 10



第 29 号土坑



第 30・31 号土坑



第 36 号土坑



第 38 号土坑



第 40 号土坑



第 45 号土坑



第 51 号土坑



第 52 · 53 号土坑



第 56 · 57 号土坑



第 61 · 62 号土坑



第 66 号土坑



第 68 号土坑



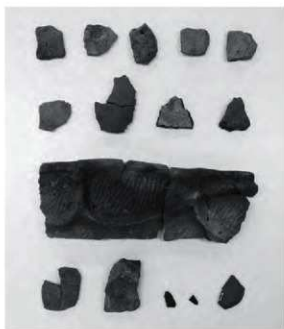
第1号溝跡



第1号溝跡土層断面



第1号不明遺構



第1号住居跡出土遺物 (第5図)



第2号住居跡出土遺物 (1) (第7図)



第2号住居跡出土遺物 (2) (第8図)

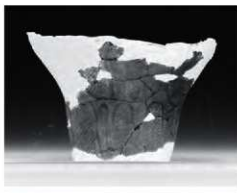
図版 14



第3号住居跡出土遺物 (1) (第11図)



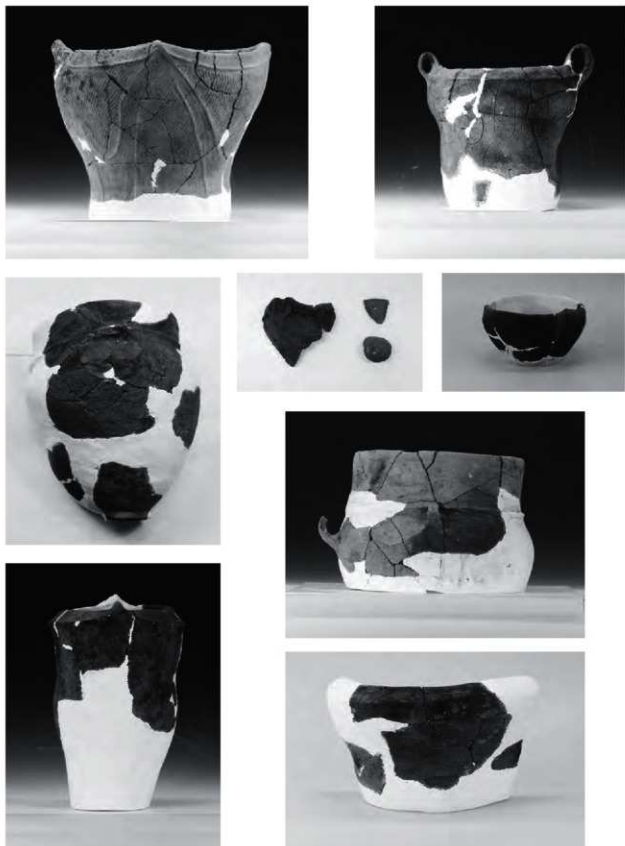
第4住居跡出土遺物 (第14図)



第3号住居跡出土遺物 (2) (第12図)



第5号住居跡出土遺物 (1) (第17図)



第 5 号住居跡出土遺物 (2) (第 18 図)

図版 16



第5号住居跡出土遺物 (3) (第19図)



竪穴状遺構・炉穴出土遺物 (第23図)



土坑出土遺物 (1) (第26図)



土坑出土遺物 (2) (第28図)



土坑出土遺物 (3) (第 30 図)



土坑出土遺物 (4) (第 32 図)



土坑出土遺物 (6) (第 35 図)



土坑出土遺物 (5) (第 33 図)

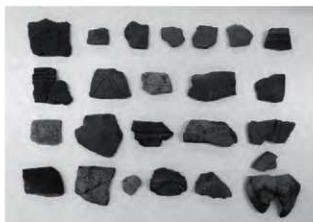
図版 18



土坑出土遺物 (7) (第 37 図)



溝跡・不明遺構出土遺物 (第 40 図)



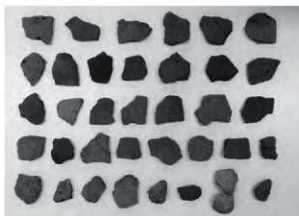
調査区出土遺物 (1) (第 42 図)



溝跡出土遺物 (第 39 図)



調査区出土遺物 (2) (第 43 図)



調査区出土遺物 (3) (第 44 図)



調査区出土遺物 (4) (第 45 図)



調査区出土遺物 (5) (第 46 図)



調査区出土遺物 (6) (第 47 図)



調査区出土遺物 (7) (第 48 図)

図版 20



調査区出土遺物 (9) (第 50 図)



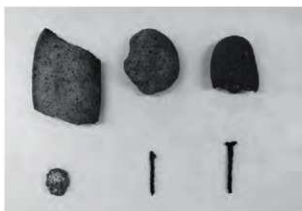
調査区出土遺物 (8) (第 49 図)



調査区出土遺物 (10) (第 51 図)



調査区出土遺物 (11) (第 52 図)



調査区出土遺物 (12) (第 53 図)



第 15 地点調査区北半部全景



第 15 地点調査区南半部全景

図版 22



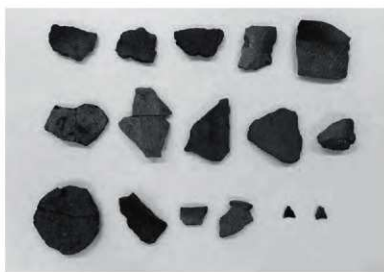
第 69 号土坑



第 70 号土坑



土坑・調査区出土遺物 (第 56 図)



調査区出土遺物 (13) (第 57 図)



第 16 地点調査区全景



第 7 号住居跡炉



第 71 号土坑



第 16 地点出土遺物 (第 59 図)

図版 24



第 19 地点調査区全景



第 72・73・79・85 号土坑



第 75・76・80・86 号土坑



第 19 地点出土遺物 (第 62 図)

報 告 書 抄 錄

[illegible]

白岡市埋藏文化財調査報告書第34集

山遺跡 (第6・15・16・19地点)

市内遺跡群発掘調査報告書XXXⅡ

令和7年3月28日印刷

令和7年3月31日発行

発行 白岡市教育委員会

印刷 華陽印刷株式会社